あの夏の日に

一　葉子と美和　一ページ
二　逆転する立場　一四ページ
三　羞恥の装い　二一ページ
四　母娘の朝　二七ページ
五　強まる絆　三七ページ
六　忙しい朝　四六ページ
七　お出かけ　五二ページ
八　同級生　五九ページ
九　新たな保護者　六九ページ
十　ささやかな後日譚　八三ページ

葉子と美和

それぞれの母親である藤田文子と山内孝子を見送って玄関のドアを閉めれば、広い家にいるのは葉子と美和の二人だけになってしまう。

葉子は文子の一人娘で、美和は孝子の一人娘。文子と孝子が姉妹どうしで、葉子と美和は従姉妹ということになる。加えて説明しておくと、文子と孝子は普通の姉妹ではなく、一卵性の双子だ。だから葉子と美和は、従姉妹というよりも、血の濃さから言えば姉妹と言った方が近いかもしれない。そのため顔つきや目鼻立ちなど、とてもよく似ている二人だ。

ただ、体つきはまるで真逆で、身長が一メートル四十センチあるかないかで胸も貧相な葉子とは対照的に、美和の方は一メートル七十センチを優に超える身長に加え胸が豊かな上に腰周りもしっかり張った体型をしており、よく似た顔つきで明らかな体格差のある二人が一緒に歩いていると、周囲からは、年の離れた姉妹、それも、本当は二つ上の葉子が幼い妹だと思われるのがすっかり当たり前のことになってしまっている。

そんな二人の祖母であり文子と孝子の母親である竹内清香が外出先で転倒し、緊急入院したのが一週間前のこと。幸いなことに頭部は打っておらず生命には別状ないが、脚を骨折していて手術と予後のリハビリのため当分の間は入院生活を強いられ、家（文子と孝子の実家）に残された父親・宏典（葉子と美和から見れば祖父）の身の回りの世話をする者がいなくなってしまうため、清香の付き添いやリハビリの介助と宏典の食事の用意や細々した家事のため、文子と孝子が実家に泊まり込むことになったという次第だ。職種は違えど、文子の夫も孝子の夫も頻繁な長期出張を余儀なくされる仕事に就いていて殆ど家にいないため、こちらの方は身の回りの世話は必要なく、実のところ、母親たちが家を空けるにあたって気がかりなのは二人の娘が自分たちだけで生活できるのかどうかという点だったが、それについては、学校が夏休みに入っていることもあり、美和の家で二人が家事を分担して共同生活を送り、生活態度に乱れが生じないよう互いに注意し合うよう言いつけて、文子と孝子は生家に向けて出発したのだった。

＊　＊　＊

「はーあ、やれやれだね。こんなこと言っちゃお祖母ちゃんにわるいけど、おかげで、母さんからあれこれ言われなくてすむからせいせいするよ。葉子姉ぇもそう思うでしょ？」

麦茶のグラスを二つダイニングルームのテーブルに並べて、美和が声を弾ませた。

「え？　う、うん、ま、そうね」
一方、葉子は少し曖昧に言葉を濁す。
「ね、だよね。でも、それはそうと、葉子姉ぇ、大丈夫なの？　受験生なのに一ヶ月近くも私の家で、勉強が疎かになっちゃわない？」
表面にびっしょり汗をかいたグラスを持ち上げ、少しばかり真剣な面持ちになって美和が言った。
「いいのよ、そんなこと気にしてもらわなくても。自慢じゃないけど、このあいだの模試じゃ第一志望のＳ大学、Ａ判定だったから余裕だし」
美和に余計な気を遣わせまいとしてだろう、葉子はおどけた様子でわざとらしく胸を張ってみせた。
「へーえ、すごいんだ。だったら大丈夫だね。でも、姉妹同然の私たちなんだから、何か困ったことがあったら遠慮なく言ってよね」
美和は麦茶を飲み干して、それまでの表情から一転、はなやいだ顔で頷いた。
「ありがとう。じゃ、自分の家だと思って気儘にさせてもらうね」
葉子が小さく相槌を打つ。

葉子はＭ高校の三年生で、美和は葉子と同じ学校の一年生。二人とも各々の父方の親類とは疎遠で、たった一人の従姉妹である美和を葉子は生まれた時から（自分もまだ幼い子供のくせに）あれこれと面倒をみて随分と可愛がっていた。そんなわけで美和も葉子に懐いて、何かと葉子の真似をするようになり、住んでいる場所が二駅ほど離れているため小学校と中学校は別々の学校だったが、高校への進学に際し、葉子が通っている学校を受験して、めでたく、仲のいい従姉妹どうしで先輩・後輩の仲になったのだった。
ただ、前述したように、二つ年下である美和の方がずっと体が大きく、二人一緒にいると、美和がしっかり者のお姉ちゃんで葉子が年の離れた妹というふうに周囲の目には映ってしまうのだが、実は、そのせいもあって二人の仲は今よりもずっと近づき、うんと濃密な間柄に変化してゆくことになる。
というわけで、さ、二人がどんな仲になってゆくのか、そっと見守ることにしようか。

＊　＊　＊

美和が昨夜から煮込んでいたカレーをきゃっきゃ言いながら二人で平らげ、予め宅配便で送っておいた着替え類を整理し、入浴の後ひとしきり談笑してから葉子が少し早めに来客用の寝室のベッドにもぐりこんで間もなく、ノックもなしにドアが開いた。
ベッドに横たわったまま小首をかしげる葉子の目に映ったのは、ネグリ

ジェ姿の美和だった。

「まさか、もう寝ちゃうんじゃないよね。母さんもいないし、せっかくの夏休みで早起きしなくていいんだから、もっといろいろ話そうよ、葉子姉ぇ」

部屋に入ってきた美和はすっとベッドに近寄って、葉子が体にかけている薄手の毛布をさっと剥ぎ取った。

「ちょ、やだ、急に何を……」

葉子が慌てて毛布を引っ張り返すのだが、美和は澄ました顔で

「二人でもっといろいろお話ししようよってば。私のベッド、外国製のクイーンサイズだから、二人でもちっとも窮屈じゃないんだよ。だから、ほら、私の部屋へ行こう」

と、もういちど毛布を剥ぎ取って、葉子の体を軽々と抱き上げてしまう。

「それにしても、葉子姉ぇ、可愛いパジャマ着てるんだね」

横抱きにした葉子をしげしげと眺め、うふふと美和は笑った。

「だって、仕方ないでしょ。小柄なせいで年相応のはぶかぶかで、普段の洋服も寝間着も、サイズが合うのは子供用しかないんだから」

微かに頬を赤らめ、ぽつりと葉子が言い訳をする。

肩口が丸っこいネグリジェ。お尻を隠せるか隠せないかの丈しかなくて、腿を紐で緩く締め付けるようになっているドロワースと組み合わせて身に着ける、淡いクリーム色の生地で仕立てた、幼い女の子向けのナイティだ。美和の言う通り、葉子は、年齢にそぐわない随分と可愛らしい寝間着に身を包んでいた。

「あ、お子ちゃま用のパジャマなんだ。だから、こんなに可愛いんだね」

悪戯っぽくにっと笑い、美和は

「それで、パジャマに合わせて下着もお子ちゃま向けのを選んだのかな。よく似合ってるよ、葉子姉ぇに」

と付け加えて、横抱きにした葉子のお尻をナイティのドロワース越しにぽんぽんと優しく叩いた。

「……！」

葉子の頬がますます赤くなって言葉を失う。

「自分じゃ気がつかないかもだけど、ドロワースの生地を透かして模様が見えてるよ。可愛い下着にプリントしてあるとっても可愛い模様がね」

美和は葉子の耳に唇を寄せて甘ったるい声で囁きかけて、もういちどお尻をぽんと叩いた。

「それに、模様が見えてなくても手触りですぐにわかっちゃうけどね。このぷっくりした感触、普通の下着じゃないよね」

言われて、葉子は慌てて顔をそむけた。横抱きにされているから、そむけた先に美和の胸がある。

そうと意識しないまま葉子は、美和の豊かなバストに顔を埋めてしまっ

ていた。
「うふふ、くすぐったい。でも、とっても気持ちいいよ、葉子姉ぇにそんなことしてもらうの。それに、私のおっぱいを欲しがる葉子姉ぇ、とっても可愛らしくて、ますます大好きになっちゃう。ほら、自分の目で見てみようか、自分がどんな可愛い格好をしてるのか」
葉子の横顔を見おろしてねっとりした口調で言いながら、部屋の隅に置いてある姿見の前に美和は移動し、大きな鏡に映る自身の姿が葉子に見えるよう体の向きを変えた。
おそるおそる葉子が鏡に目をやる。
鏡の中にいるのは、くるぶしまで丈がある清楚なデザインのネグリジェに身を包んだ大柄の女性と、女性の胸元に抱かれた、愛らしいナイティ姿の女の子だ。年の離れた姉妹と見る者もいるだろうし、ひょっとしたら、若い母親と幼い娘というふうに見る者さえいるかもしれない。いずれにしても、抱かれているのが本当は二つ年上の高校生だと言い当てる者など皆無にちがいない。
姿見に映る自分の姿から恥ずかしそうに目をそらして、葉子はますます深く美和の胸に顔を埋めてしまう。

＊　＊　＊

来客用の寝室を出て自分の部屋に戻り、ベッドの縁に腰かけた後も、いかにも愛おしそうに美和は葉子を横抱きにしたままだ。
いかにも愛おしそうに頬すりをして、いかにも愛おしげにお尻を優しく叩く。
「私、葉子姉ぇと一緒に寝るのを楽しみにしてたんだよ。なのに、さっさとお客様用の寝室に行っちゃうなんて」
葉子を横抱きにしたまま、美和は少し恨みがましい声で言った。
「だ、だって……」
そんなふうに言葉を濁すことしか葉子にはできない。
「うん、わかってる。本当は葉子姉ぇも私と一緒に寝たいんだよね。一つのベッドに二人、いろいろお喋りしながら寝落ちしちゃって、朝になってけらけら笑い合う、そんなことをしたいんだよね。――だけど、できないんだよね。一緒に寝て私のベッドを汚しちゃうのが心配で」
美和は穏やかな声で言った。
葉子の肩がびくんと震える。
「ゴールデンウィークのちょっと前くらいからなんだよね？」
美和は決めつけた。
葉子は押し黙ったままだ。
「伯母様――葉子姉ぇのお母さんがうちに来てお祖母ちゃんのことで母さんと相談してるのが聞こえちゃったんだけど、話の中に葉子姉ぇの名前と

か『夜が心配で』とかいうのが混ざっていることに気がついて、それでよくよく聞いていたら、なんとなく事情がわかってきてね。夜の失敗、ゴールデンウィークのちょっと前から始まったんでしょ？」

「……」

「おかしいよね。しっかり者の葉子姉ぇなのに、高校三年生にもなって夜の失敗が始まっちゃうだなんて。私、うっすらとだけど、まだ憶えてるよ。小っちゃい頃、二つ上の葉子姉ぇにとっても可愛がってもらってたこと。それに、私、おむつからパンツになるのがちょっと遅くて、お利口さんの葉子姉ぇと比べられて母さんからよくお小言をもらってたことも。なのに、その葉子姉ぇが高校三年生にもなって、またこんな恥ずかしい下着のお世話にならなきゃいけなくなるなんてね」

「……」

「だから、お水を飲むのを我慢してるんだよね？　母さん達が出て行った後、麦茶を出してあげても飲まなかったし、夕飯のカレー、わりと辛めの味付けだったのに、ちっともお水を飲まなかったし」

美和は言って葉子のお尻を自分の膝の上におろさせ、サイドテーブルに用意しておいたペットボトルを掴み上げて、冷たいミネラルウォーターを口にふくんだ。

それから美和は、自分の唇を葉子の唇に重ねた。

「んむ……」

葉子の口から言葉にならない声が漏れ、僅かに開いた唇から、美和が口にふくんだミネラルウォーターが少しずつ流れこむ。

「自分の家でも我慢してるんでしょうけど、うちじゃ余計に失敗しないよう、いつもよりずっと我慢してるんだよね？　だけど、ただでさえ汗をかきやすい季節にお水を我慢してちゃ体によくないよ。ただ、急に冷たいお水を飲むのも体にわるいから、こんなふうにしてお水をぬるくして飲ませてあげる。今まで我慢してたぶん、たっぷり飲むといいよ」

ミネラルウォーターを口移しで葉子に飲ませて、美和はにんまり笑った。

一口分しかない水なのに、喉が潤って清涼感が身体中に染みわたる。けれど、それも僅かな間だけ。

葉子は口を半開きにして、すがるような目で美和の顔を見上げた。

いつにもまして水分を摂らないよう我慢しているせいで喉がひりひりに渇いている。そこへ与えられた、思いもしていなかった水。一口だけの水が却って渇きを意識させる。

餌を求める雛鳥の小さな嘴さながら、葉子の半開きの唇が小刻みに震える。

「いいよ、もっと飲ませてあげる」

美和は再びミネラルウォーターを口にふくんで葉子と唇を重ねた。

口の中にとろっと水が流れ込むたび葉子の喉がぐびりと動いて、せがむような目で美和の顔を振り仰ぐ。

葉子の目を正面から覗き込みながら口移しで水を飲ませる美和の瞳が妖しく輝く。

＊　＊　＊

そんなことを何度か繰り返した後、美和は、手にしていたペットボトルをこれ見よがしに自分の口から遠ざけた。

葉子の目が物欲しそうにペットボトルを追う。

美和はネグリジェの胸元を大きくはだけ、あらわになった豊かな乳房の上でペットボトルをそっと傾けた。

ミネラルウォーターが乳房の表面を伝い流れ、乳首の先からぽたりぽたりと雫が落ちる。

しばらくの間その様子を躊躇いがちな目で見ていた葉子だが、いよいよ我慢できなくなって、唇の間から真っ赤な舌をちろっと覗かせ、美和の胸元にそろりと顔を近づけた。

美和の乳首から滴り落ちる水滴を葉子は舌の先でそっと舐め取り、そして、おそるおそるといった様子で唇を美和の乳首に押し当て、少しだけ逡巡した後、綺麗なピンク色の乳首を口にふくんだ。

美和の背中がぞくりと震えて下腹部がきゅんと疼く。

美和は胸の高鳴りを覚えつつ、葉子の背中を支えていた手をそっと離した。

体の自由を取り戻した葉子は、けれど美和から離れようとはしない。それどころか、離れまいとして美和の体に両腕を絡みつけ、乳首をますます強く吸う。

美和は左手で自分の乳房にミネラルウォーターの雫を垂らしながら、右手で葉子の股間をまさぐった。

普通の下着とは明らかに異なる厚ぼったい感触がドロワース越しに伝わってくる。

「や、やだ。そんなことされたら……」

葉子が力なく訴えかける。

美和の乳首を吸いながらだから、くぐもった声だ。

「どうなっちゃうの？　そんなことされたら、どうなっちゃうのかな？はっきり言わなきゃわからないわよ」

美和は葉子の股間をまさぐり続けながら、ねっとりした口調で囁きかけた。

「……いじわる。美和ちゃんのいじわる」

下半身をくねらせて葉子は喘ぎ声を漏らす。

「感じちゃうんだよね？　こんなことされて、気持ち良くなっちゃって、いやらしいお汁でお股がぬるぬるになっちゃうんだよね？」

甘ったるい声で美和は尚も囁きかけた。
「……」
「恥ずかしいことなんてないよ。葉子姉ぇや私みたいな年頃の女の子だったらみんなこんなことして楽しんでるんだから。あ、でも、ひょっとしたら葉子姉ぇはしたことないのかな？　だったら、私が悦ばせてあげる。私がちゃんと楽しませてあげるから、葉子姉ぇはじっとしとくといいよ」
美和は含み笑いを漏らした。
「……」
「いいんだよ、ちっとも怖いことなんてないんだから、私のおっぱいをちゅうちゅうしながらじっとしていれば。それに――」
葉子の秘部とおぼしきあたりに美和はドロワースの上から中指を突き立てた。
「ん……」
葉子の口から呻き声とも喘ぎ声ともつかぬ艶めかしい声が漏れ出る。
「――お股がぬるぬるになって、普通のショーツだったら外側へ染み出してドロワースまでべとべとになっちゃうけど、葉子姉ぇが今穿いているのだったら、そんな心配しなくていいんでしょ？　だから、ほら、うんと気持ち良くしてあげる」
意味ありげに美和は言って、ドロワースの上から突き立てた中指で葉子の敏感な部分を淫らに責めたてる。
熱い吐息が葉子の口を衝いて出て、とろとろ溢れ出した恥ずかしいお汁が『下着』の内側をねっとり濡らす。
けれど、美和が言う通り、愛汁が『下着』から染み出してドロワースを汚すことはない。
その筈だ。葉子がドロワースの下に着けているのは普通のショーツではなく、紙おむつなのだから。

葉子は、おむつが外れるのが早かった。それに、まわりに気遣いもできるしっかりした子だった。
そんな葉子が高校三年生にもなって『夜の失敗』つまりおねしょをしてしまうようになったのは、この春。もうすぐゴールデンウィークが始まるという四月の終わり頃だった。最初の数度はなんとかごまかしていたが、いつ治るともしれないおねしょをずっと隠し通せるものではない。五月の半ばくらいに母親である文子に気づかれ、こんこんと説得されて泌尿器科を受診したのだが異常は見当たらず、心因性のものである可能性が高いと判断されて、定期的に通院しつつ様子見ということになった。
当座は就寝時に敷布団の上にバスタオルを敷くといった措置を試みていたが、幼児のおねしょとは違って（小柄とはいえ）高校生の夜尿はおしっこの量が多く、布団を濡らしてしまうことが多かった。そのため、遂には母親の手で半ば強引に紙おむつを着用させられる羽目になったのだが、小

柄なだけでなく全体に線が細く華奢な葉子だから、大人用の紙おむつだと一番小さなサイズでも腿まわりが緩くておしっこが漏れ出てしまうことが多く、あれこれと試した結果、或るメーカーのテープタイプの子供用紙おむつのスーパービッグサイズなら大丈夫ということがわかり、以来、眠る時には可愛らしい模様がプリントされた紙おむつを着用することが習慣になったのだ。それも、自分で紙おむつを着用したら腿まわりのギャザーがちゃんとしていなくても気がつきにくくて横漏れしてしまう心配があるからと、寝る前に母親の手でおむつを当ててもらうという恥ずかしい習慣に。

小さい頃はまわりの子たちよりも発育が良く、しっかり者でお利口さんだった筈の葉子が、長じてからは同年代の少女たちの中でも目立って小柄で、しかもこの日を堺に、『夜の失敗』つまりおねしょで毎晩おむつを汚してしまう手のかかる子に変貌してしまったのだった。

「うふふ。私、上手でしょ？　だって、こんな日が来ることを待って、葉子姉ぇをどんなふうに悦ばせてあげようか、ずっとずっと考えていたんだもの」

熱に浮かされたように美和は言い、秘所を責めるのをいったんやめて、ドロワースを葉子の膝あたりまでそっと引きおろした。

可愛らしい模様をプリントした幼児用のテープタイプの紙おむつがあらわになる。

いつもは母親に着けてもらっているのが今夜は自分で当てて着け具合をきちんと確認できていないせいだろう、ところどころギャザーがちゃんと立っていないのが見て取れる。

「パンツタイプと比べてテープタイプは自分で着けるのが難しいみたいね。いいわ、あとで私がちゃんとしてあげる。はっきりとは憶えてないけど、小っちゃい頃、私、葉子姉ぇにたくさんお世話してもらったんだよね？だから、お礼に、今度は私が葉子姉ぇのお世話をしてあげる」

葉子の下腹部をしげしげ眺めて美和は穏やかな声で言い、にまっと笑って

「でも、それは後のことだよ。今は、気持ち良くしてあげる。小っちゃい頃、泣いてる私をあやしてくれて、きゃっきゃ喜ぶまで遊んでくれた葉子姉ぇを、今は私が悦ばせてあげる」

と続けて、紙おむつの股ぐりに手を差し入れた。

途端に葉子の体がびくんと震える。

「葉子姉ぇは何もしなくていいよ。何もしないで、私のおっぱいをちゅうちゅうしていればいいんだよ。気持ちいいことは私がちゃんとしてあげるから」

それまではドロワースと紙おむつ越しだったのが、今度は紙おむつの股ぐりから差し入れた手で葉子の恥ずかしい部分を直接いじる美和。

美和と目を合わせまいとして豊かな乳房に顔を埋め、ぴんと勃った乳首

を吸う葉子の下腹部は美和のなすがままだ。
美和のなすがまま、感じやすいところを巧みな指使いで責められ、いやらしいお汁でしとどにお股を濡らし、溢れ出る蜜汁で紙おむつの内側をねとねとに濡らすばかりの葉子。

＊　＊　＊

どれくらいの時間が経ったろう。
激しい絶頂を迎える男女の愛の営みとは違う、明確な終わりのない女性どうしのまぐわい。
ぜぇぜぇと熱い息を吐くばかりの葉子の耳許に美和は
「私は葉子姉ぇだけを見て生きてきたんだよ。生まれた時にはもう葉子姉ぇがいて、生まれたばかりの私を可愛がってくれて、それからずっと私のお世話をしてくれて、私の目にはいつも葉子姉ぇが映っていて。でも、葉子姉ぇにしてみれば、私なんて、まわりの人間の中の一人ってだけ。葉子姉ぇは私が生まれる前、私がいない世界を二年間も見てきたんだよね。なのに、私は葉子姉ぇがいない世界なんて知らない。――そんなの、ずるいよね？」
と囁きかけながら、敏感な部分の肉壁を指先で執拗に撫で摩る。
「だから、葉子姉ぇにも私だけを見てほしいんだ。私がいない世界のことなんて忘れさせて、私がいる世界でしか生きていられないようにしてあげる。あ、勘違いしないでよ。私、葉子姉ぇのこと、憎らしいだなんてちっとも思ってないからね。憎らしいどころか、大好きなんだよ、葉子姉ぇのこと。だから、私しか見てほしくない。私がいない世界のことなんて忘れさせたい。だから私、葉子姉ぇを悦ばせてあげる。私を可愛がってお世話してくれた葉子姉ぇを今度は私が可愛がってお世話してあげるんだ。そうして、今日から私が葉子姉ぇを独り占めしてあげる」
美和はすっと目を細め、唇の端を吊り上げるような笑みを浮かべた。
ひどく淫靡な笑みだった。
美和が自分の乳房に滴らせたミネラルウォーターはもうすっかりなくなってしまっている。それでも葉子は乳首から口を離せない。
「気持ち良くなって、下半身の力が抜けて、お股が緩くなって、それで出ちゃいそうなんでしょ？　出ちゃいそうで、それを意識しないでおこうとして私のおっぱいをちゅうちゅうしてるんでしょ？　おっぱいに意識を集めて、出ちゃいそうなのを我慢してるんだよね？」
美和は左手を葉子の顎先にかけ、葉子の唇を自分の乳房から引き離した。
「ああ、ううん、出ちゃいそうなのを我慢してるだけじゃないかな。お股から溢れ出したいやらしいお汁のせいで紙おむつの内側がとろとろぐちょぐちょになっちゃって気持ちわるくて、その気持ちわるいのも我慢してるのかな。大変だね、二つも一緒に我慢しなきゃいけないことがあって」

美和は紙おむつの股ぐりから手を抜き、愛液にまみれてぬるぬるになった指先を葉子の目の前にかざした。
葉子がのろのろと目をそらし、ぷるぷると力なく首を振る。
「でもね、我慢なんてしなくていいんだよ。我慢なんてしないで、出しちゃえばいいんだよ、おしっこ。喉が渇いてたからお水をたくさん飲んで、もう出ちゃいそうなんだよね。だったら、出しちゃえばいいんだよ。いやらしいお汁はねばねばしてて紙おむつの不織布に染みこみにくいから気持ちわるいけど、おしっこを出しちゃえば、おしっこと一緒に紙おむつが吸い取ってくれるよ。それに、おしっこを出しちゃえばすっきりするし。だから、ほら、いつまでも我慢してないで出しちゃおうよ」
「い、いや……トイレ、おしっこはトイレで……」
葉子は震える声で訴えかける。
だが、それに対して美和は
「そんなこと言うけど、トイレへ行くのは無理なんじゃないかな。気持ち良すぎて脚に力が入らなくて歩けないんじゃないかな、今の葉子姉ぇ。それに、いいじゃない、トイレなんか行かなくても。毎晩のことだから、おむつを汚すのは慣れっこの筈だもん」
と言い、葉子の反応を楽しむかのように少し間を置いて
「それに、葉子姉ぇ、おむつを汚すところを私に見てほしいんでしょ？だから、ほら」
と、うっすら笑って付け加えた。
「そんな、そんなこと……」
葉子は狼狽えた表情で言葉を濁す。
「ごまかさなくていいよ、私にはわかってるんだから」
短い無言の時間の後、目を伏せる葉子の顔を見おろして美和が言った。
「私に気づかれないよう、私がお風呂に入っている間にこっそりおむつを着けたんだよね？　でも、そのまま寝ちゃわないで、少しだけ私とお喋りをした。どうしてわざわざそんなことをしたの？　それも、うっすらとだけど紙おむつの模様が透き通って見えちゃうような薄手のパジャマで。それに、母さん達を見送った後の麦茶とか、辛いカレーを食べる時のお水とか。おねしょの心配を減らすために水分を摂るのを控えて、麦茶もお水も飲まなかった？　ま、それもあるんでしょうけど、それにしても、私が不思議がらないように、飲むふりだけでもすればよかったんじゃないかな。麦茶もお水もわざとこれみよがしに飲まないようにしてたら、私、何かあるのかなって考えちゃうよ。――葉子姉ぇ、私に気づいてほしかったんでしょ？　おむつのこと私に気づいてほしくて、私が気がつくようにそれとなく仕向けたんだよね？　気づいた私におむつのお世話をしてもらいたくて」
「な、なにを馬鹿な……」

抗弁しかけた葉子だが、あとが続かない。
「ちっとも馬鹿なことじゃないよ。私が生まれた時に目の前にいて、それからずっとずっと目の前にいてくれる葉子姉ぇのことで私がわからない事なんてあるわけがない。私にはわかるんだ。葉子姉ぇがどんな無気持ちでいて、どんな思いを抱えていて、どんなふうにしてもらいたがってるか、みんな私にはわかるんだよ。一卵性双生児どうしの母さんたちから生まれた葉子姉ぇと私の間だもん、わからないわけがないよ」
言葉通り胸の内まで全てを見透かしてしまいそうな目で再び葉子の顔を見おろして美和は言った。
もう葉子は何も言い返せない。

＊　＊　＊

「もういちど抱っこしてあげる。抱っこして、おっぱいをちゅうちゅうさせたげる」
美和は、押し黙ってしまった葉子の体を再び横抱きにして、乳首を葉子の唇に押し当てた。
「葉子姉ぇ、小っちゃい頃からいい子でお利口さんだったんだよね。ううん、お利口さんでいようとしたんだよね。お父さんとお母さんに仲良くしてもらいたくて」
横抱きにした葉子の顔を覗き込むようにして美和は、それまでの熱に浮かされたかのような口調から一転、穏やかな声で話しかけた。
「葉子姉ぇのお父さんとお母さん、どことなく他人行儀だよね。喧嘩するわけでもないし、お互いに無視し合うわけじゃない。でも、なんだかよそよそしくて、家族じゃないみたいで、作り笑顔で喋っていて、しっくり溶け込めなくて。――うちも同じだから、そんなお父さんとお母さんを見て葉子姉ぇがどんな気持ちになるか、私にもよくわかるよ」
美和は、ドロワースを膝まで引き下げてあらわになったままの紙おむつの上から労るような手つきで葉子のお尻をぽんぽんと叩いた。

感受性が豊かと言えば聞こえはいいが、物心つく前から葉子は、まわりのことを気にしすぎるきらいがあった。まだ年端もゆかぬ頃から両親の間に流れる寒々しい空気に気がついていて、ひょっとしたらそれが自分のせいなのではないかと怯えてもいた。自分がお利口にしていないから両親の仲が良くないのではないかと心配し、自分が母親の言いつけを守らないから父親が母親を責めて、それで両親の仲がよそよそしいのではないかと気になり、自分が周囲のことに気遣いできていないから母親が育児にかかわるよう父親に求め、それで両親の間にわだかまりができたのではないかと心を痛め、もっとしっかりしなきゃと自分に言い聞かせて育ってきた葉子。
そして、それとは裏腹に、自分はいつまでも幼い子供のままでいる方が

いいのではないかという思いを心に抱く葉子でもあった。自分が成長し手がかからなくなれば、その時点で母親と父親とは共通の接点を失い、別離の途を選ぶのではないかという不安を覚え、だったら自分はいつまでも両親の手を煩わせる幼児でいるべきなのではないかと子供心ながらに思案して（そんなふうに、成長することを幼心に怖れた葉子は成長の糧を拒んで自分でも気づかぬうちに食が細くなり、生育具合も悪化した。元は発育の良かった葉子なのに、現在は背が低く体つきが華奢なのは、持って生まれた体質のせいもあるが、無意識のうちに成長を拒んでまともに食事を摂らなかったことが原因の一つになつているのかもしれない）。

そのように相反する思いがせめぎ合い千々に乱れる葉子の心を癒やしてくれたのが、二つ下の従妹である美和の存在だった。両親の不仲に起因する不安から逃れようとして、葉子は、生まれてすぐの美和にべったりになり、自分もまだ幼いくせに甲斐甲斐しく面倒をみてやり、ひたすら可愛がった。一点の曇りもない瞳がきらきら輝くのを見たくて、丸っこい頬が緩んできゃっきゃと笑う様子を見たくて、微塵の邪気もなく甘えてくれる愛くるしい仕草を見たくて、ただ夢中に。

そんなふうにして、美和の存在を唯一の支えにして生きてきた葉子だったが、相反する気持ちを抱えたまま長きにわたってしっかり者のお利口さんでい続けるのは、精神的な負担があまりに大きかった。どうすればいいのか迷い続けながらいい子を装う気力はもう萎えそうになっていた。

そうしていよいよ心が悲鳴をあげそうになった時、葉子が通っているM高校に美和が入学してきたのだが、受験勉強の妨げにならいよう一年ほど会わずにいた美和は、その間に成長期を迎えたのだろう、葉子よりもずっと背が高く、胸も豊かになっていた。もはや美和は、愛くるしく人なつっこい『少女』ではなく、恵まれた体と一つ一つの立ち居振る舞いからは母性さえ感じ取れるような『女性』へと変貌を遂げていた。

そんな美和と毎日のように学校で接しているうちに、いつしか、疲れ果てた葉子の心は、美和に救いを求めるようになっていた。――私、もう駄目かもしれない。私がどんなに頑張っても、母さんと父さんの仲は冷えきったままなんだよ。どうすればいいのか、もう私にはわからないよ。なのに、どうして美和ちゃんはそんなに明るいの？　どうして美和ちゃんは、そんなに屈託のない笑顔になれるの？　私、どうすればいいの？　ね、教えてよ、美和ちゃん。私を助けてよ、美和ちゃん。小っちゃい頃、私、美和ちゃんをうんと可愛がってあげたよね。だから、今度は美和ちゃんが私を助けてよ。お願いだから、美和ちゃん。

一卵性双生児どうし、同じようなタイプの男性を伴侶として選び、同じような夫婦関係を築くのだろうか、実は、葉子の両親と同様に美和の両親の仲も寒々していた。険悪というのではなく、いさかいがあるわけではなく、ただ他人行儀でよそよそしい夫婦関係。そのことを葉子も知っていた。なのに、同じ境遇にありながら、美和は思い詰めた表情を浮かべることな

どなく、屈託のない笑顔で奔放に振る舞っている。いい子でいようとしてその重圧に耐えられなくなってしまった葉子が、自らの成長を拒むことで両親の仲を取り持とうとする心のもう一方の動きに逆に飲み込まれ、胸の内の苦悩から逃れようとして、かつては世話をやいて可愛がってやり長じて今は自分とは対照的に軽やかに生きる美和に助けを求め、すがろうとするのは、ごく自然な感情の流れなのかもしれない。

だが、二つ下の（そして、明るく振る舞ってはいても心の中では自分と同じような苦悩を抱えているかもしれない）従妹に対して、言葉に出して救いを求めることはできない。

葛藤の末、葉子の心が美和に向けて発した無言のＳＯＳこそが、夜尿、つまり、おねしょだった。二つ下の従妹よりも自分を無力な存在に堕とし、二つ年下の従妹に庇護を求める悲痛で無言の訴え。――助けてよ、美和ちゃん。どうしていいのかわからなくて、それで、こんな恥ずかしい失敗をするようになっちゃった私を助けてよ。どうしたら美和ちゃんみたいな笑顔でいられるのか教えてよ。じゃなきゃ私、ずっとずっと、毎晩の恥ずかしい失敗をやめられなくなっちゃうよ。だから、お願いだから。

無言の訴えを美和に届けるのは容易なことではない。けれど、それを僥倖と表現していいものかどうか危ぶまれるところではあるが、祖母の怪我をきっかけに葉子と美和が一つ屋根の下、二人きりで過ごす時間に恵まれることになった。もう二度と訪れることのないかもしれない機会を見逃すことはできない。葉子は、自分が恥ずかしい夜の失敗をしてしまうことを美和に告げる決心を固めた。とはいえ、あからさまに言葉で伝える覚悟まではできない。だから葉子は、言葉によらずに気づいてもらえるよう、それとなく仕向けたのだった。

心に直接染み入るような声で話しかけ、しばらくの間、自分の乳首を葉子が吸う様子を満足そうに眺めてから美和は
「じゃ、おっぱいはこれくらいにして、おむつをちゃんと当て直そうね。もういつ出ちゃうかわからないんだから急がなきゃ」
と言ってベッドの縁から真ん中あたりへ移動し、葉子をシーツの上に横たえさせた。
それから、さっきと同じように葉子の顎先に指をかけて乳首から唇を引き離し、葉子の足元の方へ場所を変えてベッドの上で膝立ちになり、紙おむつのテープを剥がす。
「い、いや……」
葉子は力なくかぶりを振るばかりだ。
「駄目だよ、ちゃんとしとかなきゃ、太腿のところからおしっこが漏れちゃうんだから。大好きな葉子姉ぇのおしっこでお布団が濡れても私は平気だけど、脚やドロワースを濡らしちゃったら気持ちわるくて葉子姉ぇが可哀想だもん」
美和はあやすように言い、膝までおろしていたドロワースを更に足首まで下げて、葉子の両脚を少し開きぎみにさせて軽く膝を立てさせ、テープを剥がした紙おむつのフロント部分を両脚の間に敷き広げて、サイド部分をお尻の両側に広げた。
「あ……」
紙おむつに包み込まれて蒸れていた下腹部にエアコンがよく利いた空気が触れて、葉子は思わず喘ぎ息を漏らしてしまった。
そして次の瞬間、はっとした顔になって、あらわになった股間を両手で覆い隠そうとする。
けれど、遅かった。
「ふぅん、きちんと手入れしてるんだ。自分でしてるの？」
一瞬だけ晒け出した下腹部の様子を目敏く見て取った美和が悪戯っぽい口調で訊ねる。
「……通院している泌尿器科で……ちゃんとしとかないとおしっこの雫が残って、お肌が荒れるからって……」
おどおどした様子で葉子は答えた。
葉子が両手で覆い隠す寸前、美和の目に映ったのは、無毛の下腹部だった。
葉子は、愛液にまみれてぬるぬるになっている恥ずかしい股間を見られまいとして慌てて両手で隠したのだが、それ以上に美和の目に晒すのを阻もうとしたのが、一本の飾り毛もない童女のような下腹部だった。

「よかったね、おむつかぶれにならないよう気遣ってくれる、よく気がつくお医者様がかかりつけで」
葉子が『お肌が荒れる』と表現したのを、わざと『おむつかぶれ』と言い換えて、美和はすっと目を細めた。
それから
「さ、おむつを当て直すのに邪魔になるから、両手はこうしておいてね」と言って葉子の手を体の両側に押しやって、紙おむつのフロント部分とサイド部分を軽く引っ張って皺を伸ばし、丁寧にギャザーを立てた。
「ん、これでいいわね。じゃ、もういちど当てるからおとなしくしているのよ」
紙おむつの具合を確かめた美和は、葉子の両脚を更にもう少し広げさせ、フロント部分を両脚の間に通して股間を覆い包み、その上に左右のサイド部分を重ね合わせてテープを留め直した。
「や……」
おむつの内側にべっとり付着している愛汁が下腹部の肌を更にぬるぬるに汚し、その不快感に葉子が悲鳴じみた呻き声を漏らす。
「さっきも言った通り、おしっこを出しちゃえばいいんだよ。そしたら、おむつが吸い取ってくれてすっきりするから」
おむつを当てた後のギャザーの乱れを整えながら、なんでもないことみたいに美和が言う。
「……」
「ちゃんとしてあげたから、本当にいつ出しちゃってもいいんだよ」
葉子の足元を離れて美和は葉子の傍らに体を横たえると、葉子の頭の下に左手を差し入れて腕枕にし、そっと顔を近づけて唇を重ねた。
「……！」
思いもしていなかった状況に、葉子は声を発せない。
口移しで水を飲まされた時とはまるで違う、本格的なキス。
重なり合った唇から美和の舌が押し入って葉子の舌を搦め取った。

葉子の目がとろんとする。
全身の力が抜けてゆく。
「私、女の子しか好きになれなくてさ。中学生の頃から何人もの女の子とキスしたりしてたんだ。でも、とっておきのキスは葉子姉ぇのために取っておいたんだよ。他の子とのキスはみんな挨拶代わりの軽いキス。ちゃんとしたキスは、これが初めてなんだよ。でも、取っておいたぶん、とっても濃厚なキスになっちゃうんだよね」
美和は少しだけ唇を離して告げた。
唾液の細い糸が照明に燦めいて二人の唇を繋ぐ。
告げた後、再び美和は葉子と唇を合わせた。
ついさっきよりもずっと入念にずっと淫らに舌が蠢いて葉子を夢見心地

にさせる。

下腹部からも力が抜け去って尿道口がじゅんと濡れ、紙おむつの内側がじわっと湿る。

「いいよ、そのまま出しちゃって。これまで我慢できて、葉子姉ぇはお利口さんだね」

気配を察した美和がドロワースの上から葉子の股間にそっと掌を押し当て、唇を重ね合わせたままのくぐもった声で優しく言う。

美和が口にした『お利口さん』という言葉を耳にした途端、葉子はびくんと肩を震わせた。

肩を震わせて

「私、お利口さんなんかじゃない。私、いい子なんかじゃない。私、しっかりなんてしてない」

と金切声をあげて、濃厚なキスのせいで力の入らない両手にもかかわらず、美和の体を押しやった。

私、いい子なんかじゃない。だって、私がどんなに頑張っても母さんと父さんの仲は変わらないだから。

「そうなんだ。葉子姉ぇはお利口さんでもいい子でもないんだ。でも、それでいいんだよ。無理していい子でいる必要なんてないんだよ。我儘言って、自分の思い通りにならなかったら泣き喚いて、誰の言いつけも聞かなくて、そんなふうにしていいんだよ。葉子姉ぇ、小っちゃい頃から私のお世話をして可愛がってくれたよね。でも今は葉子姉ぇ、我儘放題の子供に戻っていいんだよ。我儘ばっかりの聞き分けのわるい子供に戻った葉子姉ぇを今度は私がお世話して思いきり可愛がってあげるから」

美和は穏やかな笑みを浮かべてベッドの上に正座し、葉子の体を抱き上げてお尻を自分の腿の上に載せさせ、これまでにも増してぴんと勃った乳首を口にふくませた。

「私のおっぱいをちゅうちゅうしながら出しちゃいなさい。もう我慢なんてしないで、おしっこ、たっぷり出しちゃいなさい」

大柄の体から発せられる慈しみに満ちた美和の声が心地いい。

葉子の腰がぶるっと震える。

「……おむつに？」

乳首を咥えたまま葉子は上目遣いに美和の顔を見上げておそるおそる訊いた。

「そうだよ、おむつにするんだよ。葉子姉え、私にお世話してもらいたいんでしょう？　だから、おむつにしちゃおうね」

美和は葉子の股間から右手を離し、背中をとんとんと優しく叩いて言い聞かせ、

「葉子姉ぇはおむつの赤ちゃんなんだから」

と穏やかな声で付け加えた。

「……赤ちゃんじゃない。私、赤ちゃんなんかじゃない。私、美和ちゃんよりも二つ上のお姉さんなんだから……」
美和の乳首を吸いながら葉子は小さくかぶりを振って、けれど甘えた口調でおずおずと言った。
待つほどもなく、紙おむつのおしっこサインの色が変わる様子が、ドロワースの薄い生地を透かして美和の目に映る。

＊　＊　＊

「出ちゃった？」
美和が静かに訊ねた。
美和と目を合わせまいとして豊かな乳房に顔を埋め、葉子が小さく頷く。
「これで今日から葉子姉ぇは私の赤ちゃんだよ。だって、私のおっぱいをちゅうちゅうしながらおむつを汚しちゃったんだもん。それも、おねしょじゃない、目が覚めている間のおもらしで。だから、二つ年上でも赤ちゃんなんだよ」
にっと笑って美和は決めつけた。
葉子は何も言い返せない。
「葉子姉ぇは赤ちゃんだから、私は葉子姉ぇのこと、『葉子』って呼び捨てにする。いいよね？　じゃ、葉子は私のこと、なんて呼べばいいのかな？　うふふ、わかるよね、葉子はお利口さんだもの」
わざと美和は再び『お利口さん』という言葉を口にした。
だが、もう葉子は美和の体を押し離そうとはしない。押し離そうとはせずに、美和の顔をちらちらと仰ぎ見て頬を赤く染めるばかりだ。
「わからない？　だったら教えてあげる。いい？　葉子は私のこと、『ママ』って呼ぶんだよ。いいわね？　じゃ、呼んでみて。私のこと、ママって呼んでみてちょうだい」
言い聞かせる美和。
僅かに唇を開きかけて、だけど慌てて口をつぐんでしまう葉子。
「恥ずかしがることなんてないんだよ。葉子、私におむつのお世話をしてほしかったんでしょう？　私に甘えたかったんでしょう？　願いが叶って従姉妹どうしから母娘に間柄が変わったんだから、葉子が私のことをママって呼ぶのは当り前。だから、ほら」
美和は更に促した。
だが、葉子は逡巡の表情を浮かべるばかりで、なかなか口を開こうとしない。
「呼べないの？　あ、そうか。葉子はまだお喋りができない赤ちゃんだから呼べないのかな。だったら、呼べなくていいよ。お喋りできるようになるまでママがちゃんと育て直してあげるから」
美和は葉子のほっぺを指先でつんとつついた。

「……ま……」
ほっぺをつつかれてくすぐったそうにしながら、躊躇いがちに葉子の口が開く。
美和は軽く小首をかしげ、何も言わずに葉子の口元をみつめた。
「……ま、マ……」
言いかけては口をつぐみ、美和の顔をちらと振り仰いで慌てて目をそらし、もういちどおずおずと口を開いて
「……ま、ママ……ママ」
と、葉子はおそるおそる美和に呼びかけた。
「うふふ。やっとのこと、ママって呼んでくれたね。そうだよ、今日から私がママ。今日から葉子はママの赤ちゃんになるんだよ。ママのおっぱいをちゅうちゅうして、目が覚めている時もおむつをおしっこで汚しちゃう可愛い赤ちゃんに」
いったんは消えた妖しい光を再び瞳に宿して美和は応じた。
二つ年下の従妹から名前を呼び捨てにされ、その従妹のことをママと呼ばされる恥辱。
だが、その恥辱が胸を高鳴らせ、おしっこで濡れた紙おむつの内側を更に愛汁でねっとり汚させる。
「いい子だね、葉子は。ちゃんとママって呼んでくれる葉子は本当にお利口さん。聞き分けのいい子の葉子には、ご褒美に、いい事を教えてあげる。おむつを取り替えてあげるのはその後でいいよね」
美和の瞳の中で妖しい光が仄暗く燦く。

＊　＊　＊

「葉子は知らないかもだけど、葉子のお母さんも私の母さんも、女の人が好きなんだよ。冗談なんかじゃないよ、私が中学に入る時、もうそろそろ本当のことを話しておかなきゃねって母さんが教えてれたんだから。――二人とも男の人よりも女の人が好きで、初恋の相手が、母さんたちどうしだったんだって。つまり、葉子のお母さんの初恋の相手は私の母さんで、うちの母さんの初恋の相手が葉子のお母さんだってこと。同時に生まれたその時から、葉子のお母さんと私の母さんは相思相愛だったのよ。ひょっとしたら私が女の子しか好きになれないのは、母さんの血を濃くひいているからかもね」
美和はくすくす笑いながら、そんな説明を始めた。
「ただ、二人とも純粋な同性愛者というわけじゃなくて、レズに近いバイって言えばいいのかな、女の人が好きだけど、男の人を受け入れることもできるっていう感じなんだってさ。それで、女の人どうしで、しかも姉妹どうしで結婚なんてできるわけがないから、事情をわかった上で形式的に結婚してくれる男の人を探して、どうせだったら育児の真似事も経験して

みたくて、相手の男の人と子供もつくって、まわりの目には普通にしか見えない家庭生活を送ってきたってわけ。その相手の男性っていうのが、つまり、葉子のお父さんと私の父さん。そんな事情だから、葉子のお父さんも私の父さんも、各々の娘とは血はつながっているものの、実質的には、偽装的な父親ってわけなんだ。だから、葉子んちも、うちも、母さんと父さんの仲が他人行儀なのも当り前ってわけ」

わざとあっけらかんとした口調で美和は説明した。

一瞬だけ葉子の顔にきょとんとした表情が浮かんで、それから、顔つきが次第に曇る。乳首を吸う力が弱くなって、遂には唇がまるで動かなくなってしまう。

「葉子にもその事がわかっていれば辛い思いなんてしなくてよかったのにね」

美和は葉子の胸の内を見透かして静かな声で言い、自分の胸元に手を差し入れて乳房を持ち上げ、葉子に乳首を吸わせようとした。

だが、葉子の反応はない。

「お母さんとお父さんの本当の間柄を予め知っていたら、葉子は何も思い悩むことなんてなかった。苦悩しながら葉子がいい子で頑張り続けた十八年間は、まるで別のものになっていた筈。私の説明を聞いて、葉子には今、これまでの十八年間がまるで無駄なものだったように思えているんじゃない？」

右手で葉子の背中をとんとん叩きながら美和は語りかけた。

「でもね、本当はちっとも無駄じゃなかったんだよ。葉子が心配しなきゃいけないほど冷たい仲のお父さんとお母さんから生まれた葉子。そして、同じような仲の父さんと母さんから生まれた私。よそよそしい両親だけど、でも、今の両親がいたからこそ、葉子と私は出逢えた。他の人じゃ駄目だった。そうじゃない？」

温かい手で背中を叩いてもらうたび、美和の言葉が葉子の胸に染み入る。

「だから、無駄なんかじゃなかった。でも、もしも葉子が、これまで過ごした自分の十八年間がどうしても無駄だって思えて仕方ないんだったら、その無駄な十八年間を私が忘れさせてあげる。忘れさせて、新しい人生を始めさせてあげる」

葉子の瞼が動いて、瞬きを何度か繰り返した。

「今までお利口さんのいい子だったご褒美に、葉子がもっとお利口さんでもっといい子になれるよう、私が愛情たっぷり育て直してあげる。だって、今日から葉子は赤ちゃんで私がママなんだから」

美和は葉子の体を優しく揺すった。

「せっかくだから、もう少し教えてあげる。

葉子のお母さんとお父さんも、私の母さんと父さんも、子供が義務教育を終えたら、もうその頃には世間の目を気にすることもなくなるからって、

結婚生活を解消する約束を交わした上で一緒に暮し始めたんだよ。実は、母さんたちがお祖母ちゃんちに行ったのも、お祖母ちゃんの介護もあるけど、介護が一段落ついたら、各々の相手と離婚することを報告をするためっていう理由もあってのことなんだ」

美和の瞳に浮かんでいる妖しい光が慈しみの色の変わる。

「かりそめの契約結婚を終えた母さん達は、この家で暮すことになってるんだよ。でもって、誰の目も気にせずに、いちゃいちゃラブラブの毎日を過ごすんだよ。それを私たちが邪魔しちゃいけないよね？　私たちは私たち二人、母さん達の手を煩わせずに自分たちの生活を送らなきゃいけない。母さん達が姉妹から最愛の恋人どうしへ間柄を変えるように、私たちは従姉妹から仲睦まじい母娘へ間柄を変えて。――だから、ほら、もっとママのおっぱいをちゅうちゅうしてちょうだい」

美和は再び葉子の体を揺すり上げた。

「……ママ……」

葉子がぎこちなく美和に呼びかける。

「そうだよ、私が葉子のママだよ」

美和は改めて自分の乳房を持ち上げ、葉子が乳首を吸うよう仕向けた。

「ママ……ママ、わ、私ね……よ、葉子ね……ママのこと……」

自分のことを『私』ではなく幼児がそうするように『葉子』と名前で呼んで、葉子は美和の乳房に顔を押しつけた。

しばらくして葉子の口から

「ママ、葉子、葉子ね……ふ、ふぇ……葉子、ママのね……ふぇ、ふぇ～ん、ぅう、ひ、ひっく……ぇえん、ふぇ～ん」

と嗚咽が漏れ、やがて手放しで泣きじゃくってしまう。

「思いきり泣きなさい。赤ちゃんはね、何も我慢しなくていいんだよ。我儘で、気に入らないことがあったら泣き喚いて、お腹が空いたらおっぱいをねだって、おしっこが出ちゃいそうになったらおむつを濡らして、それで、すやすやねんねすればいいんだよ。だから、存分に泣いて、ママに甘えて、我儘放題しなさい。お利口さんのいい子になるのは、その後でいい。何も我慢せずに我儘ばかり言って、それで満足してから、少しずつお利口さんになればいい。その時はママがちゃんと躾けてあげる。その時になったら、赤ちゃんの葉子はママの言いつけを守ってちょうだいね」

「ママ、ママ。葉子のママ……ぅ、ぅわ～ん、ふ、ふぇ～ん」

葉子は美和の胸にすがりつき、ぼろぼろ涙をこぼしながら、いつまでも乳首を咥えて離さなかった。

羞恥の装い

翌朝、目を覚ました葉子は、いつもの癖で瞼を手の甲でぐりぐりした。
が、いつもとはまるで違う感触に手を止めて、起き抜けでまだ焦点の定まらない目をじっと凝らした。
と、自分が手袋を着けていることに気がつく。ただし、五本の指を自由に動かせる普通の手袋ではなく、主に幼児が着けるミトンという種類の手袋だ。それも、一般的なミトンなら親指と他の指とは別々に動かすことができるのだが、それさえできない、生まれて間もない赤ん坊に着けさせるような、手を丸めてすっぽり包み込んでしまう袋状の形をした手袋だ。
「おっきしたのね、葉子。気持ち良さそうにぐっすりねんねしていたわね」
葉子が目を覚ました気配を察した美和が笑顔でベッドに近づいてきた。
昨日、母親達を見送った時はトレーナーにジーパンというラフな服装だったが、今は清楚な雰囲気のブラウスにミディ丈の紺色のスカートという、良家の若奥様を思わせる、小さな子供を持つ若い母親ふうのいでたちだ。しかも話し方も、いつもの少し男の子っぽい口調から、若い母親ふうの装いにふさわしく女性らしい口調に変わっている。
「あ、あの、これ……」
葉子はベッドの上で上半身を起こし、ミトンに包まれた両手を美和の目の前に突き出した。
「小っちゃい子はねんねの間、顔や体が痒くなったら、我慢できなくて、痒いところを力任せに爪で引っ掻いて傷になっちゃうことが多いのよ。だから、そんなことにならないように着けてあげたのよ」
美和は優しい声で説明した。
「わ、私、小っちゃい子なんかじゃない。私、美和ちゃんよりも二つ年上の……」
恥ずかしそうに頬を真っ赤に染めて葉子はかぶりを振った。
だが、その言葉を途中で遮って美和が
「うふふ。小っちゃい子は何かというとお姉さんぶりたくて仕方ないのね。でも、昨夜のことを忘れちゃったわけじゃないでしょ？　昨夜から私がママで葉子は赤ちゃんになったのよ。ほら、これを見てごらん」
美和はベッドのすぐ側に立って、葉子の体に引っかかっている毛布をさっと剥ぎ取った。
「え……!?」
自分が身に着けている物を見て葉子がぽかんとした顔になる。
「昨夜、泣き疲れてそのままねんねしちゃった葉子のおむつを取り替えてあげたんだけど、夜中に様子を調べてみたら、新しいおむつもぐっしょり濡らしちゃってたのよ。だからもういちど取り替えてあげたんだけど、そ

の時、葉子が自分のお家から持って来た薄手のパジャマのままじゃ体が冷えて風邪をひいちゃうかもしれないって心配になって、こちらで用意しておいたパジャマに着替えさせてあげたの。ま、パジャマっていうか、元々は遊び着なんだけど、これなら寝相がわるくてもお腹が出る心配はないし、おむつも取り替え易いから、ねんねの時にもいいかなと思ってね。それと、エアコンの風で足下から体が冷えちゃいけないから、靴下も履かせてあげたのよ」

夜中おねしょのおむつを取り替える時に着替えてさせてあげたと美和が言ったそれは、汗を吸収しやすいトレーナーと、トレーナーの上に着せて、リボン仕立ての肩紐で丈を調整するようになっている、ジャンパースカートふうの可愛らしいロンパースだった。

「葉子も知ってると思うけど、ママ、家庭科部に入っていてね、秋の文化祭の展示用に何を作ろうか考えていたんだけど、ある日、学校の廊下で葉子を見かけて、小柄な葉子だったら赤ちゃんみたいな格好をさせてあげたら似合うだろうなって思いついて、葉子の体に合うようなサイズで小っちゃい子用のお洋服を作ってみることにしたの。せっかくだから、細かいところまで、小っちゃい子が着る物をそっくりそのまま再現してね。――ほら、お股のところには、こんなふうにボタンが並んでいるのよ。何のためにこんなところにボタンが付いているのか、葉子にもわかるわよね？」

美和は手鏡をかざし、ロンパースの股間の様子を葉子に見せた。

「……」

家庭科の授業の育児の単元で習ったことがあるから、それが何のためのボタンか葉子もすぐにわかった。わかったけれど、ホタンの役目を口にするのは恥ずかしすぎる。

「これはね、お股を開けたり閉じたりするために付いているボタンなのよ。日に何度もおもらしやおねしょをしちゃう赤ちゃんのおむつを取り替え易くするためのボタン。そうよ、まだおむつ離れてきていない葉子みたいな赤ちゃんのために必要なボタンなのよ」

葉子の胸の内を察した美和はくすっと笑って、ロンパースの股間に四つ並んでいるボタンを手早く外し、その様子を手鏡で葉子に見せつけながら説明した。

「わ、私、赤ちゃんなんかじゃない……」

手鏡からおずおずと目をそらして、葉子は声を震わせる。

おむつだけにとどまらず、外見も赤ん坊そのままの装いをさせられる羞恥と屈辱。だが、様々な事情で美和の庇護を求め、美和の手でおむつの世話をしてもらうことを願った葉子にとって、その羞恥と屈辱は、異様に胸を昂ぶらせる異形の悦びの源でもあった。

紙おむつの内側をいやらしい蜜汁が更にねっとり汚す。

それと殆ど同時に美和が

「まだそんなことを言ってるの、葉子ったら。ま、いいわ。朝のまんまの

前におむつを調べてあげるからじっとしてなさい」
と言って、ロンパースの股間を開いてあらわになった紙おむつの股ぐりに指を差し入れ、指先にねっとりした感触を覚えて、さもおかしそうに
「あらあら、赤ちゃんじゃないって言ってるそばからおむつを汚しちゃって。でも、ま、おしっこじゃないし、ちょっと湿っぽいだけだから、まだ取り替えてあげるほどじゃないわね」
とくすくす笑って続けて言い、ロンパースの股間のボタンを留めようとした。
そこへ葉子がよく耳を澄ましていないと聞き逃してしまいそうな声で
「ま、待って。おむつ、このままなの？　もう朝なんだから、おむつじゃなくてパンツに……」
と、『おむつ』という言葉を口にする時には殊更に頬を真っ赤に染めて訴えかけた。
「だって、昨夜も、お目々が覚めているうちのおもらしでおむつを汚しちゃったでしょ？　だから、パンツは無理よ。パンツは、もっとお姉さんになってから」
葉子の訴えに耳を貸すことなく、美和はロンパースのボタンを一つずつ丁寧に留めてしまう。
「で、でも、だって、昨夜のは抱っこされて体を自由に動かせなかったせいで……」
葉子は尚も言い募る。
「いいわ、わかった。葉子がそんなに言うなら、確かめてみましょう。これから葉子がちゃんとトイレへ行けたら、お目々が覚めている間はパンツにしてあげる」
やれやれとでもいうように美和は軽く肩をすくめてみせ、よいしょと葉子の体を抱き上げた。

「いい？　お手々を離すけど、大丈夫？」
美和は気遣わしげに言って、床に立たせた葉子の脇に差し入れて体を支えていた手をそっと離した。
途端に葉子の体が不安定に揺れ、尻餅をついて床にへたりこんでしまう。
その後の葉子は、ミトンに包まれた手を床につけ、腕と脚に力を入れて踏ん張って、かろうじて立ち上がることができたものの、そのまますぐに体のバランスを崩して尻餅をついてしまうといったことを繰り返すばかりだった。
「あんよはまだ無理みたいね、赤ちゃんの葉子には」
何度も同じ事を繰り返して立ち上がることができずにいる葉子に向かって、わざと優しく美和は話しかけた。
葉子がどうしてもちゃんと立てないのは、「足下から冷えないように」という名目で美和が履かせたソックスのせいだ。家庭科部に所属していて

裁縫が得意な美和は葉子が着られるような大きなサイズの子供服を仕立てると共にミトンやソックスも手作りで縫い上げたのだが、その際、低反発素材を縫い込んで土踏まずの部分を厚くするという細工をソックスに施していた。爪先と踵を地面につけ、土踏まずを浮かせることで微妙なバランスを保って人は二足歩行を可能にしているのだが、美和は、土踏まずを厚くしたソックスを履かせることで足裏のバランスを崩し、葉子がまともに立つことができないよう仕組んだのだ。

実は葉子も、自分がちゃんと立つことができない理由に気がついていた。だが、ミトンに覆い包まれた手でソックスを脱ぐことはできない。それに、ソックスを脱がせてくれるよう美和に頼んでも聞き入れてはくれないだろう。理由に気がついていても、葉子にはどうすることもできない。

「トイレ。葉子、トイレへ行くの」

とうとう立ち上がることを諦めた葉子は力なくかぶりを振って唇を噛みしめ、四つん這いになった。

「トイレへ行って、パンツなの」

四つん這いになって、葉子はのろのろと這い進む。

「いいわ。じゃ、ママは、はいはいで頑張る葉子を応援してあげる」

面白そうに言って美和は葉子の前にまわりこみ、目の前で両手をぱんぱんと打ち鳴らした。

「ほら、ママはこっちよ。ママについていらっしゃい」

四つん這いの葉子を見おろし、ぱんぱんと両手を打ち鳴らして後ろ向きにゆっくり歩く美和。

そのあとを、スカート付きロンパースのお尻を大きく左右に揺らしてぎこちなく這い進む葉子。

そこにあるのは、幼い愛娘にはいはいの練習をさせる若い母親と、母親のあとを追いかけて慣れないはいはいのお稽古に興じる赤ん坊の姿だった。

＊　＊　＊

葉子の動きが止まったのは、美和が押し開いたドアから部屋を出て廊下を半分ほど這い進んだ頃だった。

掌を開いた状態ならもう少し体重を受け止めることもできただろうが、ミトンに包まれて丸めた手では、もうこれ以上体を支えるのは難しい。カーペットが敷いてある部屋の中はまだしも、フローリングの廊下を這い進んで固い木材に擦れた膝には痛みが走り、もうこれ以上は進めない。それになにより、目を覚ました時に微かに感じていた尿意が、トイレに向かってのろのろと這い進むうちにじわじわ高まって、今では、体に少しでも余分な力を入れたら我慢できないほどになっている。

はぁはぁと息をつきながら葉子は廊下にぺたりとお尻をおろして、その場に座り込んでしまった。
「どうしたの？　トイレはあそこよ」
座り込んだ葉子の傍らに膝をついて、美和がトイレのドアを指差す。
だが、葉子は弱々しくかぶりを振ることしかできない。
「だったら、お目々が覚めている間もおむつでいいのね？　パンツじゃなくていいのね？」
言われて葉子は、美和が指差すトイレのドアに向かって、ミトンに包まれた手を力なく差し延べた。
それと同時に、腰がぶるっと震える。
いつもなら、もう少しは我慢できるだろう。しかし今は、ここまで這い進んできたせいで全身の力が抜けてしまい、これ以上はもう耐えられない。
けれど葉子は諦めきれない顔で
「トイレ。葉子、トイレなの。葉子、パンツなの」
とたどたどしい幼児めいた口調で繰り返し呟き続ける。
「ううん、葉子はパンツのお姉さんじゃなくて、おむつの赤ちゃんなのよ。だから、無理してトイレなんて行かなくていいの。おしっこもうんちも、おむつにしちゃえばいいのよ。パンツのお姉さんになるのは、今からずっと先のこと。それまでは、ねんねの時も、おっきの時もおむつなのよ。―ほら、こんなふうに」
美和は廊下にお尻をつけて座り込んでいる葉子の両脚を広げさせてロンパースの股間に並んでいるボタンを外し、紙おむつを晒け出させて手鏡をかざした。
あらわになった紙おむつが鏡を通して葉子の目に映る。
「葉子、おむつ……葉子、赤ちゃんだから、パンツじゃなくておむつなの……」
紙おむつのおしっこサインの色が変わる様子を目にして、誰にともなく葉子は呟いた。
いかにも恥ずかしそうに、いかにも情けなさそうに震える声。
「やだ。葉子、パンツがいい。葉子、パンツのお姉さんがいいの。……パンツがいいんだってば……ぅう、う、ぅえ、うぇ～ん、葉子、パンツなの……ふ、ふぇ～ん、ひ、ひっく、うぅ、ぅわ～ん」
とうとう葉子は泣き出してしまう。
だが、泣き声に混じる悦びの響きを美和は聞き逃さなかった。
美和に庇護を願い、美和に甘えたくて仕方ない。葉子のそんな望みはとっくに美和に見透かされているが、はっきりした言葉やあからさまな行動で願いを美和に告げるなど、二つ年上の葉子にできることではない。それを見越して、美和はミトンとソックスを葉子に着用させたのだ。二つ年上の従姉という矜持のせいで葉子が心の内の本当の望みを口にできないのなら、その矜持を取り除き、望みをあらわにさせてやる。そのために美和は、

手足の自由を奪い、立ち上がることを阻み、赤ん坊のような身の動きしかできないようにするために、手作りの特殊なミトンとソックスを葉子に着用させた――葉子が自分自身に対して言い訳をするための理由を与えるために。

特殊な細工を施したソックスのせいでトイレへ行くことができなくて、たとえトイレまで行けたとしてもミトンのせいでドアのノブを掴むことができなくて、そのせいでおむつを汚しちゃったんだ。本当ならトイレでおしっこを済ませて、パンツに戻れる筈だった。なのに、美和が作ったミトンとソックスのせいで間に合わなくて、それで、どうしようもなくて、嫌々おむつを汚しちゃったんだ。

実際は、胸の奥底に抱いた願望のまま自ら望んでおむつを汚してしまった葉子。だが、それを認めるのは恥ずかしすぎる。認めることを矜持が許さない。だけど、美和の企みのせいで失敗してしまったのなら、それは私のせいじゃない。

そんなふうに自分自身に対して言い訳をして、仕方のないことなんだと自分自身に言い聞かせて、そうして、本当の願いを晒け出し、望みを実現する。

美和が用意したミトンとソックスは、葉子に苦痛を与えるための責め具などでは決してない。それどころか、むしろ、葉子を寵愛する美和の心遣いそのもの。

そのことには葉子もうっすらとながら気がついている。気づいた上で、仕方なくトイレに間に合わなかった自身を演じた。自身に対して言い訳をするために。そして、これまで以上にますます美和に甘えるために。

泣き声は、羞恥と屈辱のためではなく、自分の願いがようやく叶った喜びの表われだ。

母娘の朝

「それでいいのよ。おむつが濡れてお尻が気持ちわるくなったら、そんなふうに泣いて教えてくれればいいの。お腹が空いて泣いているのか、おしっこが出ちゃって泣いているのか、暑くて泣いているのか、それを考えるのはママにまかせて、赤ちゃんの葉子は、ただ泣いていればいいんだからね。葉子は何も考えなくていい、何かしてほしいことがあったら大声で泣くだけでいいのよ」

泣きじゃくる葉子を横抱きにして部屋に戻り、そっとベッドに寝かせて、美和は穏やかな声で話しかけた。

葉子の泣き声の本当の意味を理解しているくせに、美和は、おむつが濡れているせいで泣いているのだとわざと理由を取り違え、ベッドに横たわる葉子をよしよしとあやした。

そうすることで、自分が本当に育児をしているような気になれる。二つ年上の従姉をとうとう自分の愛娘に変貌させることができたのだと実感できる。

しっかり者で二つ年上の従姉だったこの子がこれからずっと私の赤ちゃんなんだと思うと、乳首が勃って下腹部がじんと疼く。

「すぐにおむつを取り替えてあげるから、おとなしくしているのよ」

美和はロンパースのボタンを手早く外し、股間の布を葉子のお腹の上に捲り上げてから、おしっこを吸ってたぷたぷになっている紙おむつのテープを剥がした。

べりりっという小さな音が、自分の下腹部が紙おむつに包まれているのだという恥ずかしくてたまらない事実を葉子に容赦なく告げる。

紙おむつのテープを外した美和は葉子の左右の足首を一つにまとめて左手で掴み持ち、そのまま高々と差し上げ、僅かに浮いたお尻の下から、内側が黄色に染まった紙おむつを手前にたぐり寄せた。

葉子の泣き声が少しだけ小さくなる。

左手で葉子の足を高々と差し上げたまま、美和は、予め入念にギャザーを立てておいた新しい紙おむつをお尻の下に敷き込んだ。

さらさらの不織布の優しい肌触りに却って羞恥心をくすぐられ、泣き腫らした葉子の目の下がますます赤くなる。

「新しいおむつを当てる前に、おしっこの雫を綺麗に拭き取っておこうね。じゃないと、おむつかぶれになっちゃうから」

美和は『おむつかぶれ』という部分をわざと強調して言って、ウェットタイプのお尻拭きを葉子の股間に押し当てた。

「ん……」

薬液を染み込ませたお尻拭きのひんやりした感触に葉子はお尻をびくん

と震わせ、ぎゅっと目を閉じる。
喘ぎ声を出すまいとして固く口を閉ざし、けれど唇をぴくぴく震わせる葉子の顔を面白そうに眺めながら、美和はお尻拭きで葉子の股間を入念に拭き清める。いや、拭き清めるふりをして執拗に秘部を責めたてる。美和は手にしたお尻拭きを葉子の敏感な部分に押し当て、巧みな指使いでそっと掬い上げるようにしてこねくり、いやらしく弄んでいるのだ。

お尻拭きで美和に責められて葉子の股間がじっとり湿っぽくなってきた。
「あら、変ね。どんなに拭いてあげても、あとからあとから濡れてきちゃう。廊下でおもらしをしちゃったばかりなのに、またちっちが出そうなのかな、葉子は。でも仕方ないわよね、赤ちゃんはすぐにちっちをしたくなっちゃうし、ちっちを我慢できないんだから」
美和は『おしっこ』を『ちっち』という幼児言葉に言い換え、何度も繰り返し口にして葉子の羞恥を煽りつつ、なおも、敏感な部分を嬲り続けた。
葉子は顔を恥辱の色で染め、ミトンに包まれた手で自分の口を押さえるのだが、ぴくぴく震える唇から喘ぎ声が漏れ出るのを我慢することはできずにいた。

＊　＊　＊

美和は特段サディスティックな気質を有しているわけではない。なのに、恥辱に満ちた顔で無力な幼女そのまま薄い胸を震わせる葉子の様子を見ていると、なぜだか意地悪したくなってしまう。
（幼稚園とか小学校の頃、好きな女の子に悪戯したり意地悪したりする男の子がいたっけ。今なら私、その男の子の気持ちがわかっちゃう）
美和は胸の中で呟いて、くすっと笑った。
身体の基本的な機能である排泄行為さえ自分で司ることができず、汚物にまみれた下腹部を他人の目に晒し、他人の手で下腹部を入念に拭き清められ、せっかく綺麗になった下腹部を次の粗相に備えて布片で覆い包まれ、下腹部が湿気で蒸れるのをただ我慢しているしかない――おむつを着用し、おむつを汚し、誰かの手でおむつを取り替えられるという行為は、相手に対して絶対的に屈服することを認める行為だ。全てを相手に委ね、自分が何も出来ない無力な存在だということを認め誓う、羞恥と屈辱の行為。おむつを取り替えられる者は身じろぎ一つせず相手に服従し、おむつを取り替えてやる者は絶対的な優位に立って相手を意のままに取り扱う。
だが、実は葉子はその行為を服従と感じず、美和もまた葉子を屈服させる気などない。葉子は美和の庇護を受けたことに胸を高鳴らせ、美和は葉子を自らの保護下に置いて溺愛する喜びで胸を満たしている。
おむつを着けてもらい、おむつを濡らし、誰かの手でおむつを取り替え

てもらうという行為は、相手に全幅の信頼を寄せる行為でもある。全てを相手に頼りきり、自分の無力さを躊躇いなく晒け出して、けれどそれで却って心の平穏を得ることができる、親愛と睦みの行為。おむつを取り替えてもらう者は汚物にまみれた自分の下腹部を相手に晒すことを厭わず、おむつを取り替えてあげる者は大きく温かな手で相手の下腹部を丹念に拭き清め、相手を慈しむ。庇護を求める者と、相手を保護することに無上の喜びを求める者どうしの、互いに心の奥底をそっと触れ合わせる恍惚の行為。――おむつを取り替えてもらい、おむつを取り替えてあげることで、葉子と美和は、他の誰にも干渉されない二人だけの世界で互いの心をこれ以上はないくらい強く結びつけ合っているのだ。

いやらしくも愛情たっぷりの指使いで葉子の秘部を尚もいじった後、美和は、なにやら軟膏の容器とおぼしき小さなチューブを手にしてキャップを外し、白いクリームを指先で掬い取って

「お股がずっとこんなに濡れたままじゃ、おむつかぶれになりやすいわね。お医者様が綺麗にしてくれているけど、それだけじゃ心配だから、おむつかぶれになりにくくするお薬を塗っておこうね。」

と葉子に言い聞かせ、飾り毛が一本もないおかげでぬるぬるに濡れている様子がくっきり見て取れる股間にクリームを入念に塗りつけた。

おむつかぶれになりにくくするお薬。聞こえはいいが、その正体は、怪しげなサイトからネット通販で取り寄せた強力な除毛クリームだ。サイトに掲載された謳い文句によれば、一週間ほど塗布し続ければ、その部位の無駄毛が徐々に薄くなり、それから五日間ほどで毛根まですっかり除去されて、その部位に無駄毛が生えることは一生ないという。謳い文句通りの効能があるならそれでいいし、もしもクリームが体質に合わなくて肌が荒れしたとしても、治療を名目に、おむつを着けさせた状態で家から連れ出して皮膚科の医院を訪れ、除毛クリームのことは伏せたまま「ずっとおむつだから、かぶれちゃったかも」と受付に告げて強引に受診させ、葉子が羞恥にまみれる様子を存分に楽しむのも一興だ。

泌尿器科の医院で入念に飾り毛を処分されて僅かな翳りもないつるつるの童女のような股間を、愛液と除毛クリームが混じり合って、尚いっそうねっとり濡らす。

大好きな女の子をちょっぴり苛めてみたくて。ううん、それだけじゃない。大好きな女の子をずっとずっと自分だけのものにしておきたくて。

これから先、美和が葉子を手放すことは決してない。だったら、葉子をいつも悦ばせてやるのが自分の務めだ。だからこそ、葉子がどれくらい悦んでいるのかがすぐにわかるように、顔色や息づかいや唇の震わせ方や体のくねらせ方や、そんな諸々のサインと共に、いや、そんなサイン以上に明確に葉子の悦び具合を感じ取れるようにするため、美和は除毛クリームを手に入れた。除毛クリームを使って葉子の股間を常に一点の翳りなくつ

るつるにしておき、愛汁をどれくらい滴らせて愛汁で股間がどれだけ淫らに濡れているかをはつきり目で見てじっくり確かめるために。
除毛クリームを葉子の股間に塗りつける行為は美和にとって、葉子を永遠の童女に戻し、これから先ずっと他人の手に渡さないことを自身と葉子に誓う聖なる儀式だ。
愛してやまない従姉に対しての、ちょっぴり意地悪な、けれど愛情の限りを尽くした特別な儀式。

＊　＊　＊

おむつを取り替え、ロンパースの股間のボタンを留めた後、美和は
「すぐに朝のまんまにするから少しだけ待っていてね」
と告げ、葉子をベッドに残して部屋を出て行った。

しばらくして、朝食を用意する際に着用したエプロンをブラウスの上に着けたまま戻ってきた美和は
「葉子は自分でまんまを食べられないから、ママが食べさせてあげるわね。でも、そうするとリビングルームのテーブルじゃ窮屈だから、ここで食べるのよ」
と説明して、キッチンから持って来たトレイに載っている食器をベッド脇のサイドテーブルに並べ始めた。
「葉子は赤ちゃんだから固い物は駄目でしょ。だから、柔らかいフルーツを用意してあげたのよ。パンも小さく切ってミルクに浸しておいたから食べやすいわよ」
美和はそう言って、小さく刻んだキウイフルーツや小さな輪切りのバナナ、すりおろしたリンゴといった柔らかそうな果物の食器と、ミルクに浸して柔らかくしたパンの食器をサイドテーブルに並べ終えた後、ベッドの縁に腰かけて葉子の体を抱き寄せると、お尻を自分の腿に載せさせ、上半身を斜め抱きにして背中を左腕で支えた。
「最初はこれがいいかな」
美和は呟いて、小さな輪切りにしたバナナをスプーンで掬い取った。
だが、美和が手にしたスプーンの向かう先は葉子の口ではなく、美和自身の口だった。しかも、美和は口に入れたバナナを咀嚼するばかりで、なかなか飲み込もうとしない。
美和が何をしようとしているのか見当がつかず、葉子がきょとんとした顔になる。
美和は、きょとんとした表情を浮かべる葉子にむかって悪戯めいた仕草でウィンクしてみせ、自分の顔を葉子の顔に近づけて、口移しで水を飲ませた時と同様、二人の唇を重ね合わせた。

「ん……」
突然の出来事に葉子は驚き、美和と重ね合わせた唇が思わず半開きになってしまう。
そこへ美和が、丹念に咀嚼してどろどろのペースト状になったバナナを舌で押し入れた。
葉子の口いっぱいに芳醇な匂いと甘い味が広がる。瞬間どう応じてわからない葉子だったが、気がつけば、しらずしらずのうちに、美和の唾液が入り混じったペースト状のバナナを飲みくだしてしまっていた。
「市販の離乳食でもいいんだけど、それじゃ味気ないから、ママがお口で柔らかくしたまんまを食べさせてあげるわね。葉子はミトンを着けているから自分じゃスプーンを使えないし、ママがスプーンで掬ってあげても葉子が暴れて途中でこぼしちゃうことがあるかもしれないから、こんなふうに口移しでね」
美和は葉子の口からそっと唇を離して満足げな口調で言ったが、葉子の僅かに開いた唇の端から口の中に残っていたバナナのペーストがとろりと流れ出るのを見ると、エプロンのポケットから純白の生地でできた大きなよだれかけを取り出してさっと広げ、葉子の胸元に押し当てて首筋の後ろで留め紐をきゅっと結わえ、
「そうだったわね、赤ちゃんの葉子がまんまの時はよだれかけを着けてあげなきゃいけないんだったわ。ごめんね、ママ、うっかりしちゃって。でも、次からは、まんまの前にちゃんと着けてあげるわね」
とわざとらしく慌てたふうを装って言い、よだれかけの端で葉子の口と頬を拭ってやった。
だが葉子は
「やだ。葉子、赤ちゃんじゃない」
と言って我を張るばかりだ。
「あらあら、葉子ったら、またお姉さんぶっちゃって。いいわ。赤ちゃんじゃないんだったら、自分でスプーンを持って食べてみなさい。ちゃんとできたら赤ちゃんじゃないって認めてあげる」
美和は薄く笑って、ミトンに包まれた葉子の手にスプーンを押しつけた。
葉子は少し思案してから、両手を合わせ、手と手の間の僅かな隙間でスプーンを挟み持った。
だが、そんな状態ではちゃんと支えることなどできない上に、ミトンが滑りやすい素材でできていることもあって、すぐにスプーンを取り落としてしまう。
サイドテーブルに落ちたスプーンを掴み上げることは、ミトンで指の自由を奪われてしまっている葉子にはできない。
「これでわかったでしょう？　手のかかる赤ちゃんの葉子にはママが口移しで食べさせてあげなきゃ駄目なのよ」
美和はぴしゃりと決めつけ、サイドテーブルからスプーンを拾い上げて

キウイフルーツを救い取り、口の中で入念に咀嚼してから、再び葉子と唇を重ね合わせた。
今度は葉子が進んで美和の舌を迎え入れ、美和の唾液がたっぷり入り混じったキウイフルーツのペーストを口の中に注ぎ込んでもらうのをおとなしく待って、ついさっき「葉子、赤ちゃんじゃない」とごねたのが嘘のように、まるで躊躇う様子をみせずにごくりと飲み込んで笑顔になった。
「あら、今度は上手に食べられてお利口さんだこと。でも、やっぱり今度も唇が汚れちゃってるから、きれいきれいしておこうね」
美和はバナナの時と同じようによだれかけの端で唇を拭ってやり、葉子の頭を何度も撫でた。
葉子がますます笑顔になる。
葉子が美和からの口移しの食事を嫌がってみせたのは、廊下でおむつを汚してしまった時と同じ、自分が美和の庇護下にあることを自身で改めて確認するためだった。排泄行為のみならず食事という基本的な行為さえ自分ではできず、美和の手を煩わせる必要があることを自分自身に認めさせ、美和に甘えるための口実を自身に与えるためにわざと演じてみせた幼児めいた振る舞い。
従姉妹どうしという間柄から母と娘という間柄に変貌を遂げた自分たちの仲を改めて確かめ、その変貌が確かなものだと実感する喜びで胸を満たすために。互いの心の結び付きの強さを知るために。葉子と美和は、自分自身の新たな役割を演じた。ただし、しめし合わせてのことではない。互いに惹かれ合う二人の心が、しらずしらずのうちに重なり合った結果だ。
そして、ひとしきり演じた後は、もうその必要はない。
あとは、演じるのではなく、実際の日常の中で新たな役割を自然に生きてゆくだけ。

＊　＊　＊

「葉子、喉かわいた」
パンとフルーツを全て口移しで食べさせてもらった後、葉子は美和にねだった。
「いいわよ。じゃ、これね」
美和は大きく頷いて、フルーツやパンの食器と一緒にトレイに載せて持って来ていた、ミルクが七分目ほど入っている哺乳壜を手に持って振ってみせた。
だが、葉子は口を尖らせて
「や。葉子、哺乳壜、やなの」
と拗ねてみせる。
「あらあら、そんな我儘言っちゃって。葉子は本当に困った子だこと」
口では『困った子』と言いつつも実はまるで困った様子などみせずに、

美和がうふふと笑う。
「だって、ママ、言ったでしょ。葉子、我儘でいいって。葉子、いい子じゃなくていいって。だから、哺乳壜、やなの」
葉子は口を尖らせたままだ。
「じゃ、どうしたらいいの？　葉子はママにどうして欲しいのかな？」
葉子が実は何を望んでいるのか察していながらも、わざと美和は訊ねた。
「おっぱい。葉子、ママのおっぱいがいいの」
耳の先をほんのり薄赤色に染めて答える葉子。
「いいわ、わかった。葉子はまだ哺乳壜のミルクも上手に飲めない赤ちゃんってことね」
わざとらしくやれやれと溜め息をついて美和はエプロンを脱ぎ、ブラウスのボタンを外して胸元を大きくはだけ、淡いピンクのブラジャーのストリングをずらした。
張りのある豊かな乳房があらわになる。
「もうちょっとだけ待ってなさい。すぐだから」
美和は艶然と微笑んで哺乳壜のキャップを外し、ねじ込みになっている吸い口も外して、ミネラルウォーターのペットボトルをそうしたのと同様、哺乳壜を乳房の上でそっと傾けた。
哺乳壜からこぼれ出たミルクが乳白色の条になって乳房の表面を伝い流れ、雫になって乳首の先から滴り落ちる。
雫になったミルクを葉子は舌の先で掬い舐め、乳首を口にふくんだ。
「ごめんね。ママのおっぱいから本当のぱいぱいが出たらいいのにね」
美和は、自分が乳房に滴らせたミルクを葉子が嬉しそうに飲む様子を笑顔で眺めながら、少しだけ寂しそうに言った。
「いいの。本当のぱいぱいじゃなくても、葉子、ママのおっぱい大好き。哺乳壜よりもずっとずっと大好き」
葉子は豊かな乳房にむしゃぶりついたまま、ちらと美和の顔を見上げ、少しだけ気恥ずかしそうに、でも、あどけないと表現してもいいくらいに喜びいっぱいの表情で言った。
「うふふ。葉子がおっぱいを卒業するのはいつのことかしらね。おむつ離れもいつになるかわからないし、困った赤ちゃんだこと。葉子は本当に我儘な困った子で、本当に甘えんぼうの可愛いい赤ちゃんだこと。ママ、いつまでも葉子を独り占めしちゃうわよ。それでいいよね？」
美和は葉子の顎先に指をかけてくいっと持ち上げ、大きな目を正面から覗き込んだ。
「葉子もママのこと大好き。これまでも大好きだったけど、今はそれよりもずっとずっと大好き」
顔を輝かせて葉子は答えた。
乳首を咥えたまま言うものだから声がくぐもって、唇の端からミルクが溢れ出る。

「よかったわね、これを着けておいて」
美和は顔をほころばせて、葉子の唇を濡らすミルクをよだれかけの端でそっと拭ってやった。
葉子が美和の乳首からミルクを貪り飲むぴちゃぴちゃとひどく淫靡に響く音は、哺乳壜が空になるまで僅かな間も止むことはなかった。

＊　＊　＊

「さ、まんまの後はお着替えよ」
朝食を終え、食器とトレイを片付けてから、文化祭で展示するために作ったという（葉子が着られるような大きなサイズの）子供服を収納していた大きなダンボール箱を開けて美和は言った。
「お着替え？」
「そうよ。ねんねの間は、お腹が出ちゃったらいけないと思ってロンパースを着せてあげたんだけど、生地がちょっと厚くてね、エアコンを利かせていても夏の昼間だと汗をかいておむつの中が蒸れちゃうから、別のお洋服に着替えるのよ。――うん、丁度いいみたいね」
美和はベビーピンクの生地で仕立てたチュニックをダンボール箱から取り出し、両手で肩口を広げ持って、ベッドの上に座っている葉子の体に押し当てながら満足そうに頷いた。
「ほら、どう？　とっても似合っているわよ」
美和は葉子を手早くロンパースからチュニックに着替えさせて姿見の前に立たせた。
足底に細工を施したソックスのせいでしっかり立っていることのできない葉子が、美和に体を支えてもらって大きな鏡に目をやる。
鏡の中にいるのは、みるからに愛くるしい少女だ。いや、幼女と言った方が正確だろうか。キャミソールの上にノースリーブのチュニックを着て、今にも倒れそうになるのを傍らの母親に支えてもらい、ツインテールに結わえた髪を揺らして、あどけない笑みを浮かべる幼女。
だが、しばらくして、幼女の顔が曇る。
顔を曇らせた幼女は、傍らに立つ母親の顔を振り仰いで
「や！　葉子、このお洋服、や！」
と訴えかけた。
「あら、どうして？　こんなに似合っているのに」
きょとんとした顔で美和が訊き返す。
「だって……」
葉子は言いかけて、すぐに、もじもじと両手の指を絡ませ合って口をつぐんでしまう。

「どうしたの？　葉子のためにせっかく作ってあげたのに、どうして嫌がってるのかちゃんと教えてくれないと、ママ、わからなくて困っちゃうな」
美和はすっと膝を折り、愛しい娘を気遣う優しい母親そのままに、葉子と目の高さを合せて静かに問いかけた。
「……だって……だって、おむつが見えちゃうんだもん」
葉子はぽつりと言って、いかにも恥ずかしそうに顔を伏せた。
葉子の言う通り、美和が葉子に着せたチュニックは腰骨の少し下あたりまでの丈しかなくて、おむつが半分ほど見えてしまっている。
「いいのよ、これで。お姉さんが着るような丈の長いお洋服は裾が脚にまとわりついちゃって、あんよが上手じゃない葉子にはまだ早いんだから。それに、丈が短い方がおむつを取り替えてあげやすいしね。わかるでしょ？
日に何度もおむつを汚しちゃう葉子には、これで丁度いいのよ」
半分ほど見えている紙おむつの上からぽんとお尻を叩いて美和は言い聞かせた。
「でも、だって……」
美和におむつの世話をしてもらい、美和から口移しで食事をさせてもらう口実を得た葉子。だが、可愛らしい模様の付いた子供用の紙おむつを常に晒け出して生活するのは流石にまだ恥ずかしい。羞恥に満ちた自分の姿を見まいとしても、家の中には、自分の姿を映し出す物が鏡の他にも、窓ガラスだったり、置き時計の保護ガラスだったり、テレビ画面の写り込みだったり、ドアの嵌め込みガラスだったり、人形ケースだったりと数えきれないくらいたくさんある。そういった物からいちいち目をそむけていては普段の生活もおぼつかない。
顔を伏せたまま、葉子はもういちど姿見にちらと目をやった。
鏡には、丈の短いチュニックと紙おむつ姿の葉子がくっきり映っている。
「いいのよ、これで」
葉子が再び姿見を見ていることに気がついた美和は、自分も鏡に向かってにこりと微笑みかけて、きっぱりした口調で決めつけた。
だが、それでも葉子がまだもじもじしていると、美和は改めて段ボール箱に手を差し入れ、
「赤ちゃんのくせにおむつを恥ずかしがるなんて、おかしな子ね。でも、ま、下がおむつだけじゃ昼間でもちょっとしたことで体が冷えちゃうかもしれないから、これを穿かせてあげる」
と言って、チュニックと共色の生地でできたオーバーパンツを取り出した。
お尻のあたりに飾りレースのフリルを三段にあしらった可愛らしいオーバーパンツだ。
「さ、ママの肩につかまって、こっちにもたれかけて足を上げるのよ。最初は右足から――そうそう、上手よ、葉子」
美和は葉子のすぐ目の前に膝をついて、葉子の右足をオーバーパンツの

股ぐりに通させた。
それから同じように、今度は左足。そして、両脚を股ぐりに通させたオーバーパンツを、腰周りのゴムを指で広げてさっと引き上げる。
「あとは、ここをこうして、それと、こっちはこうね。――はい、いいわよ」
引き上げたオーバーパンツの腰周りのゴムが縒れているのを直し、お尻のフリルが乱れているのを整え、股ぐりのゴムが太腿をぴっちり締めつけているのを確認して、伏し目がちの葉子の顔を下から覗き込んで美和は優しく微笑みかけた。
美和の笑顔を目にして、葉子がおそるおそる改めて鏡に目を向ける。
紙おむつの厚みのせいでぷっくり膨らんだオーバーパンツのお尻で飾りレースのフリルが小さく揺れる。
その様子は、おむつが丸見えだった時と比べても、却ってますます幼児めいて見える。なのに葉子はぱっとを顔を輝かせて
「葉子、このお洋服、大好き。葉子、このパンツ、大好き。葉子、お洋服とパンツ作ってくれたママ、大好き」
と嬌声をあげ、美和の体にすがりついて豊かな胸に顔を埋めた。
おむつが丸見えになっていた羞恥が解消されたからというよりも、自分のことを思いやって予め自分のためにいろいろ用意してくれる美和の母性を感じ取り、もともと胸に抱いていた美和に対する依存心がますます高まったことを表す無意識の振る舞いだった。

強まる絆

着替えの次は、ボール遊びを兼ねて、はいはいの練習だ。
美和は葉子を床にお尻をぺたんとつけた格好で座らせ、自分はその横で膝立ちになって柔らかな布製のボールを壁に向かって転がし、
「ほら、ボールはあそこよ。はいはいであそこまで行ってボールを取ってきてちょうだい」
とボールの行方を指差して葉子を促した。
だけど葉子はその場に座ったままじっとしている。
「どうしたの？　赤ちゃんはみんなボール遊びが大好きなのに、どうしちゃったのかな？　さ、頑張って、はいはいのお稽古よ」
美和は、壁際まで転がったボールを指差してもういちど言った。
「や。葉子、はいはい、や！」
美和の言いつけを頑なに拒んで葉子は激しくかぶりを振る。

葉子がはいはいを嫌がるのは、トイレを目前にして廊下でしくじってしまったのが原因だ。体重を支えきれない腕の痛みと硬い廊下に擦れたせいの脚の痛みに耐えてトイレへ這って行こうとして、なのにとうとう途中で諦めて廊下に座り込んでしまい、自分の下腹部を包む紙おむつの中がじわっと濡れるのを感じながら、おしっこサインの色が変わってゆく様子を見せつけられた時の絶望感。美和に甘え、美和に世話をしてもらいたいという願いをずっと抱えていた葉子だが、肉体の苦痛と心理的な絶望感を伴う失禁は、美和に甘えながら心を陶然とさせるおもらしとはまるで違い、心に深い傷を負わせる苦衷でもあった。
美和にはいはいを促された瞬間、あの時の心の痛みがありありと蘇ってきて葉子の手脚を萎縮させ、身をすくませてしまうのも無理はない。

そんな葉子の心中を知ってか知らずか、美和がすっと立ち上がって葉子の背後にまわりこみ、脇腹を両手で抱えて強引に四つん這いの姿勢にさせた。
「や、やだ、はいはい、やだったら！」
葉子は金切声をあげて抗うのだが、ミトンとソックスのせいでその場から逃げることもかなわず、あからさまな体格の差もあって、美和のなすがままだ。
「さ、ボールを取ってきてちょうだい」
美和は葉子の耳許に口を寄せ、少し強い口調で言った。
だが、葉子が這い進む気配はない。四つん這いの姿勢のまま、その場からぴくりとも動かない。

「パンツのお姉さんになりたいんじゃないの？　お姉さんになるにはあんよができるようにならなきゃいけないし、あんよができるようになるには、その前にはいはいができるようにならなきゃいけないのよ。だから、さ、頑張ってお稽古しましょう」

美和はあやすように言って、葉子のお尻に掌を添えて優しく前方へ押した。

それでもやはり葉子は動こうとしない。――が、一瞬の後、葉子の体がびくんと震え、のろのろと手脚を動かして、ボールのある方へ這い始めた。

実は美和は、葉子のお尻を前方へ押すと同時に、オーバーパンツと紙おむつの上から葉子の秘部に中指を突き立て、いやらしい指使いで責めたてていた。お尻を押されただけでは体を動かさない葉子も、敏感な部分を執拗にいじられてはじっとしていられず、たまらずも、ボールのある方へ這い進んだのだ。

その後も葉子が手脚の動きを止めて這うのをやめては、そのたびに美和が掌で葉子のお尻を押すと同時に中指で葉子の秘所をいじって強引に這い進ませるといったことの繰り返しだった。

そうして、やっとのこともう少しでボールに手が届くといった所まで這い進んだ時、美和が足早に先回りしてボールを掴み上げ、手にしたボールを別の方向へ転がしてしまった。

何が起こったのかすぐにはわからず呆然とした表情を浮かべるだけの葉子だったが、次の瞬間、美和の手が再び脇腹に伸びて体を抱え上げられ、別の場所に転がったボールの方に向けて四つん這いの姿勢を取らされてしまう。

「さ、今度はあっちよ」

美和が左手でボールを指差して右手の掌で葉子のお尻を押し、中指を秘部に突き立てた。

「あ、ん……」

絶望的な響きが痛々しい、なのに聞きようによってはひどく艶めかしい呻き声を漏らし、はぁはぁと息を荒げて葉子が這い始める。

＊　＊　＊

それから何度も、もう少しで手が届くというところで美和が先回りしてボールを別の場所に向けて転がし、そのたびに美和の手で無理矢理体の向きを変えさせられて強引に這い進めさせられるといったことがあって、とうとう葉子は床にお尻をぺたんとつけて座り込んでしまった。

肩で息をつき、美和に指で責められて無毛の股間をぬるぬるに濡らし、だらしなく両脚を広げ、両目を涙でうっすら潤ませて、閉じる気力も湧かないせいで三分の一ほど開いたままになっている唇の端から唾液がよだれになってこぼれ出し頬を伝い流れて顎先から胸元に滴り落ちて、朝食の際

に着けられたままになっているよだれかけに大きな染みをつくる。
「どうしたの？　はいはいができなきゃパンツのお姉さんになれないわよ」
床に座り込んで身じろぎ一つしない葉子に向かって美和が声をかけた。
しかし、返答はない。
「葉子はパンツのお姉さんになりたいんでしょう？　だったら、もっと頑張らなきゃ」
美和がもういちど声をかける。
「……いい。葉子、お姉さんになれなくていい。だから、はいはいのお稽古、や！　葉子、はいはいのお稽古ばかりさせるママ、や！　葉子、優しくないママ、きらい！」
葉子は恨みがましい目で美和の顔を振り仰いで金切声をあげた。
「じゃ、おむつの赤ちゃんのままでいいのね？」
美和は、これまで聞いたことのない、ぞくりとするような口調で問いかけた。
初めて耳にする美和の冷たい声に怯え、どう答えていいのかわからなくなって葉子は却って虚勢を張り、
「いいもん。葉子、おむつの赤ちゃんのままでいいもん。パンツのお姉さんにならなくていいもん！」
と再び金切声をあげてしまう。
それに対して美和は
「そう。おむつの赤ちゃんのままでいいの。だったら、はいはいのお稽古は要らないわね。はいはいのお稽古をやめて、積み木で遊ぶといいわ。これなら無理に体を動かさなくていいし、ママと一緒じゃなくて一人で遊べるものね」
と、ついさっきよりもいっそう冷たい口調で『一人で遊べる』という部分を強調して応じ、積み木の箱を葉子の目の前に置いてすっと身を退いた。
「ママ……？」
身を退いて部屋の隅に向かって歩いて行く美和の背中に葉子は声をかけた。
不安いっぱいで今にも泣き出しそうな震え声。
だけど、美和からの返答はない。
無言で部屋の隅に歩み寄った美和はゆっくり体の向きを変えて葉子の顔に視線を投げかけた。その目は、物悲しく冷ややかな色をたたえていた。
「ママ……！」
葉子はもういちど呼びかけた。
だが、美和が呼びかけに応じる気配はない。部屋の片隅で壁に寄りかかり、ただ無機質な視線を漫然と葉子に向けるだけ。
しゅんとした表情で葉子も黙り込んでしまう。
黙り込んで、美和の方を見ないようにして顔を伏せてしまう。

＊　＊　＊

それからどれくらいの時間が経ったろう。
顔を伏せたまま葉子が体をびくんと震わせた。
朝食を終えてすぐに感じた尿意が高まって、もうそろそろ我慢できないほどになっているのだ。
葉子はのろのろと顔を上げ、すがるような思いで美和がいる方に目をやりかけたが、思い直して視線をすごすごと床に落とした。
そうこうしているうちにも尿意はじわじわと高まってくるのだが、葉子には為す術がない。トイレへ行こうとしても、それが無駄な足掻きでしかないことは身を以て思い知らされたし、今の状態で美和に助けを求める勇気もない。今の葉子にできるのは、少しでも長い間、尿意に耐えることだけだった。
床に落とした視線が、ふと、積み木の箱をとらえる。
小さな子供向けの玩具だから、ミトンに包まれた葉子の手でも蓋を開けることができた。
葉子は蓋を開けた箱から積み木のピースを両手で掬い上げ、目の前の床にばら撒いて、散乱したピースを一つ、ミトンに包まれた手でかろうじてつかみ上げた。
つかみ上げたピースを今度はそっと床に置き直す。そして、次のピースを拾い上げて、さっきのピースの横に並べた。
つかみ上げては床に置き直し、拾い上げては並べる。単調な作業だが、続けているうちに少しずつピースが集まって徐々に一つの形になってゆく。
尿意に耐えるために、何かに意識を集める必要があった。何かに夢中になって尿意を忘れ去ろうとした。
今の葉子にとって、それが積み木だ。
自由にならない手で積み木のピースを重ね合わせ、何かを作ることに意識を集めて、尿意から逃れようとしていた。
少しずつ一つの形になってゆく積み木のおかげで尿意を忘れることができた（忘れることができたような気になれた）のは、けれど、束の間のことだった。
つかみ上げたと思っていたピースが実はちゃんと持てていなくて、これまでに積み上げてきたピースの塊の上に落ちてしまった。そのせいで、かろうじて均衡を保っていたピースがばらばらと音を立てて崩れてしまう。
はっと思った時は、もう遅かった。
積み木が崩れるのと同時に緊張の糸が切れ、忘れたつもりになっていた尿意にとうとう耐えることができなくなって、紙おむつの内側がじわっと濡れる。

いったん溢れ出したおしっこは、これまで我慢を重ねていた分尚のこと途中で止めることができず、とめどなく紙おむつの内側が濡れてしまう。

「あ……」

声をあげて葉子はお尻を浮かしそうになった。

が、それを必死の思いで我慢する。

不自然な動きをすれば、おむつを汚してしまったことを美和に知られてしまう。だけど今は、おもらしを美和に知られたくなかった。

本当は美和に助けを求めたくてたまらない。頬をうっすらピンクに染めて「ママ、葉子、ちっち。葉子、おむつ、ちっちなの」と甘えた声で告げ、気持ちわるいおむつを優しい手でふかふかの新しいおむつに取り替えてもらいたくて仕方ない。「ちっち出ちゃったことをママに教えてくれて葉子は本当にお利口さんね」と美和に褒めてもらって頭をなでなでしてほしくて、今にも美和のもとに這って行きたい気持ちで胸が張り裂けそうになっている。

だが、美和の冷たい視線に、実の両親の互いの顔を見る時の無機質な視線が思い出されて、葉子は身をすくめてしまう。本心ではないにしても美和に対してひどい言葉を投げつけてしまったという後ろめたさが体をこわばらせてしまう。

うっすら潤んでいた瞳からは涙の雫が幾つかこぼれ出している。それでも葉子は、おもらしの事実を美和に知られまいとして、夢中になって積み木で遊んでいるふりを続ける。他のことには目もくれず、夢中で積み木遊びに興じる幼児を演じ続けて、濡れたおむつの不快感を忘れようとする。

＊　＊　＊

しばらくの後、自分のすぐ横に美和が立っていることに気がついて、葉子の手の動きがぴたりと止まった。

美和は腰をかがめ、いつもの穏やかな声で

「ちっち、まだ大丈夫なの？　廊下でのおもらしから、もうそろそろだと思うんだけど」

と葉子の耳許に囁きかける。

葉子は肩をぴくっと震わせたが、何度か息を吸った後、なんでもないふうを装って

「ちっち、ない。葉子、ちっちじゃないもん」

と、心とは裏腹な返答を口にした。

それを聞いた美和は床に膝をついて、葉子のオーバーパンツの股ぐりに手を差し入れ、更に紙おむつの股ぐりに指を差し入れた。

「や。ちっち、ない。葉子、ちっちしてないの」

葉子は体をくねらせて美和に訴えかけた。

その声はもう金切声ではなく、何かをねだるような、誰かに媚びるような、どことなく甘えた声だ。
「ふぅん、ちっちしてないんだ、葉子。じゃ、これは何かしら」
美和は、紙おむつの内側の様子を探った指を葉子の目の前に突きつけた。
指先が濡れているのは明らかにおしっこだ。
「ちっちが出ちゃってるのに、ちっちなんか出てないって葉子は言うのね？
だとすると、ちっちが出ちゃっておむつの内側がぐっしょり濡れていることに葉子は気がつかなかったってことになるわよね？」
指をティッシュペパーで拭きながら、謎々を楽しむかのような口調で美和は言う。
葉子は何も答えられない。
と、葉子の不安そうな顔を覗き込む美和が不意に相好を崩した。
相好を崩して
「積み木遊びに夢中になってちっちが出ちゃったことにも気がつかないなんて、困った赤ちゃんね、葉子は。ちっちでおむつを汚しちゃったこともわからない、ママがいないと何もできない、困った赤ちゃん。いいわ、困った赤ちゃんの葉子がお利口さんになれるよう、ママがちゃんと躾けてあげる。今は手のかかる赤ちゃんの葉子が、いつか、とってもお利口さんのいい子になれるようにママが育て直して躾け直してあげる。だから、これからも葉子はずっとママと一緒にいるのよ。いいわね？」
と、とびきり優しい声で言って、葉子の体をぎゅっと抱きしめた。
抱きしめられた瞬間、葉子の大きな目からこぼれていた涙が止まる。
「いいの？　葉子、ママにひどいこと言っちゃった。ママきらいって言っちゃった。なのに、一緒にいていいの？」
美和の胸に顔を埋めたくてたまらない。けれど葉子はかろうじて我慢して、おそるおそる訊ねた。
「いいわよ。その代わり、ママきらいって言うような悪い子の葉子にはママがこれからたっぷり罰をあげるつもりだから覚悟なさい」
美和は、『罰』という言葉にはそぐわない柔らかな表情で言った。
「罰……？」
葉子が上目遣いに美和の顔を仰ぎ見て訊き返す。
「そうよ、とっても怖い罰。なんたって、ママはこれからずっと葉子を独り占めにしちゃうんだから。葉子がいくら他の人のところへ行きたいって言っても許してあげないんだから。葉子はずっとずっとママと一緒にいなきゃいけないんだから。ね、とっても怖い罰でしょ？」
美和は、葉子を抱きすくめる腕にますます力を入れて説明した。そして、間を置かずに
「それに、とってもよく効くお仕置きもとっくに済ませちゃったしね」
と、今度は少しだけ真剣な表情になって付け加えた。
「お仕置きも済ませた……？」

葉子が再び訊き返す。
「葉子は、一人でいてどう思った？　ママが部屋の隅に行っちゃって、ひとりぼっちで積み木遊びをしなきゃいけなくなって、どんな気持ちだった？」
美和は葉子の背中をそっと撫でて、質問に答える代わりに問い返した。
「……寂しかった。とっても寂しくて、葉子、積み木遊びしながら泣いちゃって……ち、ちっちが出ておむつ濡れちゃって……ちっちでお尻が気持ちわるくて、ママに……ママにおむつ取り替えてもらいたかったけど、葉子、ママきらいって言っちゃって、だからママも葉子のこと嫌いになっちゃったと思って……それで、それで、おむつ取り替えてって言えなくて……でも、だって……だって、葉子……」
言いながら、またもや涙声になってしまう葉子。
けれど、ここできちんと答えなければ本当に美和に愛想を尽かされてまうと思い直して、震える声で
「……だから、葉子……だから、ごめんなさい。ごめんなさい、ママ、どこにも行っちゃやだ。葉子をひとりぼっちにしちゃやだ。葉子、ママしかいなくて……葉子、ママがいなかったら何もできなくて……だから、ごめんなさい。ごめんなさい、ママ」
と続けたのだが、言っている途中に再び涙がぼろぼろこぼれ出す。
「寂しかったんだね、葉子。ひとりぼっちで、とっても寂しかったんだね」
美和は背中を撫でていた右手をそっと上げ、葉子の髪を優しく撫でつけながら、すっと目を細めた。
「それが、お仕置きだったのよ。ママきらいって言っちゃう悪い子の葉子への、葉子本人からのお仕置き。どんなにきつい言葉で叱られるよりも、どんなに力いっぱいお尻をぺんぺんされるよりも、ずっとずっと心が痛くて泣き出しちゃうような、とってもよく効くお仕置き。――ママの言ってること、わかるよね？」
美和は細めた目を何度かしばたたかせ、後ろめたさのせいで美和の胸に顔を埋められずにいる葉子の後頭部を大きな掌で包み込むようにして、涙で濡れる顔を自分の胸元へ引き寄せた。
「ご、ごめんなさい、ママ。葉子、もう我儘いわない。葉子、いい子になる。葉子、お利口さんにする。だから、ごめんなさい。ごめ……ふ、ふぇ、ぅ、うぇーん、ひ、ひっく、う、ぅわーん」
ようやく美和の胸元に顔を埋めることができた安堵もあって、葉子は手放しで泣き始める。
「ごめんなさいを言えて、もうすっかり葉子はお利口さんのいい子になっているわよ。だから、無理しなくていいの。何度も言ってるけど、無理してお利口さんにならなくてもいい、我儘のままでいいのよ。小っちゃい子は、その方が可愛いんだから。ただ、一つだけ約束してちょうだい。ママきらいなんてひどいことは、もう二度と絶対に言っちゃ駄目。ママきらい

なんて言うようないけない子は、ママ、絶対に許さない。そんなこと言うような悪い子は、ママ、本気で叱るからね。大切な家族に憎まれ口を叩くような子はママの子じゃない。それだけはずっと忘れないでいてちょうだい」

涙でブラウスが濡れることなどちっとも気にするふうもなく落ち着いた声で美和は言い聞かせた。

つい昨日までは従姉妹どうしで親族という間柄だったのが、今は母と娘という家族に変わった自分たち。美和が口にした『家族』という言葉に胸が熱くなって葉子はますます泣きじゃくるばかりで何も答えられない。ただ、ブラウス越しに美和の豊満な乳房の感触を確かめながら小さく何度も頷くだけだ。

「やれやれ、あのしっかり者の葉子姉ぇが本当はこんなに泣き虫の甘えんぼうさんだったなんてね。うふふ、それにしても、いつまで泣いているつもりなのかしら。あ、そうだ、おむつを取り替えてあげたら泣きやんでくれるかな」

自分に対する依存心が葉子の胸の中で尚いっそう強くなっていることをありありと感じ取り、美和は満足そうに呟いて、もういちど葉子の髪をそっと撫でつけた。

＊　＊　＊

オーバーパンツを足首まで引きおろされ、左右の足首を一つにまとめて美和の手で高々と差し上げられた葉子の顔からは、涙のあとはくっきり残っているものの、不安や寂しさの色はすっかり消え去っていた。代わりに浮かんでいるのは、二つ年下の従妹だったママに対する信頼と、見る者を甘酸っぱい気持ちにさせる、ちょっぴり恥ずかしそうで、ちょっぴりはにかんで見える、あどけない笑み。

そして、たくさんのおしっこを吸ってたぷたぷになった紙おむつの代わりに新しい紙おむつをいそいそと葉子のお尻の下に敷き込む美和の目に宿るのは、いつかの怪しい光ではなく、二つ年上の従姉だった愛娘への限りない愛情と慈しみの色。

幼い頃から互いの胸の内を知り尽くし、互いに惹かれ合う二人にとって、些細な反目は、却って二人の仲を密接にするためのちょっとした刺激でしかない。

というよりも、二人の間に本当の意味の反目など生じるわけがない。反目が生じたように見えたとしても、それは、互いの絆の強さを再確認するためにじゃれ合っているにすぎない。

葉子がはいはいの練習を拒絶したせいで生じた反目も、互いの仲をより深くするために二人が無意識のうちに求め合ったために生じたものだ。遊びに夢中になるあまりおむつを汚してしまったことさえ気がつかない手の

かかる赤ん坊として美和の更なる庇護を求める葉子と、持て余すほどに溢れ出る母性でもって葉子を独り占めにし、生涯にわたって手放さないための確かな口実を求める美和が意識しないままそうした、切なく甘ったるいじゃれ合い。

「はい、できた。おとなしくしていて、お利口さんだったわね。そうだ。お利口さんの葉子にはご褒美をあげなきゃね。ご褒美、何がいい？」

新しい紙おむつのテープをしっかり留め、ギャザーの様子を念入りに確認してからオーバーパンツを引き上げ、葉子の体を抱き起こしながら美和は明るい声で言った。

「おっぱい。葉子、ご褒美、ママのおっぱいがいい！」

まるで迷いもせずに葉子は声を弾ませて答え、上半身を起こしてもらった勢いのまま美和の胸に顔を押しつけた。

「やれやれ、葉子は本当に甘えんぼうさんだこと。そんなに甘えんぼうだと、いつまでもおむつの赤ちゃんのままよ。それでもいいの？」

美和はわざとらしく溜め息をつき、ひょいと肩をすくめてみせた。

「いいの。ママ、これからもずっと葉子のおむつ取り替えてくれるんでしょう？　だったら、葉子、いつまでもおむつの赤ちゃんでいい。いつまでも、ママの、おむつの赤ちゃんがいいの」

まるで屈託のないとびきりの笑顔で葉子は言って、美和の胸に顔を埋めたまま全身の力を抜いた。

ふと気づいた美和がオーバーパンツとおむつの股ぐりにそっと指を差し入れる。

おむつの様子を探る美和の指の動きにくすくったそうにしながら、葉子はゆっくり目を閉じた。

「取り替えてあげたばかりの新しいおむつをすぐに汚しちゃうなんて本当に困った赤ちゃんね、葉子は。本当に手のかかる、本当に自分だけじゃ何もできない、本当に甘えんぼうの」

呆れたように言って、そのすぐ後、穏やかな笑顔で美和は葉子の耳許に囁きかけた

「だけど、本当に可愛い赤ちゃんなんだから」

忙しい朝

従姉妹どうしだった美和と葉子が母娘として暮し始めて二週間が経った八月半ばの朝。

いつものようにベッドの縁に腰かけて口移しで葉子に朝ごはんを食べさせた後、美和はベッドからおり、壁際の箪笥の上に置いておいた大振りのバスケットを手に提げて戻ってきた。バスケットに入っているのは、高校三年生の少女から無力な幼女に変貌した葉子にお似合いの様々な衣類。

戻ってきた美和は、食事を終えてベッドに寝かせた葉子の足下に立って腰をかがめ、ロンパースの股間に並んでいるボタンを外して、それまで股間を覆い包んでいた部分の生地を葉子のお腹の上に捲り上げた。

白の水玉模様を散らしたピンク地のおむつカバーがあらわになる。

実は、葉子が自分の家から持って来ていた紙おむつが一週間ほど前になくなってしまい、それをきっかけに、美和は布おむつを使うようになっていた。紙おむつを買い足さずにわざわざ手間のかかる布おむつにしたのは、紙おむつが濡れても葉子があまり不快な様子をみせなくなったからというのが、その理由だ。

美和との同居が始まってすぐの頃の葉子は、おしっこをしくじってしまうたび、美和の手で優しくおむつを取り替えてもらえる悦びに満ちた表情を浮かべつつも、同時に、おしっこで濡れた紙おむつに下腹部を包み込まれる不快感をしめす表情も僅かながら浮かべていた。なのに最近の葉子は、おしっこでおむつを濡らしてしまっても、美和に甘える喜悦の表情を浮かべるだけで、不快な表情はまるでみせなくなっていた。

それを葉子が紙おむつに慣れたから、というよりも、濡れたおむつの感触を葉子がすっかり気に入ってしまったからだと美和は判断した。おむつが濡れるたびに葉子は、自分が、ちゃんとトイレへ行くこともできず、おしっこが出そうなことを母親に教えることもできない、無力で手のかかる赤ん坊になったことを改めて実感し、そのことに大きな悦びを覚えているのだと美和は直感したのだ。そのように直感した美和は、おしっこでぐっしょり濡れた感触をより強く感じることができるように、それで葉子が尚いっそうの悦びを覚えることができるようにと、布おむつで葉子の下腹部を覆い包むことにしたのだった。

もっとも、より正確に説明するなら、美和が布おむつを使うことにしたのは、葉子を悦ばせるためだけが目的というわけではない。育児用品の店でドビー織りのおむつ地を買い求め、それを自分の手で縫っておむつに仕立てることを通して育児の大変さを味わい、その結果としてより深い愛情を葉子に向けられるようになると期待してのことだった。

美和は、おむつカバーの腰紐を手早くほどき、前当ての左右の端に上下に三つ並んでいるスナップボタンをぷつっぷつっと外した後、前当てを内羽根に重ねて留めているマジックテープをべりりと音を立てて剥がし、予め開かせておいた葉子の両脚の間を通して、シーツの上に前当てを広げた。更に、左右の内羽根どうしを重ね留めているマジックテープを剥がし、内羽根をお尻の両側に広げると、うっすらと黄色に染まった水玉模様の布おむつがあらわになる。

美和は、横当てのおむつを左右に開いて内羽根の上に重ね広げてから、紙おむつの時もそうしたように、葉子の左右の足首を左手で一つにまとめ持って高々と差し上げ、僅かに浮いたお尻の下から、ぐっしょり濡れた布おむつを手前にたぐり寄せて、ポリバケツの中に押しやった。

童女と見紛うような無毛の股間が丸見えになった。

数日前までならそのすべすべの肌に除毛クリームを塗り込んでいるところだが、一日も欠かさず丹念に塗布し続けた結果、今ではもうすっかり毛根までなくなってしまい、葉子の下腹部はつるつるのまま、無駄毛が生えることは生涯ない。今はまだ泌尿器科での処置の結果だと思い込み、除毛クリームの効き目に気づいていない葉子が本当のことを知った時、どんな顔をするだろう。

葉子に聞こえないよう小さな声で美和が含み笑いを漏らす。

前もって横当てのおむつと股当てのおむつを組み合わせておいた動物柄の布おむつをバスケットからつかみ上げ、葉子のお尻の下に敷き込んだ。

「んぅ……」

紙おむつの不織布のさらりとした肌触りとはまた違う、ドビー織りのコットン地の肌に密着して下腹部全体を柔軟に包み込むような優しい肌触りに、いくら我慢しようとしても我慢できない喘ぎ声を漏らしてしまう葉子。紙おむつから布おむつに変わって一週間が経つというのに、他に例えようのないほど柔らかな感触にはまだ慣れることができずにいた。

葉子の頬がうっすらと色づく様子を眺めながら美和はベビーパウダーの容器を開け、真っ白のさらさらした粉を柔らかいパフでそっと掬い取った。

どことなくか懐かしい甘い香りが部屋を満たす。

美和は、ベビーパウダーを掬い取ったパフを葉子の下腹部に万遍なく這わせつつ、時おり、最も敏感な部分にパフを押し当てた。

「や……」

童女のような股間にはまるで似つかわしくない艶かしい喘ぎ声を漏らす葉子の股間が愛液でしっとり濡れる。

「あら、お股がこんなに濡れちゃって。ひょっとしたら、ちっちが出ちゃいそうなのかな。だったら、急いで新しいおむつを当ててあげなきゃ。でも、念入りにぱたぱたしておかないと、おむつかぶりになっちゃうわね」

葉子の顔が上気して熱く火照る様子をしげしげと眺めながら、美和は尚も柔らかいパフを秘部にこすりつけ、じっくり責める。

除毛クリームを塗り込んでいた数日前までだったら、クリームを塗る指が滑ったふうを装って葉子の感じやすい部分を嬲り、クリームが不要になった今は、その代わりにベビーパウダーのパフで敏感な部分を執拗に責めたてる。

美和がそうするのは、おむつを取り替えてやるたびに葉子に淫らな快感を与え、おむつを取り替えられることが淫靡な悦びにつながることを葉子の肉体に教え込み、おむつを取り替えられることを心待ちにするよう意識付けるためだ。もともと美和の手でおむつの世話をしてもらいたいという密かな欲望を抱いていた葉子だが、その欲望がいっそう高まるように仕向け、自分への依存心を更に強めさせ、葉子の精神的な退行をますます促すために。一本の飾り毛もないつるつるの股間で、おむつの交換をまるで厭わない、なのに体だけは大きな、永遠の童女へと葉子を堕とすために。

葉子の瞳に宿ることのなくなった妖しい光は、けれど、今でも胸の奥底で仄暗く揺らめいているのかもしれない。

＊　＊　＊

葉子の下腹部にうっすらとベビーパウダーの白化粧を施し、パフを容器に収納した後、葉子の足を左手で高々と差し上げたまま美和は

「ぱたぱたが終わるまでおとなしくできて、いい子だったわね。はい、ご褒美よ。これをくちゅくちゅして、もう少しだけお利口さんにしてようね」

と、右手で葉子の口にゴムのおしゃぶりを押し当てた。

まるで躊躇う様子もなく、押し当てられたおしゃぶりを葉子が口にふくんで、きゅっと噛む。

食べ物も飲み物も全て美和から口移しで与えられる生活を送っているうちに、美和の唇が触れていない時は妙に口寂しくなり、ある日の昼寝の間、葉子は無意識のうちに自分の自分の指をちゅうちゅう音を立てて吸って眠っていたの。それを見た美和が、そうなることを思い描いて前もって買い求めていたおしゃぶりを葉子の唇に押し当て、それ以後、葉子は、美和と唇を重ね合わせていない時はおしゃぶりを咥えるのが習い性になってしまっていた。ただ、葉子が自分でおしゃぶりを咥えたり口から離したりすることは許されず、いい子にしていた時のご褒美として美和の手で口にふくませてもらったり、可愛らしい口調で「葉子、おしゃぶりほしいの。お願い、ママ」と美和にせがんで、ようやくおしゃぶりを美和の手で咥えさせてもらう必要があった。このようにして美和は、葉子が幼児の玩具をねだるよう習慣付け、かつての従姉の心を幼い頃へと徐々に、けれど着実に戻すよう仕向けているのだった。

葉子が嬉しそうにおしゃぶりを吸ったり噛んだりする音が微かに聞こえる中、美和は、股当てのおむつを葉子の両脚の間を通し、その端をおへそのすぐ下のあたりに留め置いて、高々と差し上げていた足をシーツの上に戻し、両脚を少し開かせた。それから、横当てのおむつの両方の端を股当てのおむつの上に重ねて、更にその上におむつカバーの内羽根の両端を重ね合わせ、左右の内羽根どうしをマジックテープで固定した。そうしておいて、次に、開かせた両脚の間におむつカバーの前当てを通して内羽根に重ね、前当ての両端のスナップボタンを、股ぐりに近い下の方から順に丁寧に留め、前当ての上端の位置を調節しながら内羽根に重ね直してマジックテープで留め、腰紐をきゅっと結わえる。あとは、おしっこが漏れ出さないよう、おむつカバーの股ぐりからはみ出ているおむつを指で優しくおむつカバーの中に押し込んでおしまいだ。

「ぱたぱたの後もおとなしくしていてお利口さんだったわね」

美和は、いつまでも慣れない布おむつの恥ずかしさを我慢するために盛んにおしゃぶりを噛む葉子のお尻をおむつカバーの上からぽんと叩いた。

と、何かを期待するような目で葉子が美和の顔を見上げ、

「……あのね、ママ。葉子、お利口だったご褒美ほしいの」

と、おずおずと訴えかける。

「あら、ご褒美なら、おしゃぶりをあげたでしょう？」

葉子が何を期待しているのか充分に承知しているくせに、美和はわざと不思議そうな顔をして訊き返した。

「あ、あのね、葉子、おしゃぶり、好きだよ。……でもね、でも葉子、ママのおっぱい、もっと好きなの」

おしゃぶりを口にふくんだまま喋るものだから、唇の端からよだれが溢れ出て頬を伝い流れ、枕に小さな染みをつくる。

「そうね、葉子はママのおっぱいが大好きだもんね。ママも葉子におっぱいをちゅうちゅうしてもらうのが大好きよ」

美和は鷹揚に頷いて言ったが、そのすぐ後で意味ありげな笑みを浮かべて

「でも、今朝はおっぱいをあげる時間がないの。今日はお昼前からお出かけするから、それまでに大急ぎでお洗濯を済まさなきゃいけないし、お洗濯の合間に自分のご飯も食べなきゃいけなくて、ママ、とっても忙しいのよ。だから、おっぱい、ないないなの」

と付け加えた。

「お出かけ……!?」

葉子の顔がこわばる。

今ではすっかり美和の幼い娘になりきり、赤ん坊そのままの格好をさせられることにも慣れてしまった葉子だが、それは、美和と二人きりの時だけだ。実際の年齢にはまるでそぐわない羞恥に満ちた装いに包まれた姿を

他人の目に晒すなんてできるわけがない。
「そんなに心配しなくてもいいわよ。お出かけの時は、お姉さんみたいな格好にしてあげるから」
美和は葉子の胸の内を見透かして言い、ブルー地のワンピースをバスケットから取り出して、葉子の目の前でさっと広げた。

＊　＊　＊

愛くるしい幼女が姿見に映っている。
幼女がコットンのスリップの上に着ているのは、幅の広い丸襟が目立って、パフスリーブに仕立てた三分袖が可愛らしく、アンダーバストから下がふわりと広がって裾に飾りレースのフリルをあしらった、全体的に丸っこいラインでまとめ、胸元の純白のリボンが清楚で、夏にふさわしく涼しげなブルーの生地のワンピースだ。そして足には、履き口がレースの折り返しになっている、くるぶしあたりまでの長さのソックス。お出かけだからとミトンを外してもらって、久々に自由に動かせるようになった指を曲げたり伸ばしたりする仕草が、やっとのこと自分の思うように手の指を動かせるようになったばかりの幼児めいてあどけなく可愛らしい。
大きな鏡に映るその幼女こそが、美和の手でロンパースからワンピースに着替えさせられた葉子だ。
昼間の遊び着として着せられることが多いチュニックよりも丈は幾らか長いものの、紙おむつに比べると厚ぼったい布おむつを当てているため、布おむつの厚みのせいでぷっくり丸く膨らんだおむつカバーでワンピースの裾がたくし上げられてしまって、おむつカバーを完全には覆い隠すことができない。
美和は葉子をワンピースに着替えさせる際、ソックスも履き替えさせたのだが、新しいソックスには、足底に縫い込んである低反発素材の厚みを少なくして、いつも部屋の中で履かせているソックスよりも歩きやすくするための調節が施してあった。ただ、歩きやすくなっているとはいえ、あくまでも、いつものソックスに比べれば『幾らか多少は』といったほどのことで、自在に歩き回ることはかなわず、ようやく自分の力で立っちして覚束ない足取りでよちよち歩きをするのが精いっぱいというところだ。
そんなわけで、姿見の前までは葉子に手を引かれてゆっくり歩み進んだ葉子だったが、美和が手を離した後は、その場に尻餅をつくことはかろうじて免れたものの、脚をぷるぷる震わせ、体が不安定に揺れるのを止めることもできない、見るからに危なっかしい様子で立ちすくんでいた。
立ちすくんで、体が揺れるたびにワンピースの裾がふわりと舞い上がり、ピンク地に白い水玉模様のおむつカバーが見え隠れする様子は、幼稚園や保育園に入園する頃になってようやくよちよち歩きができるようになったものの、おむつ離れはいつになるかわからない、少し成育の遅い年少さん

といったところだろうか。それでも、中におむつを当てていることが容易にわかるほどぷっくり膨らんだオーバーパンツをワンピースよりも丈の短いチュニックの裾から丸見えにして、オーバーパンツのお尻を左右に大きく揺らしながらはいはいしかできない赤ん坊の状態と比べれば、美和の言う通り、『お姉さん』なのは間違いない。

「や。葉子、お外、や！」

赤ん坊そのままの格好ではないにしても、ワンピースの裾からおむつカバーを見え隠れさせる恥ずかしい装いに、葉子はかぶりを振った。

けれどかぶりの振り方が激しくないのは、いくら拒んでも結局は美和のなすがままでしかないことをこの二週間で身をもって思い知らされたからだ。家の外へ連れ出されるのをいくら拒んでも拒みきれないことがわかっているくせに、それでも弱々しい抵抗の姿勢を見せることしか今の葉子にはできない。

「駄目よ、聞き分けのわるいこと言っちゃ。葉子がおむつをたくさん汚すからお洗濯に時間がかかっちゃって、ママ、忙しいのよ。ママが用事を済ませる間、葉子はいい子にして、積み木で遊んでいてちょうだい。葉子、もうすっかり積み木が上手になったでしょ。それに、今日はミトンを外してあげたから、もっとずっと上手にできるわよ。だから、ほら」

美和は、葉子の言うことなど聞く耳を持たずといった様子で、新しいワンピースでおめかしした愛娘の手をぐいっと引いて部屋の真ん中当りへ連れて行き、肩を押さえつけるようにして半ば強引に座らせて、目の前に積み木の箱を置いた。

「や。葉子、積み木、や。葉子、お出かけ、や。葉子、ママのおっぱいがいいの。おっぱいがいいんだってば！」

葉子は大声を上げ、美和にすがりつこうとして両手を差し延べた。

大声をあげる葉子の口からおしゃぶりが落ちてしまう。

床に落ちたおしゃぶりを拾い上げた美和は、近くに置いてあった小物入れから丈夫そうな紐を取り出し、それをおしゃぶりの持ち手側の穴に通して葉子の首にかけてやり、

「こうしておけば、いちいちママにねだらなくても、ほしい時にいつでもおしゃぶりをお口に入れることができるでしょ。今日は、おっぱいをちゅうちゅうさせてあげられない代わりに、これで我慢してちょうだい」

と言って優しく頭を撫で、くるりと踵を返して部屋を出て行った。

「ママ……」

美和が出ていったドアに物哀しげな目を向けて、葉子は、美和が首にかけてくれたおしゃぶりをおずおずと口にふくんだ。

お出かけ

「葉子、ママと一緒に住むようになってからずっとお家の中にいたきりで、お日様の光もあまり浴びてないでしょう？　それじゃ体によくないから、お出かけするのよ。葉子はまだあんよが上手じゃなくて遠くへは行けないから、行き先は近くの公園にしようね。うふふ、どんな公園デビューになるか楽しみね」

玄関のドアを閉め、弾んだ声で言って、葉子の手を引いた美和が歩き出す。

髪をツインテールに結わえ、おしゃぶりを口にふくんで、襟幅の広いブルーのワンピースを着て、ワンピースの裾からピンク地に水玉模様のおむつカバーを見え隠れさせ、おむつカバーとよく似た色の大振りのポシェットを肩にかけて、足の甲を幅広のベルトで留めるようになっている靴を履いた葉子は、足取りの覚束ないよちよち歩きで美和に付き従うしかなかった。

動物柄や水玉模様のたくさんの布おむつとおむつカバーが風に揺れながら、二人の後ろ姿を庭の一角の物干し場から見送っていた。

太陽が頭の上からぎらぎら照りつける夏真っ盛りの正午。みんなエアコンの利いた家中で昼食なのか、住宅街に人影は見当たらない。それに、お盆休みで故郷に帰省したり観光地へ出かけたりする人も多いからだろう、住宅街の中の公園は、元気いっぱいに駆け回る子供の姿もなく、過ごしやすい季節の光景が嘘のように閑散としている。

「疲れたでしょう？　ママのお膝に座らせてあげるから、ゆっくり休むといいわ。さ、おいで」

公園の一角、大きな樹のすぐそばに広げたレジャーシートの上に正座した美和は、優しく「さ、いらっしゃい」と声をかけるのではなく、自分の方がもうすっかり立場が上であることを改めて葉子に思い知らせるために「さ、おいで」と少しばかり高圧的な口調で言って葉子の体を抱き寄せ、むっちりした腿の上にお尻をおろさせて上半身を斜め抱きにした。

美和の言う通りよほど疲れたのだろう、葉子は顔を真っ赤にして肩で息をしている。

もっとも、葉子がひどく疲れている様子なのは、炎天下を公園まで覚束ない足取りでよちよちと歩いてきたせいだけではない。家から公園までの道中、人影がないとは言っても、幼女めいた恥ずかしい姿をいつ誰に見られるともしれない。それを怯えて、人見知りの激しい幼児そのまま美和の後ろに隠れるようにしておそるおそる歩いてきた気疲れのせいという方が

大きい。
「喉が渇いたでしょう？　すぐにお水を飲ませてあげるわね」
美和は葉子の上半身を斜め抱きにしたまま、肩にかけて持って来た大きなトートバッグからミネラルウォーターのペットボトルを取り出して葉子の目の前で振ってみせた。
葉子の目が物欲しそうにペットボトルを追いかける。
美和はキャップを開けてペットボトルをいったんレジャーシートの上に置き、自分が着ているブラウスのボタンに指をかけた。
「や、やだ、お外で、そんなの……」
美和が何をしようとしているのかすぐに察した葉子は美和の手の内から逃れようとして身をよじった。
だが、美和は葉子の体を更に強く抱いて離さない。
「どうしたの？　喉が渇いているんでしょう？　それに、お出かけする前はあんなにママのおっぱいをせがんでいたくせに。あの時はママ忙しくておっぱいをあげられなかったけど、今はもう大丈夫なのよ。だから、ほら」
美和は片手で葉子の体を抱きすくめ、空いている方の手でブラウスのボタンを外して胸元を大きくはだけ、ブラジャーのストリングをずらした。
「でも、だって、お外でおっぱいなんて……」
葉子は自分で口にした『お外でおっぱい』という言葉に顔を真っ赤にしてかぶりを振った。
「赤ちゃんのくせにおっぱいを恥ずかしがるだなんて、おかしな葉子。あ、でも、今日は赤ちゃんじゃなくてちょっぴりお姉さんだったわね。そうね、お姉さんなら、おっぱいは恥ずかしいわね。いいわ、だったら、これを使いましょう」
美和は言って、トートバッグから大きな布地を取り出してさっと広げた。
布地の上側には大きめの輪になった留め紐が付いている。美和は布地で自分の胸元を覆い、布地が滑り落ちるのを防ぐために、輪になった留め紐を首にかけ、布地と胸元との間に大きめの隙間ができるように全体の形を整えた。
「ほら、こうすれば、葉子の顔を隠すことができるでしょう？　それに、ママのおっぱいも見えなくなるから、まわりに人がいても、ゆっくりおっぱいをあげられるのよ」
美和がトートバッグから取り出したのは、エプロン型の授乳ケープだった。授乳ケープにはいくつか種類があるのだが、夏に使うには、体温がこもりにくいエプロン型が適している。それにエプロン型は、乳房とケープとの距離をゆったり大きく取れるから、その隙間でおっぱいを飲む赤ん坊の様子を見やすいという利点もある。
美和はケープの上から左手で葉子の体を支え、右手をケープの中に差し入れて、胸の上でペットボトルを静かに傾けた。

乳房の表面を伝い流れた水が乳首の先で雫になる。
葉子は目を輝かせて美和の乳首を口にふくんでうっとりと目を細め、乳首を甘噛みするようにして、生ぬるい水をごくんと飲み下した。
葉子の目が無言でもっと頂戴と美和にせがむ。
美和はペットボトルを更にほんの僅か傾けた。

人影ひとつない広い公園にぽつんといる、二人きりの葉子と美和。壁に囲まれた部屋で二人いるより時よりも、互いを求め合う気持ちが強くなる。
もっとたくさん水を飲みたくて、知らず知らずのうちに唇と舌に力を入れてちゅぱちゅぱと音を立てて美和の乳首を吸う葉子。
授乳ケープと乳房の隙間で懸命に乳首を吸う葉子の姿に、なんだか自分が本当に母乳を飲ませてやっているような気がしてくる美和。そんな気分を少しでも長く味わっていたくなった美和は、水がなくなってしまうのを僅かでも遅らせようとしてペットボトルの傾きを小さくした。
すると、葉子がますます唇と舌に力を入れ、尚いっそう強く乳房にむしゃぶりつく。
これまでにもまして葉子のことがうんと愛おしくてたまらなくなってしまう美和。そして同時に、ちょっぴり意地悪をしてみて、愛おしい葉子がどんな顔をするのかを想像して胸が切なくなる美和でもあった。

＊　＊　＊

微かな話し声が聞こえたのは、ペットボトルが三分の一ほど空になった頃だった。
それまで葉子の愛くるしい様子に見入っていた美和がふと顔を上げると、四〜五歳くらいの女の子と母親とおぼしき若い女性が手をつないで歩いてくるのが見えた。幼児向けの水泳教室の帰りだろうか、女の子は有名なスポーツクラブのロゴが入ったバッグを肩にかけて、頭にはタオルを巻いている。
「ね、ママ、あのお姉さん、何をしてるのかな。暑いのに、体に何か巻き付けてるよ」
こちらの様子をちらちらと窺いながら女の子が母親に話しかける声が聞こえた。
「あのお姉さんは、お姉さんっていうか、お母さんね。ああやって、お母さんが赤ちゃんにおっぱいをあげているのよ」
母親が優しい笑顔で女の子に説明してやる。大柄な美和は実際の年齢よりもかなり上に見られることが多くて、母親の目には二十歳過ぎの若いママというふうに映っているのだろう。
簡単な説明の後、母親は
「うふふ、懐かしいわね。早苗は小っちゃい頃からお外に出るのが大好き

で、機嫌がわるくて泣きじゃくっても、公園へ連れて来てあげたらすぐに泣き止んだのよ。だけど、公園にいる間にお腹が空いてきて、また泣いちゃってね。そんな時、まわりの人たちに見えないように、ママもあんなふうにケープを使って早苗におっぱいをあげていたのよ」

と続けた。

「え？　早苗、お外でママのおっぱい飲んでたの？　いつもだったら人がたくさんいるこの公園で？　やだな、恥ずかしいな」

女の子はいかにも気恥ずかしそうに言って、もういちどこちらを見た。

「恥ずかしがることなんてないわよ、赤ちゃんだった時の話なんだから。幼稚園に行ってる今の早苗があんなふうにおっぱいを飲んでたら恥ずかしくても仕方ないけどね。――あ、そうだ。プールの端から端まで泳げるようになったご褒美に、久しぶりにおっぱいを飲ませてあげようか？　あのお母さんと赤ちゃんの横に座って」

母親が冗談めかして言う。

「やだ。そんなとこお友達に見られたら恥ずかしくてたまんないよ。幼稚園へ行けなくなっちゃう」

女の子はぶんぶんと首を振って、もうこれ以上からかわれるのを避けるために何か別の話題になりそうなことをみつけようとしてだろう、もういちどこちらの方に目をやり、ちょっと不思議そうな顔で

「ね、ママ、あの赤ちゃんのおむつ、ピンクで可愛いね。でも、お隣の美鈴ちゃんのおむつと形がちがうよ。おむつって、いろんな形のがあるの？」

と訊ねた。

本当の赤ん坊に比べればずっと体の大きな葉子だから全身をケープで覆い包むことはできず、美和の腿に載せたお尻は隠せていない。しかも、美和が斜め抱きにする際にワンピースがたくれ上がってしまっていて、本当ならワンピースの裾からおむつカバーが見え隠れする程度なのだが、今は、ピンク地に水玉模様のおむつカバーが丸見えになっている。

女の子は、母親に尋ねた後も葉子のおむつカバーにじっと見入って興味津々といった様子だ。

「へーえ、今どき珍しいわね、布おむつなんて」

娘に言われて自分も葉子のおむつカバーをしげしげと眺めて（本当なら、授乳ケープの裾から見えている葉子のお尻が赤ちゃんにしては随分と大きいことに驚き、訝しむところだろうが、平均よりもずっと大柄な美和と標準よりもずっと小柄な葉子との体の大きさの対比のせいでそのことはさして気にもならず、それよりも、自分も同じく子育て真っ最中の母親どうしとして、最近では珍しい布おむつで子育てをしている若い女性に対する興味が先に立ったのか、ピンクのおむつカバーに包まれた葉子のお尻の大きさに驚く様子も訝しむ様子もまるでなく）感心したように呟いた後、改めて

「おむつは紙おむつと布おむつっていう二つの種類があって、昔は布おむ

つが多かったんだけど、今は紙おむつの方がうんと多いのよ。赤ちゃんがおしっこで濡らしちゃった布おむつは綺麗に洗濯して乾かさなきゃいけないけど、紙おむつは燃えないゴミに出しちゃえばよくて便利だからね。それに、布おむつは、おむつだけじゃおしっこが漏れちゃって、おむつの上におむつカバーを着けてあげなきゃいけなくて、いろいろ大変なのよ。だから、今は布おむつを使うお母さんは殆どいないの。早苗もそうだったし、お隣の美鈴ちゃんも紙おむつなのよ。だけど、あの赤ちゃんは布おむつね。だから、形が違うのよ」

と、幼い娘にわかるよう丁寧に説明した。

「だったら、どうして、あの赤ちゃんは布おむつなの？　紙おむつの方が便利だったら、あの赤ちゃんのお母さんも紙おむつにしたらいいのに」

母親の説明に、女の子が訊き返す。この年ごろの子供は好奇心旺盛で、あれは何？それはどうして？といった質問を繰り返して周囲を困らせるものだ。

「そうね、確かに、紙おむつの方が便利ってママ説明したわね。でも、便利か不便かってことだけじゃ決められないこともあるのよ。自分の赤ちゃんにたっぷり愛情を注ぎたくて、わざわざ生地から自分で布おむつを縫ったり、お洗濯をしてお日様の光で乾かして、お日様の匂いがするふかふかのおむつを赤ちゃんに当ててあげたいっていうお母さんもいるしね。つまり、便利か不便かっていうより、どうやって赤ちゃんに愛情を注いであげるかってことの方が大事なのかな、どんなおむつを使うか決めるのは」

どう説明すればいいのか言葉を選びながら、考え考え母親は説明した。

「だったら、布おむつを使うお母さんの方が赤ちゃんを愛してるってこと？　でも、早苗、紙おむつだったってママ言ったよね？　ママ、早苗のこと、愛してなかったの？」

母親の説明を聞いた女の子は少し考えた後、ぷっと頬を膨らませて拗ねてみせた。

「まさか、そんなことあるわけないでしょ？　やれやれ、最近すっかり口ばかり達者になっちゃって」

母親は呆れて肩をすくめてみせ、ふと何か思いついたのかくすっと笑って

「いいわ。ママが早苗のこととっても愛してるっていう証拠に、今から早苗に布おむつを当ててあげる。赤ちゃんにおっぱいをあげているお母さんにお願いして赤ちゃんの布おむつを貸してもらって、早苗に当ててあげる。そしたら、ママが早苗のこと大好きだってことがよぉくわかるでしょ？」

と、うふふと笑って娘に言い返した。

「やだよ、そんなの。もう幼稚園の年中さんなのに、おむつなんて恥ずかしすぎるよ。そんなの、年少さんにも笑われちゃうよ」

女の子は顔をかっと赤らめて再びぶんぶんと首を振り、更に話題を変えようとして

「プールの端まで泳げるようになったことパパに言ったら、ご褒美買ってくれるかな。早苗、ずっと前から、赤ちゃん人形がほしかっんだ。お隣の美鈴ちゃんみたいに哺乳壜でミルクを飲ませてあげて、おしっこでおむつを濡らしちゃうお人形。それでね、あの赤ちゃんみたいな可愛いおむつをしてる赤ちゃん人形がいいの。ママもパパにお願いしてくれる？」

と、はにかんだ様子で母親にねだった。

「いいわよ、ママからもパパにお願いしてあげる。それで、今度、プールを往復できるようになったら、その時こそ、愛情たっぷりの布おむつを縫って当ててあげようかな」

母親はとびきりの笑顔で応じた。

「いじわる。ママのいじわる」

女の子は口では『いじわる』と言いながらも、こちらもとびきりの笑顔で母親の胸に顔を埋めた。

「さすがに幼稚園の年中さんともなると、おっぱいもおむつも恥ずかしいのね。でも、葉子はどっちも恥ずかしくなんてないわよね？　今はちょっぴりお姉さんの格好をしているけど、本当はまだまだ赤ちゃんだもの。赤ちゃんの葉子がおっぱいやおむつを恥ずかしがったりするわけないわよね」

目の前を通り過ぎる二人の後ろ姿を見送りながら、美和は、母娘のやり取りなど聞こえなかったようなふうを装って無心におっぱいを吸う葉子の頬を指でそっとつついた。

＊　＊　＊

レジャーシートを敷いた場所から少し離れた芝生広場に、美和に手をつないでもらってよちよち歩きをする葉子の姿がある。

葉子に水を飲ませ終え、首にかかっているおしゃぶりを咥えさせてから、美和が、せっかく公園まで来たんだから体を動かそうよと言い、強引に手を引いて芝生広場へ連れて来たのだ。葉子は抵抗したのだが、美和に抗いきれるわけがなかった。

「ほら、あんよは上手。いっちに、いっちに」

「や、やだ、もっとゆっくり歩いてよ。急いじゃやだ」

前方に立って行く手に障害物がないかどうか確認するために時おりちらちら振り返りつつ、葉子の両手を自分も両手で支えて後ろ向きに歩く美和に、よちよち歩きの葉子が前のめり倒れそうになりながら力ない声で懇願する。

おしゃぶりを口にふくんだままだから、唇からよだれが溢れ出て顎先から胸元に伝い落ち、ワンピースに染みをつくる。

「せっかくの新しいワンピースなのに早速汚しちゃって困った子だこと。今日はいつもよりもお姉さんだから大丈夫だと思っていたけど、やっぱり、よだれかけを着けてあげなきゃいけないかしら。念のためにと思ってポシェットに入れて持って来させておいてよかったわ」

美和は歩みを止め、葉子が肩からかけているポシェットからガーゼのハンカチを取り出してよだれの跡を拭った後、これもポシェットから、大きなよだれかけを取り出した。

「や！　よだれかけ、や！」

思わず葉子は大声をあげてしまい、ワンピースの胸元に再びよだれの染みをつくって、慌てて口を閉ざした。

いつまたさっきの親子連れのように誰が通りかかるかもしれない場所で、これ以上の羞恥の装いは堪えられない。

おしゃぶりをきゅっと噛みしめて葉子は弱々しく首を振り、すがりつくような目で美和の顔を見上げた。

「いいわ、じゃ、よだれかけは後にして、今はあんよのお稽古を頑張りましょう。早くパンツのお姉さんになれるようにね」

美和はにんまり笑ってハンカチとよだれかけをポシェットに戻し、再び葉子の手を取って歩き始めた。

同級生

それからしばらくして葉子の肩がびくっと震えて脚の動きがぴたっと止まった。前方の一点を凝視したまま顔がこわばる。

葉子の目には、こちらに向かって歩いて来る二人組の少女が映っている。近づいてくるにつれ、二人が着ているのが、葉子と美和が通っているM高校の制服だということがわかる。

それも、一人は川下加奈子、もう一人は松野千夏、どちらも葉子のクラスメートだ。

「急にどうしちゃったの？　あ、ひょっとして、ちっち出ちゃったのかな？だったら、レジャーシートの所へ戻っておむつ取り替えてあげなきゃね」

葉子と顔を向かい合わせにしているせいで加奈子と千夏の姿が視界に入っていない美和が僅かに小首をかしげて、レジャーシートを敷いておいた方に向かって歩き出そうとする。

それを葉子が今度は逆に美和の手をぎゅっと握って足を踏ん張り、ジャングルジムやブランコといった様々な遊具が設置してある区画の方に向かって何度も首を振ってみせた。

本当は

「同級生がこっちに来るから、どこか他所へ行こうよ」

と言葉に出して言いたいのだが、ブラウスの胸元に更にまた染みを増やしたら今度こそよだれかけを着けさせられてしまうと思うと口を開くことができない。

今の葉子にできるのは、無言で目配せをして、遊具区画の方に向かって美和の手を引っ張ることだけだった。遊具が置いてある所へ行けば、滑り台の後ろなり、ミニアスレチックの陰なり、どこか隠れる所がある筈だ。

「ああ、遊具で遊びたいのね。だけど、あんよも上手じゃない葉子にはまだ早いんじゃないかな。もう少しお姉さんになってからの方がいいよ、きっと。でも、ま、葉子がそんなに行きたいんだったら連れて行ってあげるけど」

ようやく葉子の目配せに気づいた美和が納得顔で言う。

だが、もう遅かった。

こちらの存在に気づいた二人が足早に歩み寄り、加奈子が美和の肩に手をかけて

「夏休みになってから一度も顔を合わせてないけど元気そうね、山内さん。それに、公園であんよのお稽古をさせてあげるだなんて、すっかり『ママ』してるじゃない。うん、感心感心」

といかにも親しげに言ってにこやかに微笑み、それと同時に千夏が葉子のすぐそばに立って

「藤田さんも元気そうね。あ、ううん、こんな可愛い子に『藤田さん』なんて大人びた呼び方は変だから、『葉子ちゃん』の方がいいわよね。――葉子ちゃんも元気そうね。ママにお手々をつないでもらってあんよのお稽古かな。ママの言いつけを守って頑張るのよ」

と、こちらも笑顔で話しかける。

「え……!?」

葉子はわけがわからなかった。

同級生二人の自分たちへの接し方。そこには、驚いた様子や訝しむ様子は微塵もない。美和が母親として振る舞い、葉子が美和の幼い娘として振る舞っているのをまるで当たり前のことに思い、葉子と美和に対してごく自然に――高校生なのに口にはおしゃぶりを咥え、丈の短いワンピースの裾からおむつカバーを見え隠れさせている葉子に対しても、そんな葉子の母親然としてあんよの練習をさせている美和に対しても、それがまるで当たり前のことにように接してくる加奈子と千夏。

葉子は、ふと思い出した。

（たしか、二人とも美和ちゃんと同じ家庭科部だった筈。それが何か関係しているのかも。ううん、でも……）

「加奈子先輩と千夏先輩には私が教えてあげたのよ、葉子が可愛い赤ちゃんになっちゃったことや私が葉子のママになったことを。葉子がロンパースのお尻を揺らして一生懸命はいはいのお稽古をしているところや、おし

やぶりを咥えたままねんねしている葉子がお目々を覚まさないように気をつけながら私がおむつを取り替えてあげているところを撮った動画をメールに添付してね」
葉子の疑念を見透かすかのように、こともなげに美和が言ってくすっと笑った。
「ど、どうして、そんな!?」
なんとも表現しようのない表情を浮かべ、唇の端からよだれが溢れ出すのも気がつかない様子で思わず口を開いてしまう葉子。
「あら、葉子ちゃんたらご機嫌斜めだこと」
千夏がわざと驚いたように言う。
そこへ加奈子が
「甘えんぼうの葉子ちゃんはママにべったりで、ちょっと人見知りなところかありそうだから、急に私たちに話しかけられてびっくしちゃったのかな」
と、それこそ幼児をあやすような口調で言い、時おり美和がそうするように葉子の髪をそっと撫でつけて
「でも、ずっと一緒にいるうちに私たちにも慣れてくれるわよね。だから、葉子ちゃんに気に入ってもらえるよう、今日からしっかりお世話して可愛がってあげるわね」
と、葉子の顔を正面から覗き込んで付け加えた。
「そうね、今日から一週間、頑張って葉子ちゃんのお世話の仕方を覚えて、葉子ちゃんと仲良しにならなきゃね」
加奈子と同じように千夏も葉子の顔を覗き込んで大きく相槌を打つ。

わけがわからないまま唖然とした表情で立ち尽くすだけの葉子がぶるっと腰を震わせたのは、それからほどなくしてのことだった。 葉子は口にふくんでいるおしゃぶりをきゅっと噛んで、もういちど、今度は少し大きく腰を震わせた。
「あ……」
蝉時雨にかき消されそうなほど弱々しい声が葉子の口から漏れて、よだれがワンピースの胸元に新しい染みをつくる。
「どうしたの、葉子ちゃん!?」
慌てた様子で葉子に声をかけた千夏だが、加奈子が指差す方を見て、すぐに納得顔になる。
加奈子が指差す先では、美和が芝生に膝をついて体をかがめ、葉子のおむつカバーの股ぐりに指を差し入れて、二人に向かって意味ありげに頷いてみせていた。
「しくじっちゃったみたいね、葉子ちゃん」
千夏が美和に声をかける。
「ええ、ぐっしょりです。おむつは出かける少し前に取り替えてあげたき

りだし、あんよのお稽古の前にお水をたくさん飲ませてあげたから仕方ありませんね。ただ、最近はおむつを汚しちゃう回数が増えているし、おむつを汚しちゃったことを教えてくれないことも多いいから、これまでよりもこまめに確かめてあげなきゃいけないみたいです」

美和は説明して、おむつカバーの股ぐりに差し入れた指をそっと抜いた。

美和の言う通り、葉子は数日前から、昼間といわず夜といわず、おもらしの回数が増えている。美和におむつを取り替えてもらうことに異様な悦びを覚える葉子は、下腹部をじわじわと生温かく濡らしながらおしっこがおむつ全体に広がってゆく感触や、おしっこを吸収したおむつで蒸れておむつカバーの中がじとっと湿っぽくなる感触や、おしっこのおむつがゆっくり冷えて体をぞくりと震わせる感触の虜になり、無意識のうちにおむつを自分のおしっこで汚してしまうのを心待ちするようになっていたのだが、濡れた感触が紙おむつに比べてよりはっきりわかる布おむつを使うようになってからは、その性向がいっそう顕著になっているのだ。

それに加えて、美和との同居生活が始まって二日目に積み木遊びの最中におむつを汚してしまったにもかかわらず、そのことを美和に告げず、遊びに夢中になるあまり自分がおむつを濡らしたことさえ気がつかない幼児のように振る舞ったことが強烈な体験となって心の奥底にいつまでも残り、同居生活が始まって間もない頃は（美和に甘えるために）おむつを汚したことを「ママ、葉子、おむつ、ちっち」のような幼児言葉で告げていたのが、いつしか、おしっこをしくじってしまってもそれを明確に言葉では伝えず、むずがることでしか母親におしっこのことを伝えられない低月齢の赤ん坊そのまま美和の指でおむつの具合を確かめてもらうことに倒錯的な被虐の悦びを覚えるようにもなっていた。

しかも、同居生活が始まって二日目に美和が自分のそばからいなくなったことがきっかけになって、それ以後、自分の視界の中に美和の姿が見当たらなくなると、すぐに我慢できなくなっておむつを濡らしてしまうようにもなっている葉子だった。もともと、美和の庇護を求めるあまり夜尿を繰り返すようになり、ついには意識がある間もおもらしでおむつを汚すようになった葉子だから、美和の優しい顔が見えず、美和の柔らかい手に触れられない状況に置かれたりすれば、すぐに心が悲鳴をあげてしまう。心の悲鳴は、寂しさのせいで声を出すことさえかなわない葉子が目の前にいない美和を自分のもとに呼び戻すための切ない訴えかけだった。たとえば今日も、用事を片付けるために美和が部屋を出て行ってすぐ、美和が出て行ったドアを物寂しげにみつめながら、知らず知らずのうちに葉子はおむつを汚してしまい、用事を終えて戻ってきた美和の問いかけに対して「葉子、おむつ、ちっち、ない」と答え、答えつつ頬をうっすら赤らめる様子を見て取った美和がおむつカバーの股ぐりに指を差し入れ、おしっこでじとっと濡れた下腹部を美和の指にまさぐられる感触に陶然としてしまった葉子だ。

葉子の美和に対する依存心は、そうなるように仕向けた美和が思っているよりもずっと早く強く葉子を虜にしていた。

＊　＊　＊

「や。ママがいいの。ママじゃなきゃやだってば……」
大きな樹のそばに広げたレジャーシートの上に寝かされて葉子は盛んに涙声で訴えかけ、弱々しく首を振った。
唇の端から溢れ出たよだれが頬を濡らす。
それをレジャーシートに寝かせる前に着けておいたよだれかけの端で綺麗に拭いながら、美和が
「いい子だからおとなしくしてちょうだいね。
これからは加奈子お姉ちゃんと千夏お姉ちゃんにもおむつを取り替えてもらうことになるんだから、早く慣れておかなきゃいけないのよ。その間ママがあやしてあげるからぐずっちゃ駄目よ。ほら、からころからころ」
と言い聞かせ、トートバッグから取り出したプラスチック製のガラガラを振り鳴らした。
からころからころ。
からころからころ。
軽やかな音色が蝉時雨と入り交じって、どこまでも広がってゆく。

「加奈子お姉ちゃんと千夏お姉ちゃん……？」
美和が言った『お姉ちゃん』という言葉に、涙声はそのまま、葉子がきょとんとした顔で聞き返す。
そうしている間にも千夏がワンピースの裾を葉子のお腹の上に捲り上げ、おむつカバーの腰紐を解いて、おむつカバーの前当ての端に並んでいるスナップボタンを一つずつ丁寧にぷつっぷつっと外す。
「あと二週間ちょっとで夏休みは終わっちゃうのよ。そしたら、学校へ行かなきゃいけない。それまでに葉子、おむつ離れできるかしら？」
ガラガラを振り鳴らしながら、美和は、すっと目を細めて葉子に問いかけた。
はっとした表情が葉子の顔に浮かぶ。
胸の奥底に抱いていたひそかな願望が現実ものになって美和に思いきり甘え、美和に世話をしてもらう毎日。美和の乳首からミルクや水を飲み、美和の手でおむつを取り替えてもらい、美和に全てを委ねる生活。そのような甘美きわまりない日常から抜け出せる心の強さを自分が持ち合わせていないのは明らかだ。卒業に必要な出席日数を確保するために嫌々ながら学校へ行ったとしても、美和がそばにいないと自分では何もできなくなってしまっている今、一年生が校舎の三階、三年生が一階と教室が遠く隔て

られている状況で学校生活を無難に送れる筈がないことは自分自身が痛いほどわかっている。

「だから、家庭科部の加奈子先輩と千夏先輩にお願いしたのよ、葉子のベビーシッターになってほしいって。二人とも葉子と同じクラスだし、それに、大学は幼児教育の分野に進んで、ゆくゆくは小っちゃい子と接する機会が多いお仕事を志望していて、これまでの文化祭でも幼児教育の変遷とかをテーマにした展示物に力を入れていたというほど子供好きだから無理を承知でお願いしたんだけど、快く引き受けてもらえることになったのよ」

美和は加奈子と千夏の顔を交互に見て言った。

その千夏は今、葉子の左右の足首を一つにまとめて掴み持って、そのまま高々と差し上げ、ぐっしょり濡れたおむつを手前にたぐり寄せている最中だ。いくら子供好きで、家庭科部の校外活動として近くの保育園や幼稚園に赴いて実際に子供の面倒をみさせてもらう実習を経験しているとはいえ、実際の赤ん坊よりもずっと体の大きな葉子の、しかも本当は高校の同級生である葉子のおむつを取り替えるのだから、手つきがぎこちないのも仕方ない。

「ベビーシッター……」

葉子は美和が口にした言葉をぽつりと繰り返した。

「そうよ、葉子のベビーシッターよ。今日から一週間、ママのお家で一緒に暮して、どんなふうに葉子のお世話をすればいいのか実際に経験して、学校が始まったら、授業中に汚しちゃった葉子のおむつを保健室のベッドで取り替えてくれて、お昼休みになったら、固い物を食べられなくなっちゃった葉子を保健室へ連れて行って離乳食をたべさせてくれるベビーシッター。夏休みが終わったら葉子は卒業の日まで、お家ではママに、学校では同級生でベビーシッターの二人にお世話してもらうのよ、手のかかる赤ちゃんとしてね。だから葉子は二人のことを、お家に遊びに来て葉子の面倒をみてくれる親戚の優しいお姉さんだと思って、加奈子お姉ちゃんとか千夏お姉ちゃんって呼ぶの。わかる？　加奈子お姉ちゃんと千夏お姉ちゃんは、葉子のお世話の仕方をおぼえるために今日から家族になってくれるのよ。とっても大切な家族にね」

美和は言って、反応を確かめるかのように、葉子の顔を正面から覗き込んだ。

すると横合いから

「お姉ちゃんだなんて、なんだか照れちゃうな。私も加奈子も一人っ子で、妹がいたら楽しいだろうなっていつも二人で話してて、それが本当にこんな可愛い妹ができちゃって、しかも、おむつのお世話をしてあげなきゃいけない赤ちゃんの妹ができちゃって、なんだか胸がむずむずしちゃって、とっても照れくさいや」

と千夏が弾んだ声で話しかけ、くすぐったそうな表情で加奈子と目配せを交わし合って、満更でもなさそうにえへへと笑った。

えへへと笑う千夏のかたわらで、こちらも同じく照れくさそうにしながら加奈子が丸っこい容器の蓋を開けて柔らかなパフでベビーパウダーを掬い取り、千春が足を高々と差し上げたままにしている葉子の無毛の下腹部にうっすらと白化粧を施してゆく。

＊　＊　＊

不意に、幼児特有の遠慮のない
「あ、さっきの赤ちゃんだ。赤ちゃん、さっきはおっぱい飲ませてもらってたけど、今度はおむつ取り替えてもらってる」
という甲高い声が聞こえた。
振り向いた美和の視線の先には、授乳ケープを使って葉子に水を飲ませていた時に目の前を通り過ぎて行った女の子の姿があった。
ただ、さっきとは違って今度は、母親だけではなく、父親とおぼしき男性も一緒だ。
「駄目でしょ、早苗。急に大声を出して赤ちゃんがぐずったらどうするの」
手をつないで歩いていた母親が女の子をたしなめ、恐縮しきりの様子で
「さきほどといい、今といい、娘が失礼なことをしまして申し訳ありません。お子さん、むずがったりしていませんか？」
と、いかにもすまなそうに美和に向かって頭を下げる。
葉子を取り囲むようにして座っている三人の体に視界が遮られているせいだろう、やはり母親は葉子の体が赤ん坊にしては異様に大きいことには気がついていない様子だ。
「いえ、娘は大丈夫です。泣き出したりしないで、時々面倒をみてくれている高校生のお姉さんにおとなしくおむつを取り替えてもらっています」
美和は母親に向かって、気にしないでくださいと手を振った。
こんなふうにして葉子の面倒をみるのは今日が初めてだけどねとぺろりと舌を突き出して、母親に気づかれないよう注意を払いながら加奈子と千夏がくすくす笑い合う。
けれど女の子は、少したしなめられたくらいで言動を改める様子はまるでなく、
「あのね、赤ちゃんのママ。早苗、プールの端まで泳げるようになったご褒美に赤ちゃん人形を買ってもらうの。今からパパとママと一緒に買いに行くんだよ。いいでしょ」
と、そのことがよほど嬉しいのだろう、声を弾ませて、えへんと胸を張ってみせた。
「よかったわね。せっかくだから、可愛い人形を買ってもらうといいわ」
女の子の無邪気な喜びようにこちらも明るい笑顔になって美和が言葉を返す。
「うん、わかった。とっても可愛い赤ちゃん人形をおねだりするね。今度

また会ったらみせてあげる。じゃ、行ってくるね。――あ、そうだ。早苗が大声を出しちゃったせいで赤ちゃんが泣いちゃったらごめんなさい」
女の子は手を振って歩き出しかけたが、ふと足を止めてぺこりと頭を下げてから、母親と父親に手をつないでもらって改めて歩き出した。
三人が親子連れの後ろ姿に向かって手を振る。
その後も
「お家で早苗が話してたの、さっきの赤ちゃんのことだよ。ね、赤ちゃん人形、あの赤ちゃんみたいなおむつしてるお人形がいい。ママに教えてもらったんだけど、赤ちゃんのおむつ、布おむつっていうんだって。早苗、布おむつの赤ちゃん人形がいい」
と女の子がねだる声と、
「でも、布おむつの赤ちゃん人形なんて売ってるのかな。今は紙おむつばかりだと思うんだけど。ま、探してみてみつからなかったら、お店の人にも聞いてみようか。それで駄目だったら、ネットで探してみようかな」
と、少し困ったように父親が応じる声が微かに聞こえ、
「あの子が欲しがっている赤ちゃん人形が見当たらなかったら、代わりに葉子を貸してあげるのもわるくないかもね。今度会うことがあったら、お家を教えてもらおうかな」
と、誰に言うともなく美和が呟いた。
冗談めかした口調だが、美和のことだからそれが冗談だと断言することもできずに、葉子はぞくりと背中を震わせてしまう。

親子連れを見送った後、千夏はふかふかの股当てのおむつで葉子の股間を覆い包み、横当てのおむつの両端を股当てのおむつに重ね置き、その更に上におむつカバーの左右の内羽根どうしをマジックテープで重ね留めて、両脚の間に通した前当てのボタンを丁寧に留めた後、腰紐をきゅっと結わえた。
そして最後に、最近の校外活動で赴いた、布おむつの使用を推奨している保育園での実習を思い出して、おむつカバーの股ぐりからはみ出ているおむつを優しく指でおむつカバーの中に押し込んで、ようやくおしまいだ。
「さ、できた。ちょっともたついちゃったけど、おとなしくしていてくれてお利口さんだったわね、葉子ちゃん」
同級生の手でおむつを取り替えられた羞恥のために顔を真っ赤にしている葉子の上半身を加奈子と二人で抱き起こしてやって、千夏は葉子の頭を優しく撫でた。
葉子の顔がますます赤く染まる。
「山内さんからのメールじゃ、おむつを取り替えてもらう間おとなしくしていたら、ご褒美におっぱいをちゅうちゅうさせてもらえるんだってね？
せっかくだから、今日はママの代わりに私がおっぱいをちゅうちゅうさ

せてあげようか？」
葉子の頭を撫でる千夏のかたわらで、意味ありげな笑みを浮かべて加奈子が言った。
それに対して、更に耳の先まで真っ赤にして葉子はかぶりを振る。
「どうして？」
加奈子が短く問い質す。
「……ま、ママがいいの。葉子、ママの……」
少しだけ逡巡してから言いかけて、けれど言い淀んで、それでも葉子は少しだけ間を置いて
「……葉子、ママのおっぱいがいいの。葉子、ママのおっぱいが大好きで、ママじゃなきゃ駄目なの。だから、ごめんね。おっぱいちゅうちゅうさせてあげるって言ってくれたのに、葉子、ママじゃなきゃ駄目で、だから、ごめんね。――ごめんなさい、加奈子お姉ちゃん」
と、つっかえつっかえしながらも最後まで言葉にして、くすぐったそうな表情を浮かべて加奈子のことを『お姉ちゃん』と呼んだ。
すると加奈子が、満面の笑みを浮かべて
「私、今、とっても嬉しいんだ。葉子ちゃんが私のことを『加奈子お姉ちゃん』って呼んでくれて、私のおっぱいを断ったことをちゃんとごめんなさいしてくれて、私、とっても嬉しいんだよ。それになにより、自分が誰を好きなのかちゃんとわかっていて、好きな人のことを言葉できちんと好きだって言えて、好きな人のおっぱいの感触をしっかり憶えている、葉子ちゃんがそんなにも素直でいい子でいることが、私、嬉しくてたまんないんだよ」
と、教室では聞いたことのないようなはしゃいだ声で、ううん、正確に言えば、はしゃいでいる中にちょっぴりだけ哀しそうな様子が混ざった声で言って、千夏の顔をちらと見て、
「そんないい子の葉子ちゃんには、私たちのことをちゃんと知っておいてほしいんだけど――千夏もそれでいいよね？」
とここだけは真剣な顔つきになって念を押すように訊ねて、それから、また笑顔に戻って、どんな答えが返ってくるのかわかりきっている様子で、千夏が返事をする前に
「あのね、私と千夏はこういう仲なんだよ。しっかり見ていてね」
と言って、千夏と唇を重ね合わせた。
予め知っていたのだろう、そして、知っていたからこそ葉子のベビーシッターの役を二人に依頼したのだろう、美和は平然とした顔で、唇を重ねる二人の姿を見守っている。
葉子も、まるで驚かなかった。驚くどころか、むしろ、ぱっと顔を輝かせて、二人が唇を重ね合わせる様子に見入っている。
「葉子、わかってた。加奈子お姉ちゃんと千夏お姉ちゃんがとっても仲良しだってこと、葉子わかってた。お姉ちゃんにおむつを取り替えてもらう

の、最初は恥ずかしくて泣いちゃいそうだった。でも、二人のお手々、とってもあったかだった。あったかでやわらかで、それで、加奈子お姉ちゃんと千夏お姉ちゃん、とっても息が合ってて、おしっこをお尻拭きできれいきれいしてもらうのも、ベビーパウダーをぱたぱたしてもらうのも、二人で一緒にしてくれて、葉子、とっても気持ちよかった。だからすぐにわかったの。加奈子お姉ちゃんと千夏お姉ちゃんがすごく仲良しだって。仲良しで仲良しでキスしちゃうくらい大の仲良しだってこと、葉子、すぐにわかったんだよ」

おしゃぶりを口にふくんだまま話し続けるものだからとめどなくよだれがこぼ出て、よだれかけの染みがどんどん大きくなる。けれど、そんなこと気に留めるふうもなく葉子は言って加奈子と千夏の顔を上目遣いに見上げた。

新たな保護者

家に戻ってすぐ、美和は加奈子と千夏を来客用の寝室に案内した。
葉子がこの家にやって来た日に使おうとしたが、強引に美和の部屋へ連れて行かれてしまい、結局は使うことのなかった寝室だ。
寝室に入ってすぐの所に、加奈子と千夏が前もって宅配便で送っておいたダンボール箱が幾つか置いてある。

「ベッドは本格的なダブルじゃないけどヨーロッパ製のセミダブルだから、二人で一緒に寝てもらっても窮屈じゃない筈です。遠慮なさらず、存分に二人仲良く使ってください」
寝室に入って先ず、美和はベッドをぽんと叩き、『二人仲良く』という部分を意味ありげに強調して言った。
言われて、加奈子と千夏が気恥ずかしそうに目を見合わせて頬を染める。
実は、二人が美和の家を訪れるのは今回が初めてのことではない。将来は服飾デザインに関係する職業に就きたくて、その手始めとして縫製の基礎を学ぶために家庭科部に入った美和だったが、入部してすぐに、家庭科部の先輩である加奈子と千夏から自分と同じ『匂い』を嗅ぎ取って或る予感を仄かに抱き、それから入念に二人の様子を観察してみて、仄かな予感は、二人が自分の『お仲間』だという固い確信に変わった。以来、美和と二人の仲は急速に接近し、遂には美和が、誰の目も憚らずに愛の営みを行うための場所として自宅の来客用の寝室を使ってもらってもいいですよと二人に申し出るまでになり、最初は躊躇いがちだった二人も美和の強い勧めがあって申し出を受け入れ、それから後は週末にたびたび美和の家を訪れ、ベッドで『二人仲良く』時間を過ごし、汗と愛液にまみれた体を浴室のシャワーで綺麗にしてから、仲睦まじく一つのベッドで就寝し、美和が用意する朝食と昼食をとってから帰宅するほどになっていた。
二人が愛の営みのために美和の家を訪れる際は、家庭科部の次の展示会に向けて泊まり込みの準備をするからと告げ、きちんと制服を着用して家を出るといったことを忘れず、家人にあやしまれないようよう心がけており、もちろん今回の一週間にわたる美和や葉子との同居生活においても、同様の手段を使って家人に訝しまれないよう細心の注意を払っている。
更に付け加えて説明しておくと、家庭科の教諭が女子の生活指導全般を受け持っていて忙しいこともあって、保健室をまかされている養護教諭が家庭科部の顧問を務めているのだが、実はその養護教諭も美和たちの『お仲間』であり、様々な性嗜好に対する理解が深く、葉子のおむつを取り替えたり葉子に離乳食を食べさせるのに保健室を使わせてもらえるよう依頼したところ、あっさり認めてくれたのは、美和たちにとって、まさに僥倖

だった。

ベッドの次に美和は備え付けの箪笥の引出やクローゼットの扉を開けて「こちらも自由に使ってください。葉子が高校生のお姉さんだった時の着替えが入っていたんですけど、一週間前にすっかり処分しちゃいましたから」

と、葉子の顔をちらと窺い見て二人に説明した。

葉子がこの家にやって来た日の夕方、予め宅配便で送っておいた衣類を寝室の箪笥やクローゼットに収納したのだが、その日の夜におむつのことを知られてしまい、それ以後は美和お手製のベビー服や女児服での生活が続き、更には一週間前に紙おむつがなくなった後は布おむつを使うようになると、それをきっかけに美和がベビー箪笥を買い求めて自分の部屋に置き、手縫いした布おむつやおむつカバーと、それまではバスケットやダンボール箱に入れていたベビー服と女児服をベビー箪笥に収納し、それと同時に、葉子の本来の衣類を、もう着ることはないからと、外出着も部屋着も、それに、パジャマや下着の類いも含めて、全て処分してしまったのだ。まだ残っている葉子の衣類といえば、僅かに高校の制服と体操着だけが美和の部屋のクローゼットに肩身狭げに掛けてあるだけになってしまっている。

何も入っていないことを確認するために引き開けた箪笥の引出やクローゼットの扉を再び閉めてから美和はもういちどベッドのすぐそばに戻り、ベッドと壁の間を指差して

「夕方には、葉子の体の大きさに合わせて特別に注文して作ってもらったベビーベッドが届いて、ここに置くことになっています。さすがに三人一緒に寝るにはセミダブルじゃ狭いから、葉子はベビーベッドにねんねさせてください。少しくらい寝相がわるくても転げ落ちないようにしっかりした囲い柵を付けてもらっているから一人でねんねさせても大丈夫だし、それに、聞きわけがわるい時は、お仕置きとして、自分ではベビーベッドから出られないようにして反省させるのに使ってもらってもいいですよ」

と、にんまり笑って加奈子と千夏に説明した。

それを聞いた葉子が

「や！　葉子、ママとねんねがいい。ひとりぼっちでベビーベッド、や！」

と、今にも泣き出しそうな顔をして美和のもとに駆け寄ろうとする。

だが、いつもよりは歩きやすいといっても、よちよち歩きしかできないよう細工を施したソックスを履かされているものだから、足を踏み出した途端に体のバランスを崩して尻餅をついてしまいそうになった。

と、そこへ加奈子が咄嗟に両手を差し延べて、今にも仰向けに倒れそうになっている葉子の体を受け止め、自分の胸元に抱き寄せた。

「大丈夫？　痛いところはない？」

優しく問いかける加奈子にどう答えていいのかわからず、葉子は曖昧に頷くだけだ。
美和ほどではないにしてもどちらかというと豊かで張りのある乳房が制服越しに頬に触れて、葉子をどぎまぎさせる。
その様子を見た美和がふと何か面白いことを思いついたような顔になって
「せっかくだから、そのまま抱っこで加奈子お姉ちゃんにお風呂場まで連れて行ってもらいなさい。それで、あんよのお稽古でかいた汗を加奈子お姉ちゃんと千夏お姉ちゃんにシャワーできれいきれいしてもらうといいわ。先輩たちも暑い中をきちんと制服で汗をかいているでしょうし、いつもみたいに二人仲良くシャワーを浴びてきてください。もっとも、葉子も一緒だから、今回はあまり仲良くはできないかもしれませんけど」
と言い、葉子を横抱きにしている加奈子と千夏の背中を押すようにして寝室をあとにした。

廊下に出た後も葉子は懇願をやめない。
金切声や、すすり泣きの混じった声で
「や！　葉子、ママとねんねなの。ママのベッドで、ママに抱っこしてもらってねんねがいいんだってば」
と切々と訴えかけ続ける。
それに対して美和が
「一緒にねんねできなくて寂しいのは葉子だけじゃないのよ。ママも寂しくてたまらないの。でもね、葉子が夜泣きをやめない時や、怖い夢を見て泣きじゃくっちゃう時にどうやってあやせばいいか、加奈子お姉ちゃんも千夏お姉ちゃんも実際に経験してみないとわからないでしょう？　それに、お目々が覚めている時のおもらしとねんねの時のおねしょじゃおしっこの量が違うからおむつの枚数も調節しなきゃいけないんだけど、それも実際に経験してみないとわからないことなのよ。だから、加奈子お姉ちゃんと千夏お姉ちゃんがうちにいる間は葉子と一緒にいて、いろいろ憶えてもらわなきゃいけないの。昼間も夜も、ずっと一緒にね。だから、その間、ママとねんねさせてあげられないの。葉子はお利口さんだもの、わかってくれるよね？」
と宥めすかすのだが、葉子は
「や。葉子、お利口さんじゃない。葉子、いい子じゃない。葉子、ママとねんねなの！」
と言ってきかない。
そんな葉子の様子に美和はもうこれ以上は聞く耳もたずというふうに一度だけ小さく首を振り、
「いいから、加奈子お姉ちゃんと千夏お姉ちゃんにシャワーで体をきれいきれいしてもらってらっしゃい。今からママは夕飯の材料を買い行くから、

その間、お姉ちゃんの言いつけをきいていい子でいなきゃ駄目よ」
と葉子に言い聞かせ、あとのことはお願いしますと二人に声をかけて、廊下を足早に歩き始めた。
「ママ、ママ！　葉子もママと一緒に行く。葉子、ずっとママと一緒なの。葉子、ママがいいの。ママがいいんだってば……ふ、ふぇ、ふぇーん。うぅ、ぅわ、うわーん」
美和の後ろ姿が見えている間は声の限りに訴えかけ、美和が玄関から出て行った後は手放しで泣きじゃくって、加奈子に抱きかかえられたまま葉子は何度も身をよじった。

＊　＊　＊

「あら？」
浴室でバスチェアに座り、自分の膝の上に葉子を座らせて加奈子がシャワーでお湯をかけてくれるのを待っていた千夏だが、まだシャワーのお湯がかかっていないにもかかわらず自分の脚が濡れる感触を覚え、不思議そうな顔をした。
が、原因はすぐにわかった。
膝の上に座らせた葉子が、泣きじゃくりながらおしっこを漏らしてしまったのだ。
美和の姿が見えなくなると、寂しさのあまりおむつを汚してしまうのが習い性になってしまった葉子。だが、玄関のドアが閉まって美和の後ろ姿が見えなくなっても、千夏と加奈子の存在が気になって、しばらくの間はおしっこを我慢できていた。それが、千夏と加奈子の手でワンピースとスリップとソックスを脱がせてもらい、汗でじっとり濡れたおむつを外してもらって浴室に連れて来られ、千夏の膝に座らされる間にとうとう我慢できなくなって、漏れ出たおしっこで千夏の両脚をしとどに濡らしてしまったのだった。
葉子の無毛の股間からおしっこの雫がぽたぽたと滴り落ちて自分の脚を濡らす様子を目にした千夏は、葉子の太腿の裏側に手を差し入れ、小柄な体を後ろから抱え上げた。
美和ほどではないにしても葉子と比べれば体はずっと大きいし、校外活動で保育園や幼稚園に赴くたびに園児を抱っこして喜ばせているうちに筋力がついて、葉子の太腿を支えて背後から抱き上げることはさほど難しくない。
急に後ろから抱え上げられ驚いて思わず身じろぎした瞬間、下腹部の力がふっと抜けて、それまでぽたぽたと雫になって滴り落ちていたおしっこがそれまでよりも激しく溢れ出し、細い条になって葉子の股間から流れ滴る。間を置いてぴちゃんぴちゃんと聞こえていた浴室の床におしっこが落

ちる音が、たぱぱぱという続いた音に変わる。
壁に嵌め込みになっている鏡に葉子の下腹部が映るように千夏は更に高く葉子の体を抱え上げた。
葉子の下腹部から溢れ出るおしっこが千夏の膝と腿を濡らし、そこから両脚の表面を伝い流れて床に落ち、白い泡を立てて排水口に吸い込まれてゆく。

「や、やだ。そんなことしてたら、千夏お姉ちゃんの脚、おしっこでびしょびしょになっちゃうよ。葉子のおしっこで汚れちゃうよ。だから、おろして。葉子を床におろして、おしっこで汚れちゃった脚をきれいきれいしなきゃ駄目だよ」
美和がいない寂しさに泣きじゃくりながら、それでも葉子は千夏を気遣い、声を震わせて訴えかけた。
それに対して千夏は
「いいのよ、これで。ちっちが出そうなことを教えられるようになった赤ちゃんはね、こんなふうに後ろから抱っこしてもらっておしっこをさせてもって、おむつにばいばいするためのお稽古をするのよ。葉子ちゃん、ママにこんなふうにしておしっこさせてもらったことはある？」
と穏やかな声で逆に訊き返した。
「ない。こんなこと、ママ、葉子にしない」
鏡に映る自分の痴態になぜだかじっと見入ってしまいつつ、葉子は答えた。
「じゃ、もう一つ訊くけど、葉子ちゃんはママにこんなことをしてもらいたい？　ああ、ううん、ママじゃなくても、たとえば私でもいいんだけど、葉子ちゃんは誰かにこんなふうにしておむつにばいばいするためのお稽古をさせてほしい？　お稽古を続けたら、おむつにばいばいできて、パンツのお姉さんになれるのよ」
千夏は重ねて問いかけた。
「や。葉子、おむつにばいばいするお稽古、や」
葉子はふっと鏡から視線を外して顔を下に向け、おしっこが溢れ出る自分の無毛の股間と、飾り毛が綺麗に生え揃っている千夏の股間をおどおどと見比べ、うっすらと頬を赤くして答えた。
「どうして？」
「だって、葉子、おむつが……」
答えかけて言い淀む葉子だったが、何度も瞼をしばたたかせてから
「……葉子、おむつ、好きだもん。葉子、ちっちのおむつママに取り替えてもらうの、大好きだもん。おむつ取り替えてくれるママ、とっても優しいもん。だから、おむつにばいばいするの、や！　おむつ恥ずかしくてパンツのお姉さんになりたいって思う時もあるよ。でも、でも、おむつ恥ずかしくても、ううん、おむつ恥ずかしいから、それが気持ち良くて、それ

で、おむつ大好きなんだもん！」
と最後はきっぱり言って、唇をきゅっと噛みしめた。
その頃になるともうそろそろおしっこもおしまいになってきたのか、股間から流れ出る条がずっと細くなって、ほどなく、途切れ途切れの雫にかわった。
千夏は、抱え上げていた葉子の体をそっとおろして、再び自分の膝の上に座らせた。
密接する千夏の体がなぜだかとっても温かく感じられて、二度三度としゃくりあげてから葉子が泣きやむ。

「葉子ちゃん、優しいママが大好きで、おむつが大好きなんだ。ママも葉子ちゃんの気持ちを知っていて、だから葉子ちゃんにトイレトレーニングをさせないのね」
それまで葉子と千夏の様子をそっと見守り、二人のやり取りを静かに聞いていた加奈子が言って葉子の顔を自分の方に向けさせ、固い乳首を口に押し当てた。
「え……!?」
「葉子ちゃん、公園で、ママのおっぱいじゃなきゃ駄目って言ってたよね。だから私、葉子ちゃんにおっぱいをちゅうちゅうしてもらうのを諦めた。でもね、やっぱり、ちゅうちゅうしてほしくなっちゃったの」
これまで一度も見たことのない真剣で少し物寂しげな表情で加奈子は言った。
「私は千夏のことが好きで、千夏は私のことが好きで、お互いに大好きどうしで、すぐにでも結婚しちゃいたいほどよ。でも、そんなこと絶対に無理なんだけど、もしも結婚できたとしても、どうしても叶えられない願い事があるのよ」
加奈子は、怖いくらい真剣な目で葉子の顔をじっとみつめる。
「当たり前のことなんだけど、どんなに愛し合っても子供ができないのよ、女の子どうしじゃ。そんなこと、最初からわかってた。わかってたんだけどね。でも、親戚の集まりがあって、ちょっと前に結婚した従姉がもうすぐ赤ちゃんができるのよって嬉しそうに話してるのを見るとね、ああ、もう、なんて言えばいいのかな……」
そこまで言って加奈子の声が途切れ、代わりに千夏が
「夢に見ちゃうのよ、私と加奈子の間に赤ちゃんがいて、三人で嬉しそうに笑ってる場面とか。ううん、そんな日が来るわけないってのは二人ともわかってる。だけど、山内さんは、ずっと夢に見ていた事を本当のことにしちゃったでしょ？　ずっとずっと願い続けて、山内さんは葉子ちゃんのママになることができた。葉子ちゃんに口移しでごはんを食べさせてあげて、葉子ちゃんのおむつを取り替えてあげて、葉子ちゃんに公園であんよのお稽古をさせてあげて、葉子ちゃんに子守歌をうたって聞かせて寝かし

つけてあげる、そんな幸せいっぱいのママになることができた。だったら加奈子と私もママになれるんじゃないかって厚かましいことを思っちゃって」

と、葉子の背中に自分の乳房をぎゅっと押しつけて話しかける。

「私と加奈子、願っちゃいけないことを願っちゃってるのかな。そうかもしれないね。でも、どうしようもないよね。どうしようもなくて、だからね、とっても身勝手なお願いなんだけど、私たちの赤ちゃんになってほしいの、葉子ちゃんに。ううん、ずっとってわけじゃないのよ。山内さんが近くにいる時は、山内さんの赤ちゃん。なんたって、山内さんが葉子ちゃんの『本当のママ』なんだから。ただ、本当のママが近くにいなくて葉子ちゃんが寂しくて堪らない時は、私たちの赤ちゃんになってほしいのよ。うんと可愛がってあげて、うんとお世話してあげて、本当のママが近くにいない寂しさを忘れさせてあげる。だから、どうかな？」

どうかな？と期待と不安が入り混じった声で問いかける千夏に、葉子は「ごめんね、千夏お姉ちゃん。葉子のおしっこで脚を汚しちゃって本当にごめんなさい」と、問いかけに直接答えることはせず、自分のおしっこで千夏の膝や腿を濡らしてしまったことを改めて謝った。

「ううん、いいの。赤ちゃんのおしっこはちっとも汚くないのよ。それに、赤ちゃんのうんちだって、ちっとも汚くなんてないのよ。校外活動の幼稚園や保育所で小っちゃい子のお世話をしてみて、私、本当にそう感じるようになったんだ。だから、葉子ちゃんのおしっこも汚くなんてない。脚は濡れちゃったけど、汚れてなんかない。葉子ちゃんがごめんなさいする必要なんてないのよ」

千夏は葉子のおへそのすぐ下あたりに両腕をまわして耳許に囁きかけた。

少し考えて、言葉で答える代わりに葉子はおずおずと唇を開いて、すぐ目の前にある加奈子の乳首を口にふくんだ。

それを見た千夏と加奈子は一瞬、驚きの表情を浮かべたが、すぐに顔をぱっと輝かせて、互いに大きく頷き合う。

「いいの？　本当にいいのね？」

大きく頷き合って、それから、まだ半信半疑といった表情で千夏が念を押した。

「葉子、ママ、大好き。それに、葉子、加奈子お姉ちゃんと千夏お姉ちゃんも大好き。公園でおむつ取り替えてもらって好きになって、お風呂場で抱っこしてもらってちっちさせてもらって、もっと大好きになったの。おむつにばいばいするお稽古、やだよ。でも、抱っこしてもらってちっちさせてもらうの、葉子、大好きになっちゃった。そんなのママはしてくれないけど、加奈子お姉ちゃんはしてくれた。だから、加奈子お姉ちゃんと千夏お姉ちゃんの赤ちゃんになる。でも、おむつにばいばいするの、絶対、

や！　おむつにばいばいするお稽古しようって言ったら、加奈子ママも千夏ママも、葉子、大嫌いになっちゃうからね」
葉子は加奈子の少し固い乳首を咥え、最初の方は嬉しそうに目を細めて言い、最後の方は少しむきになって言った。
だが、そのすぐ後でちょっぴりしゅんとした表情を浮かべ、
「でも、ママが近くにいたら、葉子、ママの赤ちゃんなの。……ママ、早く帰ってこないかな」
と、少しばかり寂しそうな声で呟く。
すると千夏が葉子の気分を紛らわそうとしてか、
「あのね、葉子ちゃん。私、葉子ちゃんにもう一つお願いがあるんだ。いい？」
と、にこやかな声で話しかけた。
「お願い？　なぁに？」
愛くるしい仕草で葉子が小首をかしげて訊き返す。
「あのね、ちょっぴり照れくさいお願いなんだけど、私のことは『千夏ママ』、加奈子のことは『加奈子ママ』って呼んでくれないかな？　あ、山内さんのことは、名前を付けないで『ママ』でいいのよ。山内さんは葉子ちゃんの本当のママで、名前を付けなくても『ママ』って呼べば、それが山内さんのことだってこと、私たちにもはっきりわかるもの」
今は近くにいない美和のことが話題にのぼったことがよほど嬉しいのだろう、葉子は千夏の話に聞き入って、それから
「千夏お姉ちゃんも加奈子お姉ちゃんも、どっちもママなの？　パパはいないの？」
と、小首をかしげたまま更に訊き返した。
「そうね、二人ともママで、パパはいないね。でも、いいのよ、それで。ちょっと難しい話になっちゃうけど、説明しておくね。説明を聞いて、今はわからなくても、いつかわかってくれると思うから。――加奈子と私は女の子どうしで恋人のカップル。そういうカップルの中には、男の人役と女の人役にきちんとわかれて愛し合う人たちもいるんだけど、加奈子と私はそうじゃないの。せっかく女の子どうしで愛し合うんだから、どっちかの役をするんじゃなくて、自分そのまま、女の子のまま女の子を愛したいの。だから、どっちかが葉子ちゃんのパパを演じてどっちかがママを演じるんじゃない、どっちもママとして葉子ちゃんを可愛がってあげたいの。二人とも、葉子ちゃんにおっぱいをちゅうちゅうしてもらいたいのよ」
言葉を選びつつ千夏は説明した。
「ごめんね、葉子、わかんない。千夏お姉ちゃんのお話、難しくて、わかんない。わかんないから、ごめんなさい。でもね、でも、あのね、こんなふうにしたら千夏お姉ちゃんも加奈子お姉ちゃんも喜んでくれるのかな」
説明を聞き終えた葉子は加奈子の乳首から口を離し、目をぱちくりさせて可愛らしく小首をかしげて千夏に言ってから、

「おっぱいありがとう、加奈子ママ。葉子、加奈子ママのおっぱい、大好き。でもね、次は千夏ママのおっぱいなの。だから、加奈子ママのおっぱい、今度またね」
と上目遣いに加奈子の顔を見てにこりと笑い、千夏の膝の上で体をよじって顔を後ろに向けて
「千夏ママ、葉子、おっぱいちゅうちゅうしてもいい？」
と媚びるような目で千夏の顔を見上げて言い、千夏がゆっくり頷くのを待って、綺麗なピンクの乳首を口にふくんだ。
「聞いた、千夏!?　葉子ちゃん、私のこと、加奈子ママって呼んでくれたんだよ。それで、加奈子ママのおっぱい大好きだって言ってくれて」
「加奈子こそ、聞いてくれた？　葉子ちゃん、私のこと、千夏ママって呼んでくれたのよ。それに、ほら、私のおっぱいにむしゃぶりついて夢中で吸ってくれてる」
互いに上気した顔で確かめ合う二人だったが、そのすぐ後、加奈子が千夏の正面に立ち、二人の体の間に葉子を挟み込むようにして葉子ごと千夏をぎゅっと抱きしめ、
「私たちの赤ちゃんになってくれてありがとう。――二人の間に生まれてきてくれてありがとう、葉子ちゃん。これからずっと、千夏ママと加奈子ママがうんと可愛がってお世話してあげる。いつまでも、ずっとずっと」
と言って、何度も葉子に頬ずりをした。

＊　＊　＊

スマホに着信があったのは、買物を終えた美和が帰りの途についてすぐのことだった。
画面に表示されている発信主の名前は加奈子。
画面をタップすると、
「そろそろ買物が終わった頃かしら？」という加奈子の声と共に、全裸の葉子が、やはりこちらも全裸の千夏の膝に座って乳首を吸っている様子が映し出された。
「な、何……!?」
思わず大声をあげそうになった美和だが、まわりを行き交う人の目を気にして慌てて口をつぐみ、歩道に植わっている木の後ろに身を隠すようにして
「ビ、ビデオ通話はいいけど、いきなり、なんて映像を送ってくるんですか!?　まわりの人に見られたらどうするんですか、ほんとに、加奈子先輩ったら」
と、少しなじるような口調で返事をした。
だが、加奈子の方は美和の困惑などまるで知らぬげに
「だって、嬉しくて、少しでも早く知らせたくてさ。ね、聞いて。葉子ち

やんたら、私たちのこと、加奈子ママとか千夏ママとか呼んで、二人のおっぱいを順に吸ってくれたのよ。あ、それで、千夏のおっぱいにはまだむしゃぶりついたままで、その様子が可愛らしくて可愛らしくて、それで山内さんにも見せたくて堪らなくなって、ビデオ通話で呼び出したのよ。――葉子ちゃんの産湯の様子を撮っておこうと思って浴室に持ってきておいてよかったわ」

と、うきうきと弾んだ声だ。

「ああ、確かに、壁とか床とかを見たら浴室だってことはわかります。でも、『産湯』っていうのは何のことなんですか？　葉子の産湯って」

美和は要領を得ない顔で訊き返した。

「葉子ちゃんがね、山内さんがいない時だけだったら千夏と私の赤ちゃんになってもいいって言ってくれたのよ。山内さんがいない時だけっていうのが正直なところちょっと妬けちゃうんだけど、山内さんが葉子ちゃんの本当のママなんだから、それは仕方ないことだしね。ま、それでね、葉子ちゃんが今日から私たちの赤ちゃんになってくれるってことは、今日が葉子ちゃんの新しい誕生日で、赤ちゃんになってすぐに浴びるこのシャワーが葉子ちゃんにとっての産湯だってことじゃない？　でもって、産湯の様子を写真や動画で残しておきたいって思うのが普通でしょ、『母親』としては。――本当のことを言うとね、葉子ちゃんが千夏と私の赤ちゃんになってもいいよって言ってくれるとは思ってなかったのよ。だって、葉子ちゃんは山内さんにべったりで、山内さんも葉子ちゃんにべったりで、だから、私たちが割って入る隙なんてないと思ってた。でも、だけど、ほんのちょっとは期待してて、ひょっとしたらって思って、もしもそうなったらいいな、もしもそうなったら、シャワーが産湯になるんだなって思って、願掛けのつもりでスマホを浴室に持って入ったの」

美和のスマホに、今度は加奈子の顔が映った後、しばらくして、次は乳首が大写しになった。

おそらく、葉子が吸ったあとの乳首を美和にも見てもらいたくてスマホのカメラの向きを変えたのだろう。

「だから、大丈夫。初日からこんなに私たちに懐いてくれているんだもの、これから一週間ずっと一緒に生活したら、葉子ちゃんが何をしてほしいのか私たちにもはっきりわかるようになって、きちんとお世話してあげられるようになるわよ。だから、夏休みが終わって学校が始まっても大丈夫よ。学校では私たちが葉子ちゃんの面倒をみてあげる。山内さんがいない三年生の教室で私たちの赤ちゃんになって私たちに甘えてくれる葉子ちゃんの面倒、ちゃんとみてあげるわよ」

加奈子は言いながらスマホの撮影を内側のカメラに切り替え、三人の仲睦まじい様子を自撮りしながら自信たっぷりに言ってから、スマホを葉子の顔に近づけて

「ほら、ママよ。葉子ちゃんの可愛いお顔をママに見せてあげてちょうだ

い」
と促した。
　すると葉子は少し名残惜しそうに千夏の乳首から口を離して
「あのね、ママ。ケーキ買ってきて。葉子、ケーキ食べたい」
とスマホ越しに美和にねだり、それに対して美和は
「ケーキ？　そりゃ、買って帰ってあげてもいいけど、でも、急にどうしたの？　誕生日でもないのに……」
と応じたのだが、『誕生日でもないのに』と言った瞬間、はっとした顔になって
「……そうね、今日は葉子の新しい誕生日だものね。私の、それと、加奈子ママと千夏ママの赤ちゃんになる、新しい誕生日だものね。うん、わかった。お店で一番大きなケーキを買って帰ってあげる。だから、加奈子ママと千夏ママの言いつけをちゃんときいて、お利口さんで待ってなさい」
と続け、とびきりの笑顔になって、葉子が
「いちばんおっきいケーキ、約束だよ、ママ」
と、はにかんだ笑みを浮かべて言ってから再び千夏の乳首を口にふくむ様子をじっと見守った。

　それからしばらくの後、帰り道を少し外れた所にある洋菓子店に、
「その一番大きなケーキをください。はい、そうです、フルーツがたっぷりのそのケーキです」
と、大小様々、色とりどりのケーキが並ぶガラス張りの陳列ケースの一角を指差して頷く美和の姿があった。
「承知しました。何かのお祝いとか記念でしょうか？　でしたら、チョコペンでケーキにメッセージをお書きすることもできますけれど、いかがいたしましょうか？」
　美和が指差したケーキを陳列ケースから取り出しながら、店主の妻とおぼしき恰幅のいい中年の婦人が上品な口調で問いかけた。
「あ、じゃ、お願いします。メッセージは『大好きな葉子へ　ママ』にしてください。娘の誕生日なんです」
　美和は少し考え、満面の笑みをたたえて答えた。
「あら、お嬢さんのお誕生日？　それはおめでとうございます。それではローソクもお付けしないといけませんね。何本ご用意いたしましょう？」
　婦人は人なつこそうな笑みを浮かべた。
「じゃ、ローソクは……」
　言いかけて口ごもってしまう美和。
（今日が新しい誕生日だから、ゼロ歳ってことになるのかな。でも、ゼロ歳だからローソクは要りませんって言うのも変だし。なんて答えればいいんだろう。ええと、あ、そうだ。今日は葉子にワンピースを着せてあげたんだっけ。それで、ワンピースを着た葉子、いつもの赤ちゃんじゃなくて、

ちょっぴりお姉さん、幼稚園とか保育園に通ってる園児みたいに見えたんだったよね。でも、ワンピースの下はパンツじゃなくて、おむつで。そうだ、まだおしっこを教えられない年少さんみたいで可愛らしくてしようがなかったっけ。えと、年少さんは三歳で入園するんだったかな。あ、それに、葉子は本当は高校の三年生。学年にも『三』が付いてるから、ちょうどいいや。葉子は三歳ってことにしちゃおう。――お店の人は私のこと、自分の娘の歳もすぐに思い出せない頼りないお母さんだっと思って呆れてるだろうな。でも、仕方ないよね。ママになってすぐの新米ママだもん、仕方ないよね）

ようやく考えがまとまった美和は

「……ローソクは三本お願いします。娘、年少さんなんです」

と答えた。

「年少さんですか、お可愛い盛りで羨ましいこと。うちにも娘がいるんですけど、高校二年生で、生意気なことばかり申しましてね。近頃では、三歳とか四歳とかの頃が懐かしく思い出されてなりません。あ、こちらの事情なんてお客様には何の関係もありませんのに、申し訳ございません。娘を持つ母親どうし、つい口が軽くなってしまいまして。もう少しだけお待ちください。チョコペンのメッセージもすぐに書かせていただきます」

人なつこい上に話し好きなのだろう、婦人は照れくさそうに笑ってローソクを小袋に入れ、チョコペンを手にした。

「これでいいかがでしょう？　年少さんですと平仮名なら読めるお子さんも少なくないようですから、このようにさせていただきました」

作業を終えた婦人がケーキの上面を掌で指し示す。

純白のクリームの上にピンクのチョコペンで、盛り沢山のフルーツを囲むようにして記された『だいすきなようこへ　まま』という丸っこい文字。

「これで結構です。これを見たら娘、とっても喜ぶと思います。うちの娘、もう保育園のお姉さんなのにまだまだおむつ離れできそうになくて、それに、食事も私が食べさせてあげなきゃいけなくて、積み木遊びに夢中になっておむつを汚しちゃっても気がつかなくて、それに、それに……」

チョコペンで書かれた文字を見て、つい葉子のことを知ってもらいたくなって、はしゃいだ声で話し始めた美和。だが、不意に言葉に詰まってしまう。咄嗟に思いついた、三歳という偽りの年齢。なのに、それが本当のことのように思えてしまう。一緒に暮らし始めて二週間しか経っていないのに、なんだか本当に三年間にわたって子育てをしてきたような気がしてしまう。

なんだか胸が切なくなって、鼻の奥がつんと痛くなる。

「どうぞ、お使いください」

婦人がそっとティッシュペーパーの箱を差し出した。

気がつけば、ケーキの手前に置いた手の甲が濡れている。

どうやら、知らず知らずのうちに溢れ出た涙が手の甲に滴り落ちていたようだ。
「あ、ありがとうござ……」
ありがとうございますと言うつもりなのに、胸がつかえてまたもや言葉に詰まってしまう。
「子育てにはご苦労が絶えませんものね」
穏やかな声で言葉短かに言う婦人。
婦人は美和のことを女手一つで幼い娘を育てているシングルマザーとでも思っているのだろうか、それとも、ごく一般的な話として育児の大変さを短い言葉にしているのだろうか。いずれにしても、多くを語らずに同じ『母親』どうしとして子育ての苦労を共有してくれるその短い言葉が胸に滲みる。
「うちの自慢の焼菓子なんですけど、これもお付けしておきますね。お子さんと肌を触れ合わせて一緒に甘い物を食べると、それだけで、これまでの苦労なんて忘れてしまいますよ。お母さんの分とお嬢さんの分、合わせて二つお入れしますから、甘いココアを飲みながらお召し上がりください」
婦人はわざと美和の顔を見ないようにしてローソクや焼菓子と一緒に手早くケーキの包装を済ませ、
「あの、でも、だったら、代金を……」
と涙声で言う美和を
「お嬢さんと一緒にお召し上がりいただいて、お気に召しましたら、うちのお店を贔屓にしてやってください。上得意様になっていただくための宣伝ですので、どうぞご遠慮なく」
と制して、ケーキの代金だけを受け取った。

ありがとうございました、お嬢さんを可愛がってあげてくださいという明るい声に見送られて店を出た美和の目の前を、少し気の早い赤とんぼが一匹、盛んに羽根を震わせて飛んで行く。
むくむくと湧き上がる入道雲。
だけど、空は少し高くなったように思える。
「そろそろ、秋物と冬物のベビー服をつくる準備をしておかなきゃいけないかな。それに、おもらしの回数が増えてきたから、おむつも縫い足さなきゃいけないし。やれやれ、いつまでもおむつ離れできない娘がいると困っちゃうわね」
飛んで行く赤とんぼを目で追いながら、困っちゃうわねと呟いて、なのに、その顔には困ったような様子は一切なく、むしろ、どこか嬉しそうにうふふと笑う美和。
歩道に落ちる美和の影は、葉子を預かった日よりも少し長くなっている。
今は眩いお日様の光でふかふかに乾いている物干し場のおむつが、お日様の光の代わりに、そっと吹きそよぐ秋風で優しく乾く日がやって来るの

は、それほど先のことではないだろう。

ささやかな後日譚

ここから先は、その後の四人がどんなふうに暮しているのか気になる方に読んでいただくための後日譚になります。

このすぐ前のところで読み終えて物語の余韻を楽しみたい方や、この先のことはご自身で想像して楽しみたい方は、ここから先をお読みになるのはお控えいただいた方がいいかもしれません。

年が明けて、春風そよぐ四月。

Ｓ大学の入学式に臨む学生たちの中に、二人揃って第一志望の幼児教育学科に受かった加奈子と千夏の姿があった。

だが、そこに葉子の姿は見当たらない。

同じ頃、Ｓ大学教育学部附属幼稚園の入園式が行われており、そちらに、他の新入園児とお揃いのスモックを着た葉子の姿がある。

一学期に行われた模試ではＡ判定を受けたものの、夏休みの間はまるで勉強していなかった上、二学期が始まっても、制服のスカートの下に着けているおむつの感触に気もそぞろで授業に身が入らず、成績が落ちる一方で二学期の模試ではＦ判定を受けてしまった葉子は、美和や加奈子たちの強い勧めもあって、Ｓ大学への入学を諦め、代わりに、Ｓ大学の附属幼稚園への入園に志望進路を変更した。もちろん、附属幼稚園は葉子の入園に難色をしめしたが、幼い頃からの葉子の境遇を詳述した母親からの特別嘆願書や、保健室をまかされており家庭科部の顧問でもある養護教諭の強い働きかけでＭ高校の校長が提出した特別要望書に加え、Ｓ大学の教育学部に研究室を持つ高名な心理学者が貴重な心理データを得るためのサンプルとして葉子に並々ならぬ興味をしめした結果、特例として入園を認められたのだった。

ただし、おむつ離れの目途が立たず普通の食事も受け付けない葉子が迎え入れられたのは年少クラスではなく、その一つ下の幼年クラスだった。

三つ離れた県に所在するＳ大学に入学するにあたって加奈子と千夏は、揃って家庭が裕福ということもあって、単身者向けではなく、家族向けで部屋数の多い賃貸マンションで同居生活を送ることにしたのだが、そのマンションに葉子も住わせ、大学への通学時に葉子を幼稚園へ送り届け、大学からの帰路の途中で幼稚園に立ち寄って葉子を連れて帰り、マンションの自室では葉子を自分たちの間に生まれた赤ん坊として世話をやき、溺愛するという毎日を送った。

そんな暮らしで一年が過ぎ、新たな四月を迎えた時、加奈子と千夏は二年生に進んだのだが、自分では食事もできず相変わらずおむつが外れる見

込みのない葉子は年少クラスに上がることを認められず、そのまま幼年クラスに留め置きとなった。

そして更に一年が過ぎ、加奈子と千夏が三年生、専門課程に進んでいろいろと忙しくなり、葉子の面倒をみるのが難しくなることが予見された時に、三人の住むマンションの一室での同居生活に加わったのが、家政科の服飾専科を志望してS大学の入試に受かった美和だった。美和は、離れ離れで暮していた二年の時間を取り戻すかのように甲斐甲斐しく葉子の世話をし、際限なく可愛がり甘えさせた。

それからまた一年が過ぎ、加奈子と千夏が大学の四年生で、美和が大学の二年生に進んだ春。美和によってこれ以上はないくらい甘やかされた一年間を過ごした葉子は、二年間の寂しさが癒え、他の園児たちとも積極的に遊ぶようになって、おむつを汚してしまった時も「あのね、先生、あのね、葉子ね、おむつ、ちっちなの」と、随分と恥ずかしそうにではあるものの自分から担任の先生に教えられるようになり、給食も、離乳食のような柔らかい物なら、たっぷり時間をかければよだれかけを汚しながら自分で食べられるようになって、ようやく年少クラスに上がることが許された。三年間という長い年月をかけた後の進級だからママ三人の喜びもひとしおで、進級が決まった日の夕食は大変なご馳走だった。

そうして、次の一年。いよいよ美和が専門課程に入って学業に集中せざるを得なくなり、葉子の面倒をみるのが困難になった時に助けてくれたのは、大学を卒業した後、全国に直販店のネットワークを展開する大手の子供服メーカーの総務部に就職して、働くお母さん達を支援する仕事をしたいからと、（S大学からさほど離れていない場所にある）本社の企業内託児所で子供達の面倒をみる保育職に就いた加奈子と千夏だった。二人はフレックス勤務制の利便性を活用して、他の職員の協力も得つつ、どちらかが葉子を幼稚園へ送り迎えできるようシフトを組み、あるいは、時間単位で取得できる有給休暇を積極的に使って、こまごましたところまで、年中クラスに上がった葉子の面倒をみてやった。

その後は、いよいよ美和が大学の四年生で、葉子は年長さんと、大学と幼稚園も最後の一年を過ごすことになった。この年も前年と同じように加奈子と千夏の手助けがあったものの、卒業制作等に没頭する美和はなかなか葉子の面倒をみてやることができず、その寂しさで葉子も泣きじゃくってしまうことが多いというような、母娘そろって大変な一年間だった。それでもどうにか美和が大学を卒業、葉子が附属幼稚園を卒園できたのは、前年にも増しての加奈子と千夏の手助けがあったからこそだ。

つまるところ、高校三年生の二学期と三学期だけでなく、卒業してからの六年間にわたっても、葉子は加奈子と千夏に面倒をみてもらい、そのおかげで美和も自分が志望する途を着々と歩み続けることができたというわけだ。

それも、この時になって振り返ってみれば、夏休みの間のあの一週間が

あったればこそのことだと、しみじみと思いに耽る美和と加奈子と千夏だった。

そして、物思いに耽る三人の傍らには、幼稚園のお友達と会えなくなるのが寂しいよぉと涙にくれて、ひっくひっくとしゃくり上げる葉子の姿。

大学を卒業した美和は、幸いにも、かつての部活の先輩の後を追うようにして、加奈子達が就職した子供服メーカーに職を得ることができた。それも、大学時代の専攻を活かして、デザイン部門への配属という僥倖に恵まれて。

そして、大手企業に勤めることになって生活が安定した美和は、ずっと胸に抱ていた或る計画を実行に移すことにした。

それは、葉子を養子として迎え入れ、葉子を戸籍の上でも正式に自分の娘とすることだった。

民法の定めるところによれば、自分よりも年長の者を養子とすることは許されていない。

それを美和は、持ち前の用意周到さや豪胆さを存分に発揮してあらゆる伝手を頼り、違法すれすれの手段を講じ、人と人とのつながりを利用し、一つ一つ課題を解消することで、極めて特殊な例外措置として、ついには念願を叶えることに成功したのだった。

その後の美和は、出社すると先ず、加奈子たちが勤務している企業内託児所に葉子を預けて仕事に打ち込み、本来の勤務時間内に成果を出して定時には仕事を切り上げ、早々と企業内託児所に赴いて葉子を迎え出し、夕方の早い時間に、今でも四人での共同生活を続けているマンションに帰って愛娘と一緒にいる時間を大切に過ごすという、公私ともに充実した日々を送っている。

そしてまた加奈子と千夏も、高校生時代からの希望通りに小さな子供たちと接する仕事に恵まれ、仕事を終えてマンションに帰った後はその時々の気分に従って、葉子を自分たちの娘に見立てて可愛がってみたり、新たに購入したクイーンサイズのダブルベッドの上で愛欲に溺れてみたりと、こちらも美和と同様にオフィシャル、プライベート共に満ち足りた生活ぶりだ。

そんな或る日の深夜、葉子のおむつがおねしょで濡れていないか確かめるために目を覚ました美和。

明かりが灯っていない部屋からは窓ガラス越しに、新月で月明かりが全くない夜空に瞬くたくさんの星が見える。

想像もつかないほど遠くにある星が発した光が自分の目に届くまでに必要な悠久の時間にふと思いを馳せ　真っ暗な部屋で星の瞬きを見ていると、自分の体がふわっと浮き上がって星々の世界に吸い込まれるような錯

覚を覚え、限りない寂寥感に背中をぞくりと震わせてしまう。
そこへ葉子の
「……ママ、大好き……」
という声が聞こえて、はっと現実に返った美和は深く息を吸い込んだ。
葉子の顔をそっと窺い、目を覚ましている気配がないのを確認した美和は、
「寝言でも私のことを大好きって言ってくれるなんて、本当に可愛い子」
と相好を崩して呟き、おねむの間にお腹が出ないようにとパジャマ代わりに着せているロンパースの股間に並ぶボタンを外して、あらわになったおむつカバーの股ぐりにそっと指を差し入れた。
すっかりお馴染みになった、指先から伝わってくる、ぐっしょり濡れた布おおむつの感触。
「おねしょでおむつを汚しちゃったのに、まるで気がつかないですやすや気持ち良さそうにおねむなんて、本当に困った赤ちゃんなんだから」
苦笑交じりに、けれど嬉しそうに今度は口に出して呟いて、美和は葉子のお尻を包むおむつカバーの腰紐に指をかけた。
それとほぼ同時に葉子が
「……葉子、ママ、大好き……」
と再び寝言で美和に呼びかける。
「ママも葉子が大好きよ。いつまでも手の掛かる赤ちゃんのままでいる葉子のこと、ママ、大好きよ」
おむつカバーの腰紐をゆっくりほどきながら美和は穏やかな声で返答した。

その時、ふと、美和は全てを理解したような気がした。
両親の不仲をどうすることもできず、いい子でいることに疲れ果ててしまった葉子。自分の無力さを痛いほど思い知らされたその虚しさと寂しさは、いかばかりのものだったろう。
その時から葉子は、『自分が寂しい状況に置かれる』ことに極度に怯え、実際そのような状況におかれた際には身体の基本的な機能を司る神経さえもが本来の働きの一部を停止するほどまでに心が乱れてしまうようになっていた。
そんなふうにして心の一部に深い傷を負ったまま成長し、成長する間に、常に共にある寂しさが自我の一部になってしまい、『自分が寂しくなくなるような方法を模索する』ことなど意識の外に捨て去ってしまって、自分が実は寂しいということさえ忘れてしまった葉子は、だがと言うべきか、だからこそと言うべきか、いつしか、他人がひどい寂しさに苦しむ様子を見ることに絶えられなくなり、他人の寂寥感を取り除いてやりたいと（無意識のままに）切に願うようになっていた。
葉子と同様に両親の不仲に心を痛めながらも、わざと気丈に振る舞い続

けた美和。
最愛の者とどれだけ愛の営みを重ねても子を成すことができない加奈子と千夏。
それだけではない。考えようによっては葉子の両親もまた同じではなかったか。一卵性双生児として共に生を受けた妹に恋をし、だけど添い遂げることができないことをわかっている故に偽りの結婚生活を送った母親と、己の保身のために偽りの結婚生活に荷担した父親。
美和と加奈子と千夏は葉子を自分の幼い娘に見立てることで自分を慰めて寂しさを減じ、葉子の両親は、二人の接点でいようとする葉子がいたからこそ、寒々しい二人の間においても幾ばくかの潤いを得ることができ、そして、美和や葉子自身も知らぬ所で葉子に惹かれ葉子のおかげで、いいしれぬ寂寥感から免れることができた、おそらくは美和の両親や、ひょっとしたら、保健室の養護教諭やあの洋菓子店の婦人も含めた諸々の人々。
「なんてことはない、いい子でいることの重圧から私が葉子を救ってあげたつもりでいたけど、本当は私たちの方が葉子に救ってもらったってわけか」
再び苦笑交じりに美和は呟いて、けれどすぐに、却って清々しい顔になって
「だけど、それがわかったからって、それでどうにかなるものでもないしね。どっちが救ったとか救われたとか、そんなのどうでもいいし」
と、わざと大きな声で言ってのけ、自分の大声のせいで葉子が目を覚ましてて「ふ、ふえ、ふぇーん、う、ぅえ、うぇーん」と泣き出してしまったことに気がついて大慌てで明かりを灯し、
「ごめん。ごめんね、葉子。ママが大声を出したせいでびっくりしちゃったね。ちょっとだけ待っててね。すぐにおむつを取り替えてあげて、抱っこしてあげて、おっぱいをちゅうちゅうさせてあげる。だから、ちょっとだけ我慢してね」
と、いつもの『ちょっぴり頼りない母親』の顔に戻って、泣きじゃくる愛娘をあやした。
そこへ、葉子の泣き声を聞きつけた加奈子と千夏が勝手にドアを開けて部屋に押し入り、
「なぁに、また葉子ちゃんを泣かせちゃってるの？　そんなことだったら、いつでも私たちが葉子ちゃんを引き取ってあげてもいいのよ」
「そうそう。仕事にかまけて育児もちゃんとできない山内さんより、私たちの方がずっと葉子ちゃんのママにふさわしいんだから」
と冗談交じりに言って、美和が葉子のおむつを取り替えるのを親身になって手伝ってやる。
ママ三人の手でおむつを取り替えてもらった葉子は、美和に優しくお腹をたたいてもらっているうちにすっかり泣きやんで、うつらうつらとして、

いつしか再びすやすやと安らかな寝息をたててておねむになった。

葉子を寝かしつけた後、

「やれやれ、すっかり目が覚めちゃった。明日は休日だし、せっかくだから、ビールでも飲まない？」

加奈子が言って始まった、ささやかな宴。

（私たちはあの夏休みのことを忘れはしない。高校生時代の、あの夏の日に起きた事を忘れるなんて絶対に）

何本目かのビールの缶を開け、久々に一つの部屋に集まったみんなの顔を見ながら美和は胸の中で呟いて、ふと窓を見た。

部屋の明かりを反射する窓ガラス越しでは星は見えなかった。

見えなくていいやと美和は思った。遠い星が大昔に発した光なんて見えなくてもいい。私たちは今この時を生きているんだし、これから先の時間を生きるんだから。

何度目かの乾杯をして、美和はビールの缶に口を付けた。

加奈子の肩越しに、ベッドですやすや眠っている葉子の寝顔が見える。

（葉子はこの先ずっと、ビールのおいしさを知らないままなのよね。でも、その代わり、いつまでもいつまでも、ママのおっぱいを吸わせてあげる。その方が葉子は嬉しいよね）

美和は無言で葉子に話しかけて、口に付けたビールの缶を傾けた。